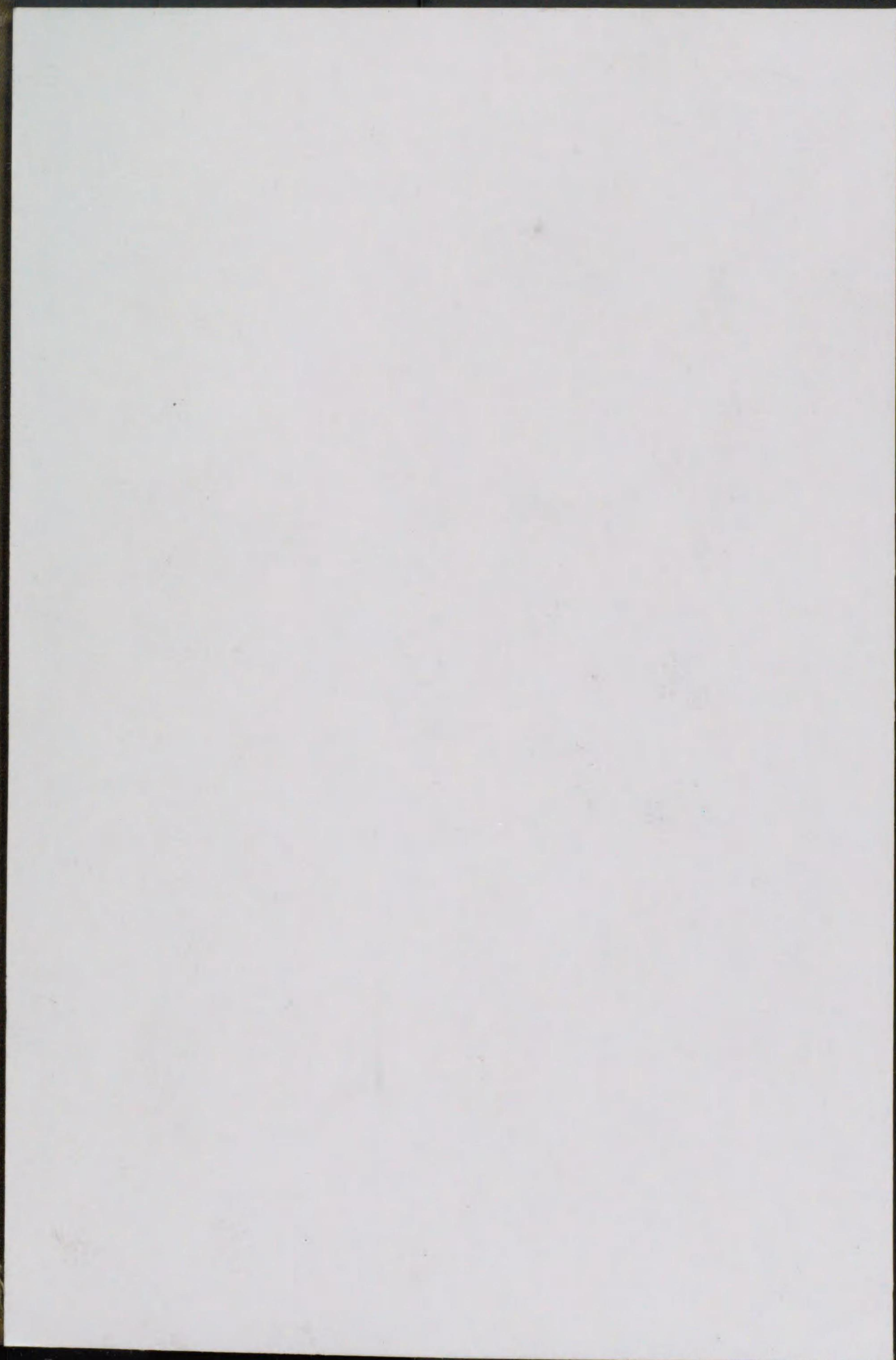


598
33

598-33
1200501529016



納本



牧

水

全集

第十二卷

第十二卷



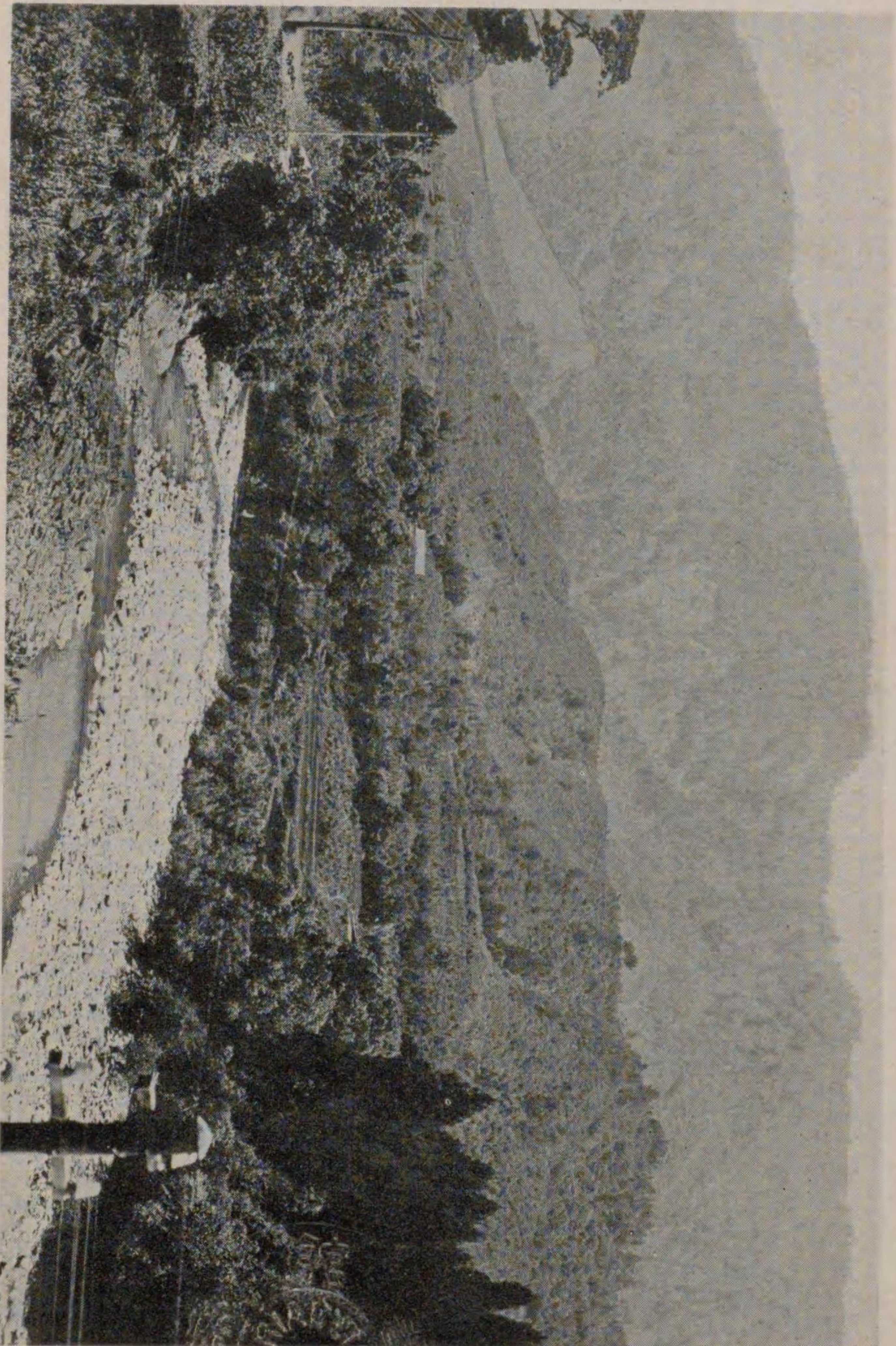
牧

水

全集

第十二卷

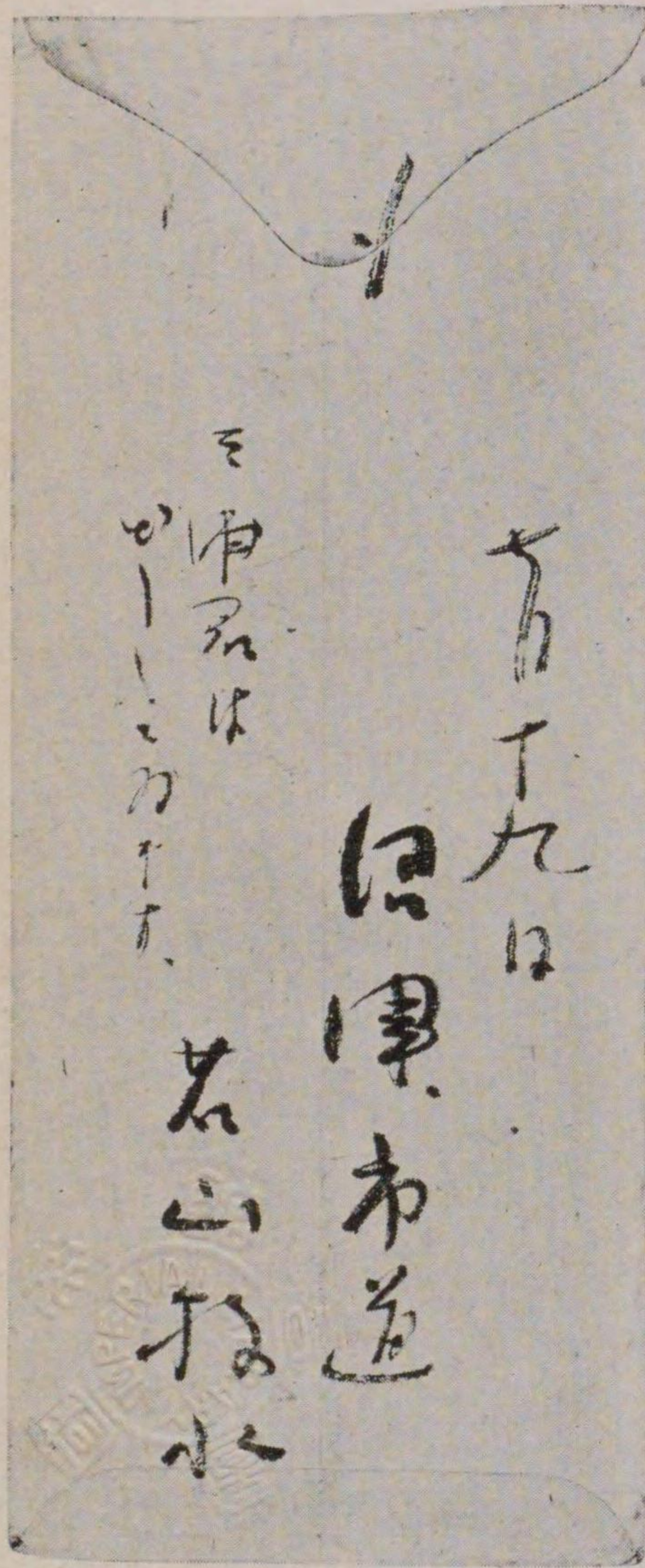
第十二卷



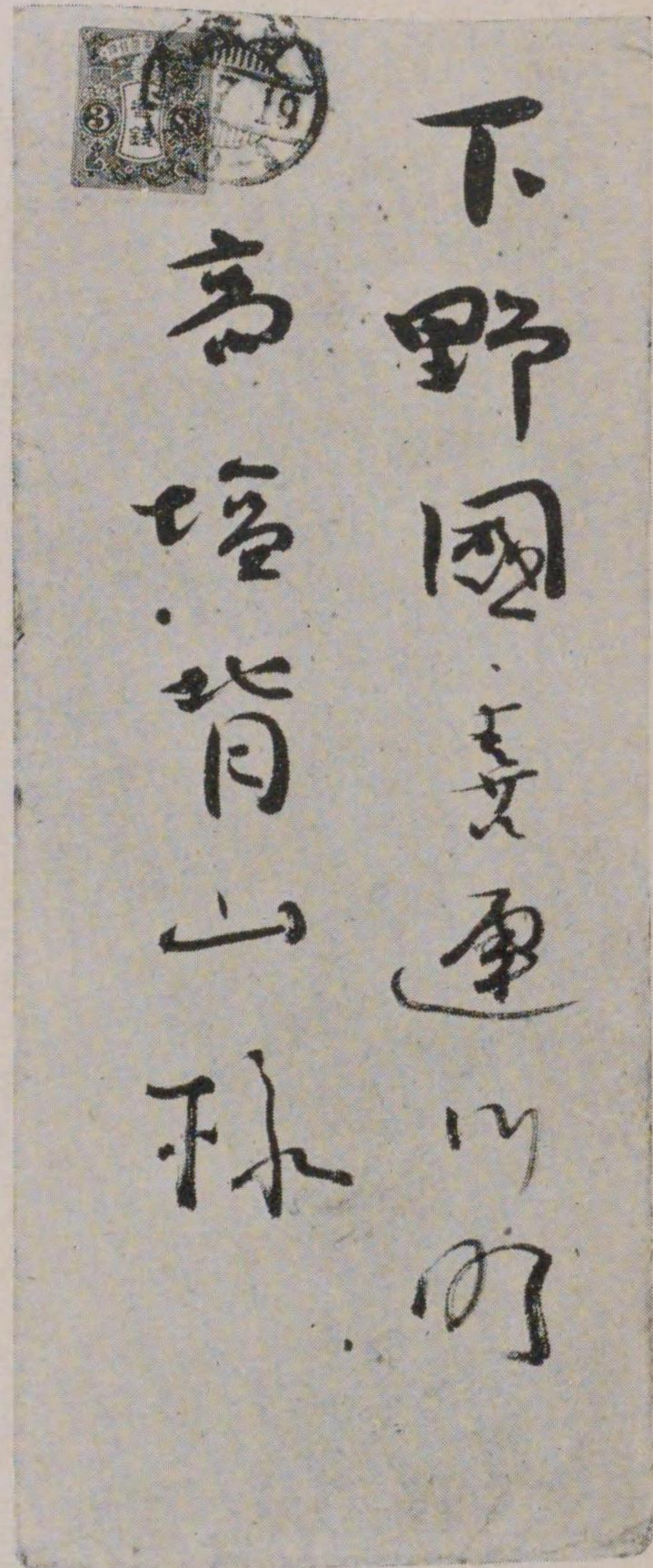
川山の郷故



淡路島
大島
島嶼
島嶼
島嶼



(年五十五大) 筒封

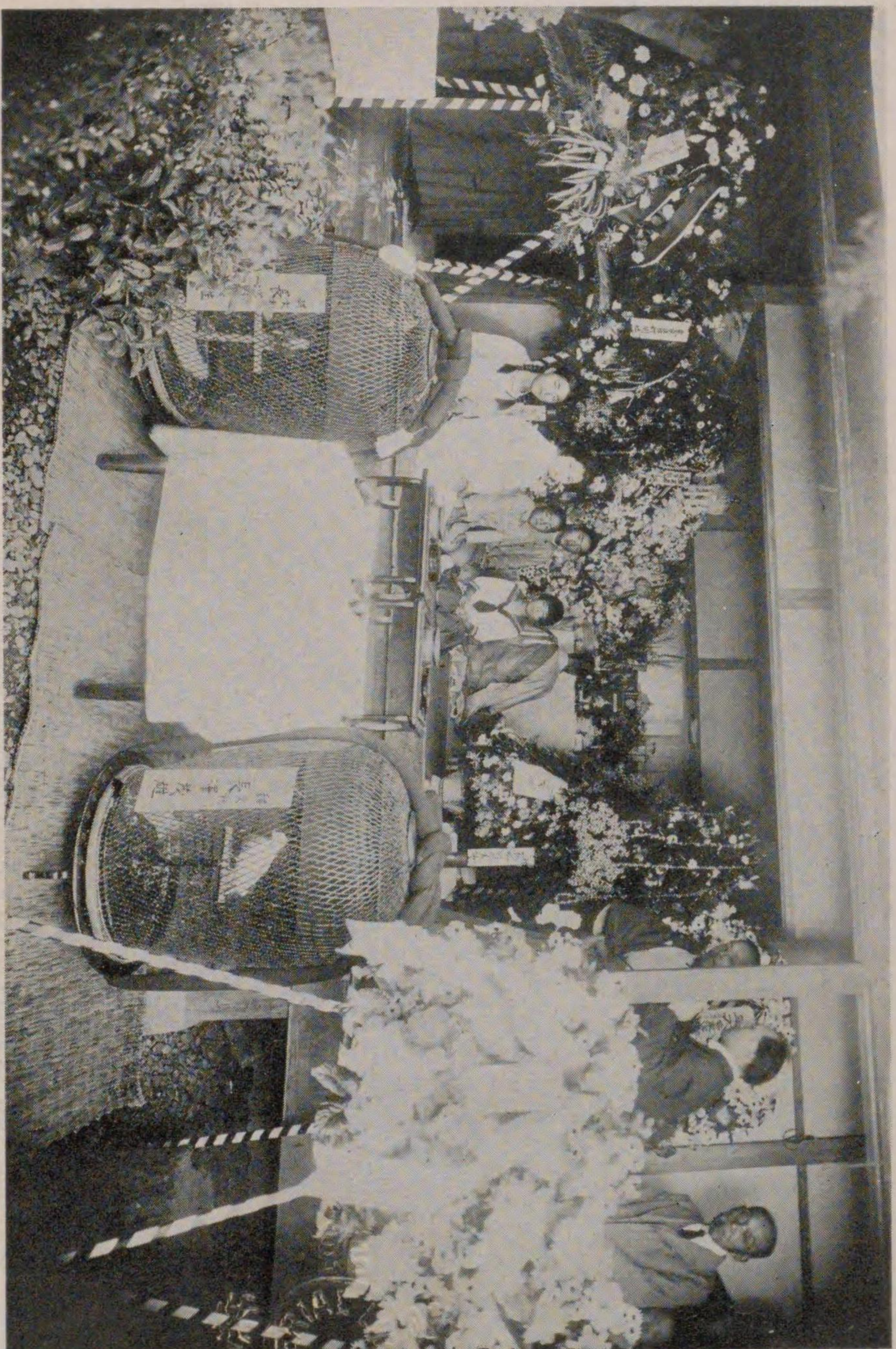




館本不取
 引いたし、おんまを
 御つたし、おんまを
 ざくらの海軍中尉
 伊たんまゝには軍
 美しうおんまを
 蘇我の中尉も
 しくつたおんまを
 錦々奉りおんまを
 つけたし、おんまを
 北へおんまを

乃命斗風こと比来也
 かつた。
 自のわが脚日、自然雲の
 煙でいらせすか。三王
 口から吐のす心、さ
 急おつたは、おんまを、
 ちし
 ぬ、おんまを、おんまを
 の方、おんまを、おんまを
 耳、おんまを、おんまを
 四月九日
 館本不取
 水





(月九年三和昭)場式別告



898-33

書簡

第十二卷書簡・日記・年譜目次

大正十三年(六〇通).....	三
大正十四年(七八通).....	四五
大正十五年(七四通).....	二五
昭和二年(七一通).....	一七一
昭和三年(二八通).....	二二三
明治三十五年.....	二四一

日記



22-898

年

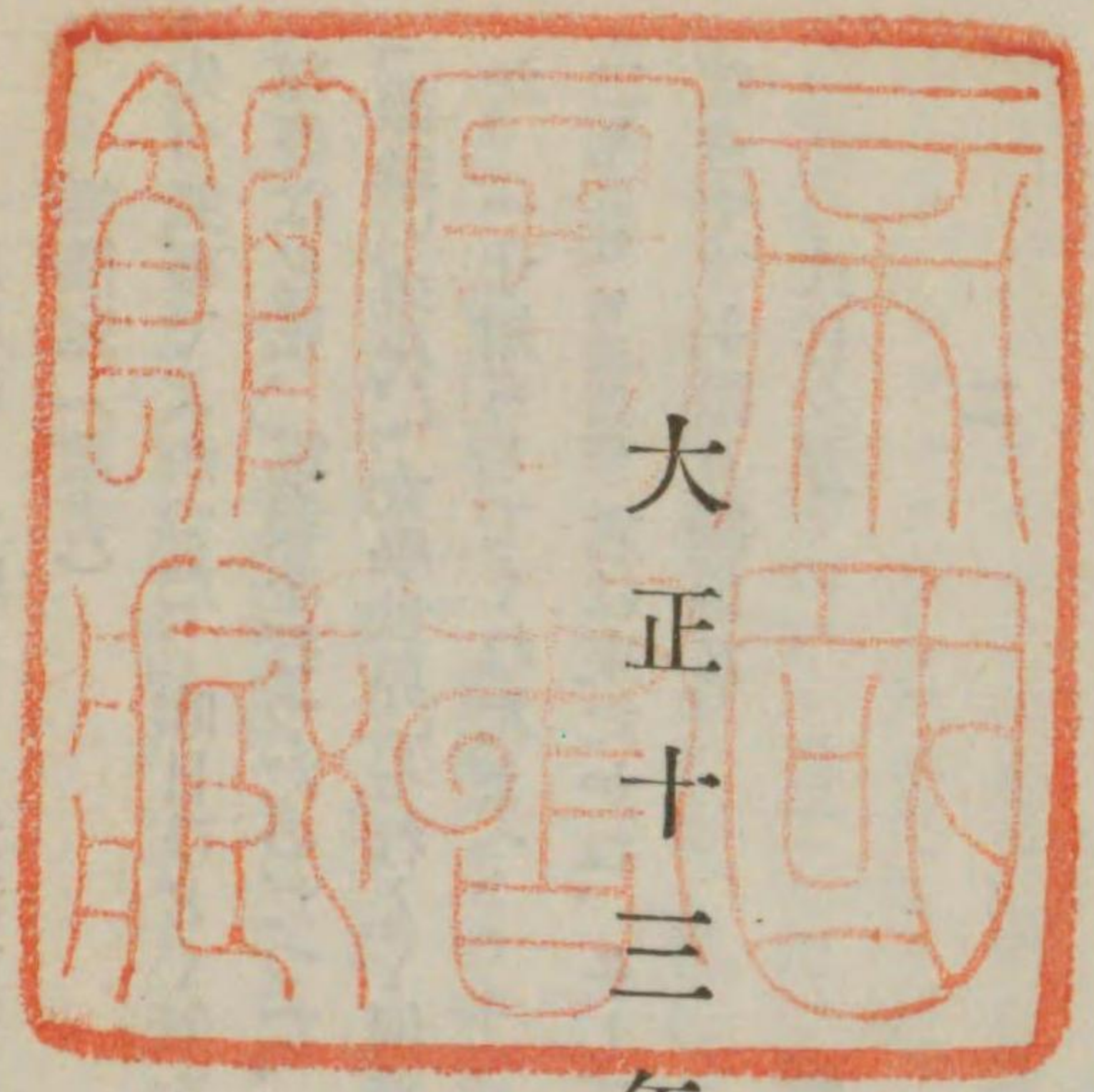
譜

昭和三年	昭和二年	大正十五年	大正十四年	大正十二年	大正十一年	明治四十五年	明治三十七年	明治三十六年
.....
四八五	四七五	四三九	三九五	三九三	三八五	三八一	三六九	二七一
								二五五

書

簡

二



大
正
十
三
年

一月八日、土肥より、沼津市若山方、大悟法利雄様宛（葉書）

先づ無事でよかつた、昨日ひどく氣をもみ昨夜イヤな夢など見、電報を打つたのだつた、

「雄辯」現代「女學世界」それ〴〵何首とるのだつたか、一寸知らしてくれたまへ、

二九註、竹添履信君は来たかね、そして宿は？他に事なきや、矢張り満員だ、

八日夕方

牧 水

二

一月十四日、土肥館より、沼津市若山方、大悟法利雄様宛（葉書）

いろ〴〵難有う、新聞の歌の出しかたは實に失敬極る、もうこそ新聞には出さない、西川節子にはびつくりした、社からも何か云つてやらねばわるいか知ら、今日、「国歌」と「名古屋」へ原稿を送つた、二

三日他の爲事を續けて「創作」にかゝる、二九君の宿があつてよかつた、梅原註、龍三郎といふ人に僕も逢ひたかつたナ、茨木は東京に行つた、入退社、振替の現状、菱花集申込、等々、知らしてくれ、

十四日朝九時

牧 水

三

一月十八日、伊豆土肥温泉土肥館方より、沼津市、金澤修二様宛（手紙）

金澤君、やつぱり君があなといけけない、

けふ、變な奴等が来たのだ、多分朝の舟で（奥からだか沼津からだか知らない）来たのでせう、二組の若い夫婦だ、無論急造夫婦だ、來ると「まつ」の間に通された、そして其處で騒ぎ始めた、イヤ、どうもそのキタナイこと、云つたら！騒ぐといふことには相當理解を持つ小生といふと雖も、あとの方では、筆をおいて、たゞ徒らに鼻目をしかめざるを得なくなつた、——因果と、丁度或る原稿を書きかけてゐたのですよ、

そして散歩に出た、行くところもなし、茨木夫人を訪うた所、木戸があかない、しかたがないから屋形の方にも行くべえと思つてそちらへ向つたら、ソラ、晝をかく、若い宮澤君に出會つた、強ひられてその宿に行つた、彼と同宿してゐる（一軒の家をかりて）菊池といふ男は、なか〴〵いゝ繪をかいてるのですよ、しかもこの正月に酒を飲んで、夜更しをして、カッケツをしたのださうだ、それでゐて實に氣焰萬丈、氣持のいゝ男でした、其處でやゝ小生も氣持を直して歸つて來たが、机にも向つたが、やつぱりダメだ、

もう一度出直して、湯殿の上の井元君たちを訪ねた、そして小一時も話して歸つた、その間に、彼等もその「まつ」の間に來たヤバンジンどもにことごとくなやまされた話が出たのです、

（中略）

と、いふ次第で、昨夜は小生も藥を強目に用ゐてぐつすりと眠つた、何しろ、昨夜君がおゐでかつたら君の部屋に一晚厄介になるところだつた、

何彼につけて淋しくていけない、

沼津はいかゞです、電報にはオドカされました、ア、御めんどうなことを難有うございました、

ツルちゃんとうたちゃんとは退散しました、却つて空気がよくなりました、たゞ昨日「まつ」の間に行つたのがウタカツルかだつたらもつと面白い活劇が見られたらうと惜しまれました、可哀想にアキちゃんも持つて行つたお火だかお湯だかを引つかへて逃げ出したのださうです、アーメン、

來たしるしに何か一つあとに残る爲事をしてゆきたいと考へてゐますので、小生の歸りはやはり廿五六日或はもつと月末よりになるかも知れませんが、沼津は何かにまきれやうと思ふからゆつくり待つて、下さいよ、

今日は君からおたよりがありさうだが、とりあへずこれだけ封をしておきます、山本のおばアさまに呉々よろしく、

「たけ」の間はまだ静かだぞ、

十八日朝七時四十分

金澤修二様

うめの間主人こと 牧 水

四

一月十八日、土肥より、沼津市若山方、大悟法
利雄様宛（手紙）

アトトンよ、相變らず君も忙しいらしいね、
今日一杯書けるだけ「作法」を書いて（實は昨日
午後書きかけたのだが邪魔が入って出来なかつた）
明日から「創作」にかゝらうとおもふ、十九、二十、
と二日あれば大抵済むとおもふ、で、廿一日朝の船
で来て呉れないか、その時大體の編輯を終へて廿二
日なり三日なりに印刷所へ渡さう、そのことを一寸
耕文社に云つておいて下さい、大抵二十日まで済
ますつもりだが萬一濟まなかつたらその日の夕方打
電する、

「批評と添削」の材料をさう云つてやつたが、實は
今度は題附あたりの人のをタネにする積りであつた
ので、君の来る時にその古原稿（たしか、書棚の何

處かに入れてある筈）を持つて来て下さい、頁をき
めてあとから書いて送ります、然し、若し今日あ
たり右の材料が来たならそれによつて書いておいて
い、

それから黄紙に先に印刷させたいと思ふので、そ
れら募集の六號ものをも送つて下さい、だが、これ
は君と相談をしながら取捨をきめたいから君の来る
時に持つて来て貰つて、一日か二日の間にまとめる
方がいゝとおもふ、第一行數かぞへが僕では出来さ
うにない、

「菱花集」と、先日の旅の紀行とをまとめてゆきた
いから、どうでも今月一杯はあることにならうとお
もふ、

「名古屋」には出たか知ら、「国歌」には間に合はな
かつたかと心配してゐる、

「女性改造」二月號を送つて下さい、来てなかつた

ら一部買つて送つて下さい、それから来る時にはへ
ルメスを一壇、いつもの家になくば他の藥店で大壇
を買つて来て下さい、

二九君は如何、

十八日あさ

牧 水

利 雄 様

五

一月十八日、土肥より、東京日々新聞社編輯局
松原至大様宛（手紙）

拜啓 別便にて選歌（第二回分）を送ります。こ
れで先日當地宛お送り下さつた分は全部です。實は
まだ十一月十五日御發送になつた分から三包ほど持
つて来てゐるのですが、いつそそれらを捨て、しま
つて、新しい分を少し厳選にして出してゆかうと考
へます。であとに来た分がありましたら、この廿四
五日にこちらに着く様にしてお送り下さいまし。も
う一回こちらで見てゆきたいと思ひます。いろ／＼

御都合がおりでせうが、どうか投稿者たちの氣勢
をくじかぬために、出来るだけ澤山出して行つて下
さいまし。出ない方が小生は樂ですけれど、諸君が
可哀相です。

すつかり遊んでしまひ、豫定して来た爲事にこれ
からとりかゝる有様で、自然今月一杯位はこちらに
ゐることになりませう。もう飽きましたけれど。

一月十八日午後

若山 牧水

松原至大様

六

一月廿八日、伊豆土肥温泉土肥館より、島根縣
小豆澤錦潮様宛（手紙）

小豆澤君、すつかり御無沙汰してゐます、まつたく、
ゆつくり友人に手紙を書くといふ様な時間は現在の
小生に絶無なのです、少し考ふべきことだと思つて
はゐます、

お變りなくて結構です、小生も元氣は元氣です、本
物かどうかは自分にもわかりません、

君のお歌、まだ本統は本物ではないと見てゐるので、うまく當ればいゝけれど、當らぬとなるとまことに氣の抜けた、融通のきかぬものなる様です、二月號詠草として送られたものがそれでした、しかも近來に見ぬ拙さでしたが、どうしてあゝだつたでせう、いつか君の歌に對して手紙を書きたいと思つてゐた時でしたので、あれを「批評と添削」の中の題材として忌憚なき批評を加へておきました、心やすだてに多少痛罵の形になつてるかも知れませんが、とにかく御一讀下さい、そして多少とも小生の言葉が當つてゐるとお思ひでしたら一つ奮發して下さい、なほそれから毎月二十首といふのは詠草組あたりの人への規定ですから今後は五十首でも百首でも出來たゞけ送つてみて下さい、松陽新報の誤植、あの新聞をこちらに廻して來なかつたので氣がつきませんでした、お氣の毒でした、お手紙を見るとすぐ取消を申込んでおきました、元且にこゝに來て、まだゐます、或る原稿を書くつもりなのが一寸書き損ねて氣を腐らし切つてゐる所

です、あきらめて二三日うちに歸ります、お目にかゝりませんが、奥様によるしくお傳へ下さい、いつかお目にかゝる折があると思ひます、とりあへず右まで、

一月廿八日 伊豆土肥にて 牧水 生
小豆澤錦潮様

七

二月十日、沼津市上香貫より、田方郡土肥温泉、金澤修二様宛（手紙）

三日の正午ころ小松屋に行つた時は全くビツクラしましたよ、まるでカッパに尻毛を抜かれた形でネ、あのあと、まだ一二晩、沼津を泳ぎました、流石に疲れて青くなつてゐたところへ、東京の歸りだと云つて大阪第一のサケクラヒ三池薦於がひよつこりやつて來たのです、何しろ奴は支那大陸仕込で、初めから牧水と喧嘩をする氣で來たのだからたまらない、うちで飲み町で飲み三晩飲み續けて結局昨日尻尾を

二月十日

牧水

金澤修二様

信州の母が病氣だといふので妻は都合で明日出かけます、スルト小生はおるす番です、

昨日、換氣法として江の浦に二九十八を訪ねた、おかげで幾らかいゝ氣持になりました、岸田や梅原（未成品）や熊谷守一の繪がありました、もう少し頭がよくなつた時出直して例の繪本を見せて貰ひます、

「新潮」を宿の主人に送つておきました、借りて御らん下さい、

八

二月十日、沼津市上香貫より、田方郡土肥温泉、井元卯吉様、中村信郎様宛（手紙）

兩兄足下、送り猪に睨めつけられ、汽船から上るとうちにも歸らず飲まされることになりました、何がサテ飲む程

巻いて逃げてゆきました、残つた牧水も勝利の悲哀で、頭はバカになり、手足はヨヒヨヒになり、フウちゃんに小突かれても尻餅をつく今日の状態です、ツク／＼わが身でわが身が浅ましい、今日初めて机に向つてみればどうしても字が書けない、ペソをかきながらこれをかいてゐます、お手紙難有う、だいぶ鼻息が荒いので、悉くアテられてゐます、イヤにどうも讚美したものだとか何だかこつちが氣がへんになりました、ま、せつかくノボせておゐで下さい、陽氣も丁度頃加減でござりやせう、

戲談は抜き、井元、中村、浅見の諸氏に君より呉々よろしくおつしやつておいて下さい、それ／＼お手紙頂きながら、右の始末で、字がかけない、二三日たつて御返事しますとおつたへ下さい、浅見さんの兄さん、今日、行きましたか、

何しろ、土肥は戀しい、こんなに幾日も騒いでる位ゐならいつそじいつと湯に浸つてをればよかつたとくやまれます、何も因果だ、あきらめろ／＼、

に喰ふほどに沼津の飲食物ももうほとほと盡き果つるかと思つたところ、案外に氣の優しい猪どのであつたと見え、オレはもう歸るよ、待つてゐるからなアとばかりで早々に尻尾を巻き伊豆の國は土肥海岸の巢の中へと涎を垂らして歸つてゆきました、ヤレ安堵やおもふ間もなく今度は土地の河童連が大勢押しかけ参り、「土地にゐて土地の正月をせぬ法はあるめエ」と凄いい見暮、御尤もとまた共々に泳ぎ始めて二三日も泳ぎましたか、もうこれで打切りだらうと胸なでおろすいとまもなく來るも來たり大阪の果から一つの怪物が咽喉を鳴らして出て参りました、しかたがねエ、斯うなれア覺悟をきめたとまた花々しく對陣、どうやら其奴をも盛り殺して蕪包みとし、えんやらやつと昨夜のこと、汽車に積んで西方淨土へ追つ拂つてしまひました、もう大抵この邊で世の中安泰と相なるだらうとは考へます、が、何しろそんな有様で葉書一本書くひまなく、貴兄たちより御手紙を頂きながらも御返事一つようしませんでした、どうか悪しからず御ゆるし下されたくと延引な

がらお詫び申します、土肥もいよ／＼春が更けてゆきます由、もう少しお湯にゆだつてゐればよかつたどくやまれてなりません、土肥館にもその後もうあの様なバケモノ族は來ません、御同様無事安泰であつてくれかしと祈られます、何だかあなた、ちが仲よく日向ぼっこをして居らるゝ所を想像すると羨しくて困ります、金澤君も大よろこびの様子で、毎日二通位ゐるの手紙が参ります、精々仲よくして下さいまし、ブル／＼顛へる手先で馬鹿喃を書きつけました、御判讀下さいまし、

館内美人連御一統へも兩兄よりよろしく御傳言下さいまし、「梅の間があいたのでワッチアもうほつかりしたわよ」といふ聲が頻りに聞えたこととありました、とも御傳へ下さいまし、

二月十日、雨の夕

牧 水

中村信郎様
井元卯吉様

九

二月十二日、沼津市上香貫より、信濃、中村終花様宛（手紙）

中村君、

残念だし、君に濟まないしするけれど、矢張り今度は行けさうになくなつた、雪見は夙く諦めてゐたが、君の方と松本とだけへは一寸でも顔出しをする氣でゐた、それも此處七八日の間でなくては日限がわるかつた、ところへ昨日急報で、喜志が今朝一番の汽車で廣丘の方へ歸つて行つた、母が病氣だといふのだ、急にどうといふ病氣ではあるまいらしく思はるゝので自然滞在も永引くものと見ねばならぬ、富士人まで置いて行つたので、とてもその留守の間は小生家をあけられない、土肥でぐづ／＼してたのが悪かつたのだが（これももわけはあつた）どうか悪しからず許して呉れ、そして、君から他の諸君へは右様の事情を傳へてくれたまへ、

松本の高橋君には何だかこの手紙をかくのが一層心ぐるしい、

君は一體何をしてゐるのかね、いまは割合にヒマな時間ぢやアないの、

御同様まづい酒を飲むのに忙しいのかとも同情するが、黙り合ひつこは氣がきかない、葉書でもよこしてくれ、

僕、實によく飲んだ、暮の廿六日が皮切りで、正月の十二日まで、一寸間をおいて廿四五日からツイこの三四日前まで、その二つの間、例の晝夜ぶつとほし式を續けて來た、また、意地悪くも元氣でね、入り替り立ち替りやつて來る奴を（みなそれが相當な奴ぞろひなのだよ）片つ端から撫で切りにして、しかもなほヅケ羅漢（？）としてゐるのだからね、われながら淺間しいとおもふ、また燈火滅せむと欲して何とやらといふその何とやらぢやアないのかと夜半水を飲みながらひそかに自脈をもとつてみる、

三月の中旬、日向まで一寸歸つて来ようと思ふ、どうも近來老母のことが氣になつてしやうがないのだ、冷かすべからずこれで根は本統の孝行息子なのだからね、旅人を餌に連れてゆき、お袋をこゝまで引出さうと思ふのだ、御感想如何、

二月號の僕の歌、どうだつたらう、君はその後ずつと怠けてゐるのか、三月號に間に合はぬかな、十七八日まで待つが、

お詫だけ一寸書くつもりが、ダラ〜と長くなつた、

君の御家族たちにも吳々よろしく申上げてくれたまへ、今度はお目にかゝりそこねたがそのうちお伺ひしますとね、

二月十二日夕方

これからまた一合戦に出かけねばならぬ、土地の校友會新年會だ、 牧 水

中村終花兄

一〇

二月十二日、沼津市上香貫より、松本、高橋希人様宛(手紙)

高橋君、

何とも面目ないが、終に今度そちらによう行けなかつた、土肥で原稿を書き損ねてひまどり、雪見はその時に諦めてゐたが、君の方と埴科の中村君の方とには一寸顔出しだけでもして来るつもりでゐた、それもこゝ六七日の間でなくては行はれぬ時間だつたのです、ところが昨日急報で喜志が實家の東筑摩郡廣丘村吉田、太田稻雄方へ歸つてゆきました、母が病氣だといふのです、急にどうといふのでもないらしいので、自然滞在も永引くものと見ねばなりません、さうなるとどうしても小生は外出不能になつます、誠に申譯ありませんが、右様の次第、どうか悪しからず思つて下さい、お友達にもほんとに濟まぬとおもふのですけれど、どうか、君より吳々よろし

くお詫びを云つて下さい、なんだか細々と書いてゐられません、たゞ、右の事情とお詫びとだけを書いてこの手紙を終わります、

二月十二日

牧 水

高橋希人様

一一

二月十二日、沼津市上香貫より、長崎、大橋松平様宛(手紙)

三月廿日に三郎追悼會をやるといふのはほんとうか、ほんとうなら小生もほんとうに出かけます、もう一度しつかりと聞かして下さい、但し、小生の行くことは一切黙つて下さい、其處から日向へ廻つて来たい故、黙つて通らないと身體がもつまいと思はれます、で、ほんのこつそりとかけることにしたいのです、ともすれば子供をも一人つれてゆかうかなど、考へてゐるのですから、とりあへず、右、確實のところをおきかせ下さい、今からあれこれのやりくりにかゝる必要があるのでは

す、

こんどこそ逢へるかなアみんなに。

二月十二日

牧 水

大橋松平兄

一二

二月廿八日、沼津市上香貫より、大阪、大島武雄様宛(手紙)

三池君、

平田君、

大島君、

三君足下、いよゝ出かくることにきめました、長崎の日取(三郎三周忌の)がきまつてゐないが多分三月十六日でせう、すると三月八九日當地發、熱田一泊(旅人を伴れますので飽かせないため)、あなたの方へゆくのは九日か十日の夕方になります、先日、三池君にいろゝ云ひましたけれど運わるくすつかり身體をこはしてしまつてゐますので、その夜、何處かで、君たち三君だけと會合して一晚御厄

介になりたいと思ひます、大會の事についてはその時篤と打合せたいと思ふのです、そして、翌朝早く立つて宮島までゆかうと考へてゐます(御免なさい、酒毒で字がかけない)、そして、他の人々には小生の行くことを一切洩らさずにおいて下さい、そして、あとでは、當夜突然小生から電話がかゝつた位のことにして置いて下さい、どうかこのあはれな我儘をゆるして下さい、

時日は確定次第、お知らせ申します、とにかく一寸でも逢へるのが嬉しい、萬事その節にゆづります、

廿八日

牧 水

武雄 兄

春一 兄

蔦於 兄

大島君、(同封の手紙)

紅丸とか紫丸とかいふ船は毎日出るのでせうか、そして何處々々へ寄つてゆくのでせう、都合では船にしようかとも考へてゐます、

それから皮のカバンを一つ買ひたいと思ふのです、もう一つ、位牌を、位牌は長崎から日向へ廻り十一月の亡父の十三周忌を繰上げてして来ようと考へますのでそのためなのです、この二つの店はどの邊にあるか見當をつけて置いて下さいませんか、いつも御めんたうながらおねがひ申します、一泊をば君のお宅におねがひ出来ないのでせうか、

一三

二月二十八日、沼津市上香貫より、信濃、吉江

豊様宛(手紙)

拜啓、平常の御無沙汰がいつも容易に筆を執らせませんでした、今度喜志よりこまゝ御噂を承り非常なお親しさを覺え斯うして突然手紙をさしあげます、亂筆御免下さいまし、

夙くにお伺ひ致さねばならぬことを承知しながら何彼と事に紛れてお伺ひ致さぬばかりか寒暑の御見舞をも申しあげず、只今までは誠に失禮のみ續けて参りました、その癖、心のうちにては速く御近づきに

なりたいとのみ思つてゐたのでしたが性來の懶惰と機會のなかつたのが邪魔をして只今まで終にお目にかゝる事すら出来なかつたのであります、今回喜志の参りました節甚だその事御立腹なりし由にて實に穴にも入りたい思ひが致しました、然し、今度こそ強ひても機會を作つて親しく參上、お目にかゝつていろゝのお詫をも申しあげまたお話を伺ひたいものと決心致しました、遠からず突然お驚かし申す時のあるのをお待ち下さいまし、

勝手なことのみ申してをりました、今回はまたいろゝと御世話様に相なりました由、まことに難有うございました、あれやこれやこまゝとの土産話を聞いてゐますと當人よりも小生の方が遙かに嬉しくなるのを覺えました、厚く御禮申しあげます、姉上様にも右様よろしく御傳へ下さる様御願ひ申します、また、いろゝとのお土産物を頂き恐縮でございました、

とにかく小生も近々お伺ひ致しますが、あなた様も御ひまの折こちらまで御遊びにお越し下さい

ませんか、老書生暮しの亂暴至極な朝夕を御らんになりますのもまた御一興かと存ぜられます、小生の三月八九日より四月上旬まで中國九州地方へ旅行致しそれよりはすつと在宅、いつにてもお出で下さいます様お待ち申します、何卒揃ひにてお越し下さいまし、

お噂に甘え永々と筆をとりました、失禮のほど

御容赦下さいまし、

二月廿八日

若山牧水

吉江豊様

御子息様たちへも宜しく御傳言下さいまし、

一四

二月廿八日、沼津市上香貫より、福岡縣、三苦

治様宛(手紙)

三苦君、

毛利君、

終にお目にかゝる時が來ました、この三月十六日に

長崎で中村三郎の三周忌追悼會をやるさうです、それに出席し、合せて郷里に亡父の十三回忌を営みたく、多分當地を來月八九日のころに立つて出かけます、長男をも伴ひます、途中三四ヶ所下車、十三四日のころ君たちの方へ着くことになるだらうと思はれます、非常に健康を損じてゐますので、途中殆んど誰にも逢はずに行きますが、八幡戸畑をばどうも素通り出来かねます、どうかそのお積りで極くひっそりした會合を催して下さいませんか、社友だけのホンの内輪の會合を作つて頂きたいと我儘ながらおねがひします、

貴地着の日は確定次第お知らせします、とにかくお目にかゝれる日が來たとおもふとそれだけでも實に嬉しい、すべての諸君へ、また、御家族へ、吳々よろしく申しあげておいて下さい、少し迷つて、(金や身體の事で)ゐたのですけれど、一兩日前、漸く覺悟をきめましたので、とりあへず右のみお知らせ申します、

二月廿八日

牧水生

毛利雨一樓兄
三苦守西兄

二晩ほど御厄介になります、何もようたべませんから、平常通りの御馳走にておねがひします、ついで故、酒のことを申しそへます、朝一本晝一本(麥酒か酒か)夜(宴會にても)酒二三本といふところにねがひます、

一五

二月廿八日、沼津市上香貫より、長崎市、高島

儀太郎様宛(手紙)

高島君、

今度は御厄介になります、然し、とうとうお目にかゝれると、おもふと、そして初めて「長崎」が見られるとおもふと誠にうれしい、たゞ、残念なのは折悪く小生に元氣のないことだが、これは自業自得で止むを得ません、

三月號はこの二三日印刷所に徹夜させたりしてどう

にか明日一杯には出來上りさうなのです、それに三月十六日(どうなつたか、いま電報を打ちます、無論雑誌には間に合はぬけれど)に長崎に行くだけで書いておきましたので、屹度君のところあてにいろ／＼な問合せが來ること、おもひます、延いてはその日の追悼會にも附近の各地から思ひがけぬ人たちがやつて來はせぬかとフツといま思ひ出されました、このことが或ひは君たちの迷惑になる様なことになりはせぬかとまた一苦勞になりました、大橋君等と談合の上、宜しき處置をとつていたゞきたく、この手紙を認めました、

それからもう一つ、長崎から船で天草島(主なる處へ)へ行かれますか知ら、そして天草から三角なり三池なりへ渡れますか知ら、若し都合よく行けば天草へも渡つて見たい氣がするのです、御存じでしたら詳しく(それも至急に)お知らせ下さいませんか、長崎を果したら直ぐ大牟田へ(従兄がゐますので)行くのですが、若し船が利いたら船に、そして、ついでに一寸でも天草の地を踏んでみたいと考へてゐる

のです、これもよろしくおねがひ申します、

酒(正月から續いた)のため字がかけません、御めんなさい。

二月廿八日

牧水

儀太郎様

一六

三月一日、沼津市上香貫より、東京、黒木傳松様、那須琢磨様宛(手紙)

坪谷にいんでくる、たよりはなにか、

ことに琢磨君はどうです、あつたら遠慮なく云つて下さい、どうせ兄さんにも逢ひますから、

多分こちら七日出發、坪谷着は二十日ころ、

團治君はあちらにあるのか知ら、

歸るといふことが恐しい様な悲しい様な羞しい様な氣がしてならぬ、そしてその癖どこやらうれしい、とにかく今度は年寄を引つばつて來る、その餌として旅人を連れてゆく、

十何年振であちらの山櫻が見られるとおもふのが最もうれしい、冠嶽をもよく見て来よう、又江野下から船にも乗つて美々津まで下る、船間の磯にも一時間でも寝て来ませう、お、神さま、どうか私に酒を飲ませずに下さい、

三月一日

牧 水

傳松様
琢磨様

傳松君、歌をば三十首以内程度に自選して送りたまひ、この十四五日までに、ひどく佳いのあるとすればもう少しあつてもよし、歌を作る時だけでもせめてよそ見をせずに作つて呉れ、金を送らうか新聞か折返し返事を呉れ、新聞の方がいゝとおもふが、

一七

三月一日、沼津市上香貫より、飛驒國、福田夕咲様宛（手紙）

高山大火の報を今朝の各紙上に見る、どうも察するところ場末らしいので直接交渉は無かつたでせうが、でもいろ／＼と御心配だつたこと、お察しします、

小生の方もこの廿一日にツイ近所で三百戸ほど焼けました、地震だ火事だ、物騒至極です、正月のころ、三島豆をありがたうございました、とりこんでゐたのと、正月早々土肥に行つたのとでたしかまだお禮も云はなかつたのではないかと考へます、ゆるして下さい、子供たち大喜びでした、ガクシヤ抱石先生其他御一味その後の御消息はいかゞです、よろしくおつしやつして下さい、

三月一日あさ

牧 水生

福田夕咲兄

一八

三月一日、沼津より、長崎市、高島儀太郎様宛（手紙）
もう七八日前にもならうかと思はれるのですが、社

とりいそぎ右のみ

三月一日

牧 水

高島兄
大橋兄
上野兄

一九

三月四日、沼津市上香貫より、福岡縣、毛利雨一樓様宛（手紙）

お手紙難有う、いろ／＼とお心づくし、誠にお禮の申し様もありません、只今の豫定では七日前當地發、熱田、大阪、宮島各一泊、山口三泊（中一泊は長門峽）、そして十三日の午後三時四十七分に戸畑着、といふことにきめてあるのです、ところが運わるく小生昨日より風邪氣にて發熱、折も折、旅人は先刻學校より小使にオンブされて歸つて來るといふ有様で（例のケガのあとが時々痛み出すのです）多少の變更が出来るかも知れませぬ、變更されば山口の三泊を除くのです、とにかく十三日の午後一時

會課内、大橋君宛の封皮で、中には君、上野君を合せた三人宛の書状は未着のまゝでせうか、それには九日にゆかれぬこと（四月號を大體でも見てゆかれぬならぬ故）、酒を強ひないで下さい、揮毫を一切させないで下さい、の三要件が書いてあつたのです、豫定の日取の必要からあゝして電報で問合せたのですが、その時にはまだその手紙は御存じなかつた様です、

とにかく十六日にきめていたこと、雑誌にも發表しておきました、晝間來られぬ人とは夜でも逢ひたいものと考へてゐます、

ア、右三要件の外にもう一つ、三郎遺稿下がきが出来て、この六日までにこちらに着く様に都合出來たら至急送つて下さい、途中讀み／＼持つてゆくから、このこともあつたのですが、どうなりませう、七日早朝當地發、熱田、大阪、宮島各一泊、山口三泊、戸畑二三泊といふ考へでをります、十五日夕方までにはそちらに参ります、翠村も別々でそれまでにゆきます、

三十二分以下關着といふことにしておきます故、若し其處までどなたかに来てゐていたゞけると、船などでも大に助かると存じます、各時間に狂ひの出来ました際は早速打電（貴兄宛）します、太宰府も見たいが、時間がどうかと思はれます、これはお目にかゝつてきませう、

今度は一切會合などせぬことに致しませう、實はズルイことを考へてゐるのです、いづぞやのお手紙にありました様に、例の半折會を一つそちらに出かけてからやつてみたいと考へてゐますので（今秋か來春か）その時にそんな會合をしたいものとの考へなのです、その様にお含みおき下さいませんか、長崎まで一緒にいりて下さることを喜びます、向うの人たちも大喜びと思ひます、日向からは昔をしのぶためにあちらの港から貨物船にでも乗つて大阪まで出たいと考へてゐます、とにかく萬事お目にかゝつての上で致します、熱のせゐるか、手がふるへて文字がかげません、御判讀下さいまし、三苦君たちには貴兄より宜しく、

三月四日
雨一樓兄
牧 水生

二〇

三月四日、沼津上香貫より、大阪市、大島武雄様宛（手紙）

大島君、お手紙難有う、もう何だかお逢ひしてゐる氣持です、豫定では七日發、熱田一泊、八日午後一時五十六分大阪着、だつたのですが、折悪しく昨日より發熱、風邪らしいのです、で、或は一兩日延びるかも知れませんが、とにかく、八日朝、こゝからか熱田からか打電します、旅人からのおねがひなのですが、大阪城と道頓堀とが見たいといふのです、僅かの時間に見られませうか、（右のヨテイでは、九日の朝、九時二分大阪發）買物もあるし、めんどうかとおもひます、

とにかく萬事よろしき様おねがひ申します、
三月四日
牧 水

大島 兄

二伸

大阪城は上りの時にしませう、とにかく、買物（カバンもどちらでもよろし、位牌だけ）と、平田君たちと落合つて道頓堀あたりで夕飯などたべるところにしようではありませんか、いかゞでせう、

二一

三月四日、沼津市上香貫より、福岡市、井田虎男様宛（手紙）

井田兄、おなつかしい御名前と御筆蹟とを實に久し振に拜見しました、御無沙汰は小生こそで、申譯なく存じます、今度歸郷しますけれどどちらへも失禮するつもりなのです、たゞ、大阪には一泊するつもりで、多分大島君にも逢へます、福岡にも寄りたいたいですけれど、

寄ればいろ／＼の人があますのでとても一晩やそこらでは済むまじく、いつそ黙つて通りすぎることにします、その代り、今秋か來春か、そこを主にして出直す計畫をたてゝゐるのです、これは少しズルイ計畫なので、その際はまたいろいろと御力を借りたく考へてゐます、いづれあとで詳しく申しあげます、その時は「福日」などにも頼んで少し事を大きくして貰ふつもりでゐます、それと、もう一つは小生目下悉く元氣がない、そのしなびた状態で諸君に逢ふことがいかにも心苦しいので、今度は首をすつこめて通りすぎ様といふわけなのです、とにかく福岡驛通過の時間がきまり次第打電します故、御都合よろしかつたら車窓を通してゞもお目にかゝりたいと思ひます、奥さんにもよろしくおつしやつて下さい、もう幾年前になりませうね、今、おちひさいはお幾人です、
三月四日
井田虎男兄
牧 水

一一一

三月四日、沼津上香貫より、三島町、塚田静保様宛（手紙）

塚田兄、ひどい御無沙汰を御ゆるし下さい、いよ／＼御健勝のこと、はお察ししてをります、例のだらしなさからあちこちと始終まごついてばかりゐて一向に勉強もせぬ癖に、バカ忙しく、一寸々々と思ひながらツイお訪ねもようせずにあるのです、おちひさいたちも、いよ／＼お可愛いさかりとなられたこと、微笑まれます、奥様にも呉々よろしくお傳へ下さいまし、

また例の勝手なおねだりですが、いつもの様に風邪を引きました、そしていつぞや頂きました處方箋をあ丸一薬店に預けつばなしになつてゐましたので、其處へ今日お薬とりにゆきましたらその處方箋をなくしたとのことなのです、大に困りながら、他のお醫者様では間に合はず、御めんどうでももう一度書いて頂きたく甚だあつかましいお願ひながらお

ねがひ申します、實はこの七日から旅人を連れて郷里日向へ父の十三周忌のために歸國することになつてゐるのです、その道中にも是非必要だし、斯く押しておねがひする次第なのです、何卒よろしく御依頼申します、途中親類廻りなどもせねばならず、四月の十日ころに辛うじて歸つて來ることにならうと存じます、歸り次第お訪ね致します、一昨日、突然山本茂三郎兄の來訪がありました、初節句でのお歸りだつたらうと察せられました、

とりあへず右おねがひまで、匆々、

牧水生

塚田静保様

一一三

三月六日、沼津上香貫より、神戸市、野元純彦様宛（手紙）

風邪氏、案外に執念ぶかく、用心のため、もう一日延ばして八日當地發といふことにします、従つて大阪着は九日になります、が、これも確實とは申され

ないので、とにかく大阪着は未定といふことにしておいて下さい、昨日電報を打つ様に云つておきましたけれどそれもよします、そして一に上京の折の御面會を楽しみます、その時は例の親類の家へ一應行つて、それから君の銀行を訪ひ、一緒に君のお家まで連れていつて貰ひます、すみませんが、銀行の所在地を左記宛に知らしておいて下さい、

日向東臼杵郡坪谷村

若山マキ方

大に楽しかるべき出立前が、ゴホン・クシヤンの連發と鼻汁不斷と頭痛シ／＼で大に不景氣です、

三月五日

牧水

野元兄

一一四

三月六日、沼津市上香貫より、千葉縣、細野春翠様宛（手紙）

細野君、どうしてゐたのだ、戀の病にでも罹つてゐるかといふ評判だつた、もつともこつちもすつかり

黙つてゐて、まだ百合のお禮もよう言はなかつた有様で、面目ない、昨年の秋から冬にかけては多大忙、この正月二月は完全に、飲み抜けで時間がないといふわけだつた、そして、明後八日からはる／＼九州の旅へ出かける、一月あまりかゝるだらう、何しろ、事の多い世の中になつたものだ、四月の中ころに歸つて來る、久し振に沼津の花見に出かけて來給へ、時々はツラを合せておいた方がいゝ、

とりあへず右まで

三月六日

牧水

春翠老臺

一一五

三月六日、沼津市上香貫より、東京市外、村松道彌様宛（手紙）

たいへんいゝところらしいね、あゝした文章を読むという／＼空想がわいて來ていやがうへにその文の描いた境地をよくしてゆく、とにかく久し振に君が君らしい顔をして坐つてゐる明るい部屋をおもふこ

とは非常にうれしい、これを機として君獨特の明るい歌を見せて呉れたまへ、あまり永く作らずにあるとだん／＼作りにくくなるかも知れないよ、

僕、明日立つ筈だったが、風邪の氣味で一日延ばし明後八日朝六時に立ちます、八日熱田、九日大阪、十日宮嶋十一日山口泊、都合で長門峽を窺いて十三日戸畑着二泊、十五日夕方長崎へゆきます、三泊位か、それから大牟田に来て三四泊、そして日向へ歸ります、十二年目の故郷なんていふ奴はなつかしいより恐くてネ、一向に氣乗のせぬ旅立ちだ、どうかすると此處からベソをカキながら出で立とうかといふ有様だ、タン／＼公(註、長男旅人)を連れてゆくので幾分氣がまぎれるかとおもふ、うるさくも随分だらうが、

日向には十日あまりゐねばならぬだらう、たよりをくれたまへ、日向國臼杵郡坪谷村だ、東京で誰にか逢ひましたか、中野君はどんなだらう、わるいけれど、阿母さんがなくなられてほつきりしていること、おもふ、まだおくやみを云はなかつた、

君よりよろしく傳へて下さい、
せめて歌の十首も作つて來たいものと考へてます、
では、行つて來ます、大阪では大島君とこにゆくでせう、

三月六日夕

牧 水

道 彌 様
(旅人とのよせ書)

二六

三月七日、沼津上香貫より、福岡縣、三苦京子様宛(手紙)

お手紙拜見しました、是非お邪魔させていたゞきます、然し、あまり無理をして御身體をいためぬ様にして下さいまし、そのみ氣にかゝります、
今日、鐵道便で山葵漬を三つお送りします、一つは且那樣にあげて下さい、一つは毛利老へ、一つは久原老へ分けてあげて下さい、
たべるだけ小皿にとり砂糖を一つまみかけ、お醤油を落して、よく練りまぜてからたべて下さい(他の

二人へもこのことおつたへ下さい)

とにかくお目にかゝります、今日立つつもりでしたが風邪で一日遅れ、明朝立ちます、お目にかゝるは十二日か三日でせう、
且那樣によろしく、

三月七日

牧 水

京 子 様

二七

三月七日、沼津より、長崎市、高島儀太郎様宛(手紙)

今日立つつもりが一日延びました、明早朝立ちます、熱田、大阪、宮島、山口、戸畑と歩いて、十五日の夕方(時間は打電す)にお目にかゝります、今度こそは大丈夫、途中紛失せぬこと確實に候也、
土産代りに今日鐵道便で山葵漬を送つておきます、
下準備にお集りのあと一杯の時に持ち出して下さい、たべるだけ皿にとり砂糖を一つまみ、醤油を少々落し、よく練りまぜてからたべて下さい、

三月七日

牧 水

儀 太郎 兄

二八

三月七日、沼津市より、福岡縣、毛利雨一樓様宛(手紙)

山口町の平賀春郊の家に一寸寄つてゆきます、そして都合では長門峽を一寸のぞいて來ようかと考へてますが、一泊位で山口から行つて來られますか知ら、そして、どの邊が一體いゝのでせう、すみませんが折返しお教へ下さいまし、子供づれのこと、なるだけ夜行を避け、そして飽かせないため、熱田、大阪、宮島、山口と降りてゆくつもりなのです、春郊は小學校からの友、

毛利兄、明日の六時でいよくたちます、熱田、大阪、宮島、山口と泊つて戸畑へゆきますのは十二日になるか三日になるか山口に行つてからきまりま

す、きまり次第打電します、

それから京子さんから（これは守西君にも誰にも黙つてゐてくれといふことですが）一泊だけは是非自分のうちにきめてくれと云つて来たのです、自分是他へ外出が出来ないので是非たのむといはれてツイ断りかねて一晚厄介になる旨、返事しました故、一晚を貴兄方へ一晚を三苦君方へ御世話ねがひたいと思ひます、（十二日にゆければもう一晚餘裕が出来ますが）その前後いづれにするかはあなたがたの方できめて下さい、

とりあへず、

三月七日夕
雨一樓兄

牧 水

二九

三月九日午前七時四十二分、アツタより、オホサカ、オホシマタケチ宛（電報）
ノリオクレケフゴゴ三ジツクレワカヤマ

三〇

三月九日、午前十時十分、テツアツタより、ニシク、オホシマタケチ宛（電報）
ヤレヤレマタノリオクレコシヤ五ジ一九フンツクレワカ

三一

三月十三日、山口平賀方より、沼津市若山方、大悟法利雄様宛（封緘葉書）

アトトンよ、此處に来て漸くこの葉書をかく餘裕が出来た、例により忙しきこと、おもふ、ことに今度はひどからうが、寧ろやりよくもあらうかとおもふ、熱田で始まつた酒は此處まで續いたが、これからはチトつゝしむことにならうとぞおもふ、驚くべき元氣なり、タン族（註、旅人）は成績極めて可良、一向にオヤヂをさまたげず。

十三日あさ

牧 水

三二

三月十四日、戸畑町毛利方より、沼津市、大悟法利雄様宛（封緘葉書）

お手紙拜見、萬事御推察の通り、然し九州人はい、何ともいへぬところに相通ふところがある、ヨテイ以上に、氣持になり泣きつ笑ひつした、何しろ昨夜は六疊の間に相寄ること廿五人、相抱いて眠る人十四人、それがまた今朝、昨夜以上の人数になつてゐる、雪がちら／＼降つてゐる中をこれより濱へ散歩にゆく、小生またヨテイ以上に元氣、タンタンは有頂天、萬事善哉々々、

三月十四日朝九時

若山牧水

三三

三月二十三日、大牟田市元町中村政雄方より、長崎市、長崎創作社御中宛（葉書）

中村君のうちに來て見れば此處はサカヤにありにけり眺め見渡す春景色こり一杯飲まずにやアをられ

めえ、牧水

三月廿三日

（若山旅人、中村政雄、高山三千樹とのよせ書）

三四

三月廿六日、肥後入吉在林温泉より、福岡縣、八幡創作社御中（繪葉書）

よろぼひ／＼漸く此處まで辿りつきました、此處は十一日宮島以來の父子きりの眠りでした、明日はいよ／＼日向に歸り着きます、何だか萬事夢の様で、何をどうしていいのかもわかりかねてをる有様です、皆様によろしく、

廿六日朝

人吉在、林温泉、翠嵐樓方 父 子

三五

三月廿七日、宮崎町より、鹿児島市、杉本平吉様宛（葉書）

杉本君、意志薄弱の徒はやはり駄目だ、それをのみ

念じて来てとうとう酒攻めにまけてしまひ、今ではもう人の顔を見るのもいやな位に勞れてしまつた、昨夜當地着、今日坪谷村へ歸ります、十日あまり滞在のつもり、都合がつけば打合せてこの町あたりで、でもあひたいとおもふ、萬事悪しからず許して下さい、

三月廿七日朝

若山牧水

三六

三月二十九日、日向東臼杵郡坪谷村より、鹿兒島市、杉本平吉様宛（手紙）

杉本君、どうだ、一ふんばつして日向の國坪谷村までやつて來ぬか、つゞぢしが咲いて、もう山櫻も咲かうといふいゝ時季だ、このあばらやで一緒に寢ようではないか、牧、安田兩大人にも右由勸めて一緒にやつて來てくれ、もう僕は此處でじいつとして君等を待つことにしたい、まだ十日位あはります、様子を電報で知らして下さい、近郡の親類廻りをせねばならぬ時間の都合ある故に。とにかく待つてま

す。ふんばつすべしふんばつすべし。

アヤシキ家の二階にて

三十日二十九日の誤

牧 水

萍 吉 様

三七

三月二十九日、日向坪谷村より、沼津市若山方大悟法利雄様宛（手紙）

アトトンよ、おこるなおこるな、牧水毎日三升酒をかつ食つてなほ餘裕シヤク／＼たりだ、タン／＼ひそかに譚ずらく、みんなお父さんより弱いね、だつて。坪谷に入るのはさすがに大に恐かつたが、入つて見れば案外の景氣、牧水、大にメンクラヒの形なり。昨夜十人あまりの客を送り出したあとにころげる様にしてやつて來た男あり、矢野ダンジなり、來る早々から踊り出して、ツヒにゲロを出し、狭い／＼臺所中を踊り廻つて其處に往生、今朝オレたちのねてゐる間に歸つて行つた由。

雑誌の事、全てよろし、好景氣々々々、九州そこらの連中の鼻息に相副ふものと謂ふべし、トテモエライ勢ひだ、三千樹には氣の毒のことをして來た、どうかすると彼此處まで出かけて來るかも知れず、よかつたりよからなかつたりだが、事の赴くに任せる外に詮なかるべし。

杉本平吉をも此處に招かむとす、オレはもう動くのがイヤになつた。

年刊には何とかしませう。

萬事宜しく。

廿九日

牧 水

アトトン様

三八

三月三十日、日向東臼杵郡坪谷村より、鹿兒島市、杉本萍吉様宛（手紙）

杉本君、昨日、電報難有う、小生も最初その様に考へてゐたのだが、それよりいつそ奮發してこの坪谷村までやつて來ないか、日豊線富高驛トクカでおりに、そ

れから自動車にて約一時間、わけはない、丁度時季がいゝので田舎もわるくない、四月三日はこの土地の人たちが僕等（老母と、小生と、せがれと）を何處かに呼んで御馳走して呉れるといふ話が出てゐるが、その時は君にも一緒にやつて貰へばいい、そして、どうせ二三日お役所をばなマケることにして、ゆつくり遊んでゆくことにしよう、歸りには都合では青島まで送つてゆくよ、さうしたまい、その方がいい、牧君安田君を君の力で引張つて來られ、ばなほこの上なし、どうかその様に馬力をかけて貰ひたい、遮二無二さうする必要があらうと信ず、御馳走はないが、谷と山との眺めは流石牧水の生れたところだけあると感心せしむる自信を有す、あまり考へないで、一二三でさうきめ給へ、待つてゐる。

三月三十日あさ日向坪谷村 牧 水

萍 吉 様

少し酔つとるが、言ふことには間違なし、老母も君等を待つてゐる、逢つてくれ。返電待つ。

昨日、君の電報を貰ふ前に、右旨の手紙を出しておいたのだつた、(封筒裏面に)

三九

四月十六日、日向坪谷村より、大阪市、大島武雄様宛(手紙)

實際、命からんで今日まで持ちこたへました、全く思ひも及ばぬ忙しい(それが全て接客のため)旅で、われながらよく持ちこたへたと思ひます、ために葉書一本書くひまもなく、何か考へる餘裕など一向にありませんでした、悉く君たちにオコラレ、フンガイせられてゐること、恐惶を極めてをります、とにかく明朝こちらを立ち、明後土々呂港より乗船、明々後日神戸につきます、母と甥とを同伴します、神戸で野元君たちに電話をかけ、一日がけで大阪へ参り、お目にかゝり、また神戸に引返してすぐ沼津へ向はうと思ひます、我儘ですが君たち四人に一度に逢へるとこの上なき幸と存じます、

神戸では左記叔母の家に一兩日滞在します、三の宮町二丁目二五〇番地 長田ふさ 着神次第、また都合を電報しますが、右、とりあへず、

四月十五日夕坪谷にて 牧 水

大島 兄
三池 兄
平田 兄
森 姉

四〇

五月十一日、伊豆船原温泉、船原館より、日向國、河野はる子様宛(繪葉書)

昨日、長岡を朝立つて、古奈温泉にゆき、千人風呂に入つて晝食をすまし、それから五六里を距てたこの温泉に來た、此處は小生にも初めての宿で、その淋しいのに驚いた、けふはこれより山をこえて吉奈温泉へゆきます、

五月十一日 同行四人

此處は坪谷川位ゐの谷です、

この部屋にゐます、(伊豆船原温泉船原館全景の繪葉書面に)

四一

五月十一日、伊豆吉奈温泉、芳泉荘より、日向國、河野春子様宛(繪葉書)

船原から小さな峠を越えて此處に來た、路はかなり急峻な坂路であつたけれど、若葉や鳥の聲や遠くに見ゆる富士の雪や、いゝ氣持で越えて來た、これから自動車で大仁へ、それから電車で沼津へ。

五月十一日午後一時 同行四人

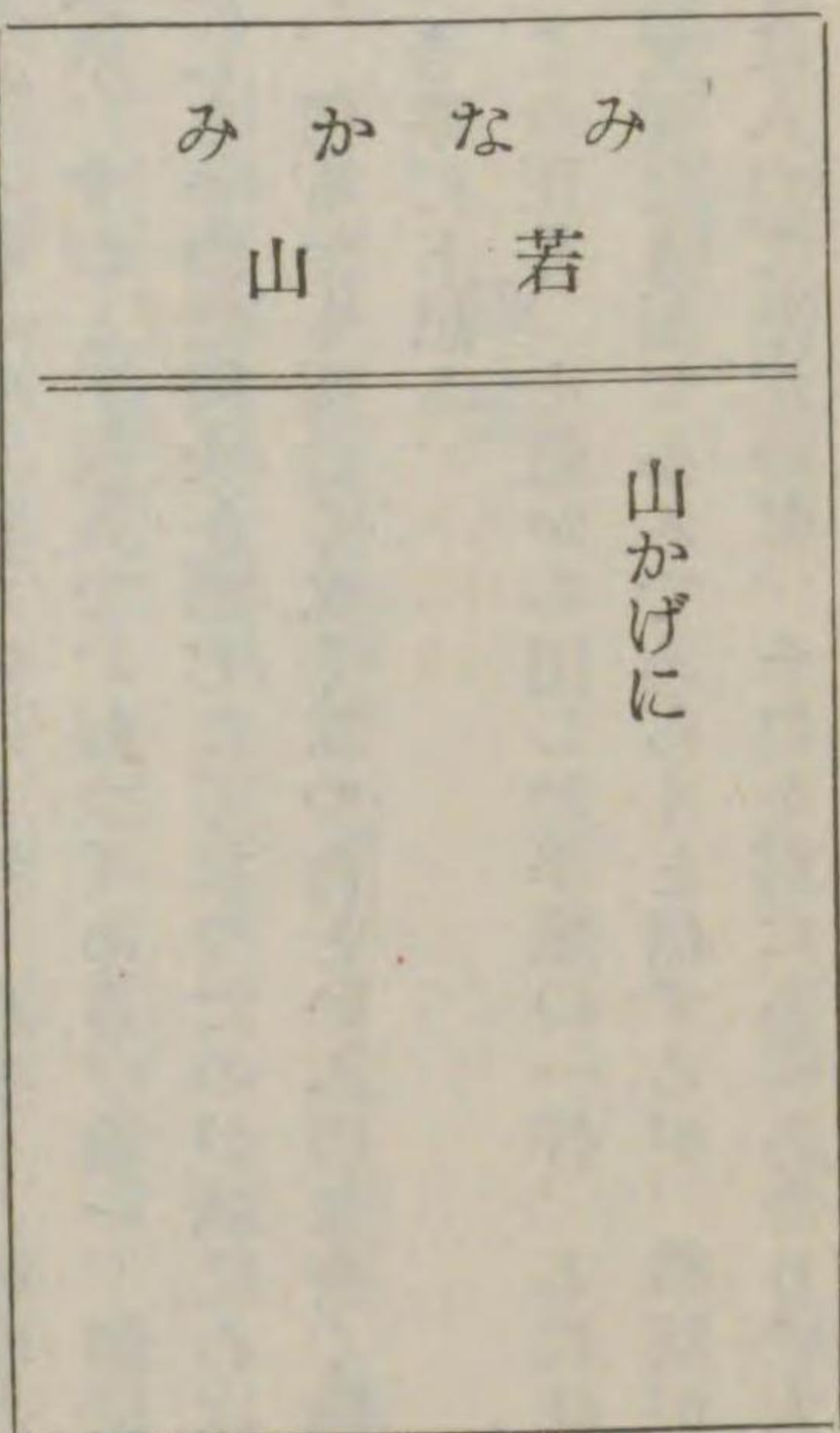
この谷川に臨んだ部屋で晝食をしてゐる、(芳泉荘全景の繪葉書書面に)

四二

五月二十六日、沼津より、東京市、民衆書房内、

村松道彌様宛(手紙)

どうも思ふ様にゆかぬが、とにかく今日は送つてみます、(註、みなかみ紀行の表紙)



とするの、上の横字は初號と四號位の活字がい、とおもふ、そして、其の下の横線二本何か違つた色を使つてほしい。これが一案。

今一つの案は、別送した「光と影」の様に、題目と著書の名の處だけに何か色を敷き、歌を墨で刷り出したら、ともおもふのだ。

第三案は、表紙全體に歌を刷り出して、背にだけ本

の名等を入れたらといふのだ。
用紙などの關係もあり、小生にははつきりどれがいゝときめ難いが、いづれか君たちの方でとりきめて下さい、右の三つの内に於てだ。
廣告、承知しました。

とりあへず、

廿六日

牧 水

みちや様

四三

六月十七日、甲州身延七面山奥の院より、沼津市、金澤修二様宛（繪葉書）

此處海拔六千五百尺、下界白雲上天微蒼、今夜の月がさぞいゝでせう、但し、此處のお坊の蒲團には驚いた、長さ十二尺幅七尺、そのはづれにアートの首がころりとくつ着いてゐます、牧 水

十七日夕

（利雄とのよせ書）

此處に二間のフトン延べられたり。（甲州七面山奥之院庫裡繪葉書畫面に）

四四

七月四日、沼津市上香貫より、東京、和田山蘭様宛（手紙）

先日、吳の横山かをる子といふが來、その際、君が寢こんであると聞いて心配してゐたところ、案外に速く全快の報を得て安心した、小生もこの春の旅以來、ずつと半病人で、弱つてゐる、第一、何にも彼にも一向に興味を感じなくなつたのが誠に心ぼそい、何もかも面白くなくなつたといふのは全く恐るべき事だと思ふ、

この正月、土肥から出した手紙の一件、あれはあの文面にも出てゐるであらうと信するが、戲談が半分は入つてゐたのだ、それを君たちにあまりに大げさにとられたので、却つてこちらで途方に暮れ、それに、君のあゝした手紙などを讀むといつかまたこつちも本氣になると云つた形で、その後全部放任の

とかせねばならぬのだが、それがそれ、一向に氣乗がしないのだ、
とにかく、近々逢ふことにきめませう、

七月四日早曉

牧 水生

和田山蘭兄

四五

七月六日、伊豆長岡橋本屋方より、東京、長谷川銀作様同桐子様宛（繪葉書）

ビードン（註、下廻）制止と七面山の紀行書きとのために、例の橋本屋に來てゐる、疲れが出て、書けるどころでない、ねながら向うの松山を見てゐるといゝ氣持だ、もうかな／＼がないてる、キリ公は何だか影がうすさうだが、大丈夫なのかい、しつかりしろよ、十何日かに行くといふのもむつかしいものだが、どうでも行かざるまい、ひとごとでない、オレのおなかにも困つたものだ、まだ三四日あるよ、

六日

牧 水

態で過して來たのであつた、然し、要するにたわいのない事であつた、今になつて眼角を立て合ふもまことになさけない、で、その意味の手紙を書かうと思つてゐたが、手紙だとまた藪蛇になる恐れがあり、いづれ一寸でも上京してゆつくり君と話さうと考へてゐたのだ、多分君もその意見だらうとは思ふが現在どうだらう、高鹽君にもその後何とも云つてやらずにある、向うでも追々とこちらの氣持をも飲み込んで呉れたことゝは思つてゐる、若し、休みにでもなつて君たち一緒に泳ぎにでも來てくれると甚だ難有い、この廿日から千本濱の松原の蔭に移る、家が小さくて困るが、家族とゴロ寝をして貰へばどうにかねられる、

この間（二三日前）越前君がやつて來た、彼にもよく話しておいた、逢つて話してくれたまへ、

月の中ころ、上京したいと考へてゐるが、右の移轉などどうなるか怪しい、それはそれとして、來て呉れると難有い、
雑誌にも何か書いてくれたまへ、これも少し何

四六

七月十三日、沼津上香貫より、三河國、金澤修二様宛(手紙)

修二さん、おたより難有う、歌右衛門の話、誠に羨しくききました、ずつと前二度ほど見たきりでもう記憶すらありません、ほんとにせめて年に二度なりい、芝居を見にゆきたいものです、

何といふ暑さでせうね、皆さん(といふうちにも君第一)お變りありませんか、小生、去る四五日のころ、長岡へ、七面山の紀行を書きにゆきました、三日ほどゐたが一向に心がおちつかないので肝癪を起して歸つて來ますと驚きました、喜志、まき子、アートンと三人がつぶれて寝てゐるのです、ほんの暑さ當りと思つてゐましたに、まき子のみはどうも可笑しく、お醫者(澤さん稲玉さん)にもよく解らずにゐましたが、四日前に肋膜炎と決定しました、肺炎をも併發する虞があるといふので晝夜つき切りの看護です、ために喜志は止むなく病人でなくなり、

フラ／＼しながら氷の世話です、アートンもまだ平常の元氣なし、不思議とそれ以來、小生はしやんとしました、何しろこの暑さでまアちゃんに氣の毒です、晝夜全半身を温シツプしてゐるのですからね、よく行つてあと三四週間はかゝると見ねばならぬといふのです、でも實によく云ひつけをきいてくれます、ほめてあげて下さい、

この分では、千本移りも延びませう、

時折、用事で町に出ますが、よし訪ねなくとも君がおゐるときは何だか張合があつたが、今のつまらなさや云つたらありません、泥棒が目的を果した形で、用済み次第に逃げ歸つて來ます、あの、ホコリ路を思つて下さい、

新城の朝夕も偲ばれます、月がよく晴れるころ、一寸でも出かけたいたいものです、

七面紀行、ともかくも書きました、

氣も身體も忙しい盛りに、フシギと歌が一つ二つと出來だしました、中の一首、

若竹に百舌鳥とまりをり珍しき夏の姿をけふ

見つるかも

では忙中これにて。

先日、わざ／＼お手紙にて恐縮せる旨、お父様に申し上げ下さい、葛子様其他皆々様へ宜しく。

十二日

收 水

金澤修二様

四七

七月廿三日、沼津市上香貫より、下野國、高鹽背山様宛(手紙)

拜啓、先日は珍しいものを、難有うございました、久し振のものなので、珍重していただきました、すぐ、お禮とこのことをお知らせしようと思ひながら、何彼ととりまぎれ遅くなりました、御めん下さい、ひどい暑さです、お變りありませんか、小生はこの五六月が甚だいけなかつたのですが、今月に入つてよくなりました、たゞ眞木子が月初めから肋膜炎を起し、それに肺炎併發で、一時は騒ぎました、胸か

ら針で水をとつたりして、やゝ安定を得てゐますが、何しろ、めんどうな病氣ださうで、夙に家移りせねばならぬのを延ばしてゐる有様です、暑いので、可哀想です、母も一緒に病人同様です、この半年、全く、ぐうたらに遊びぬきました、(但し、郷里に歸つたことはとにかく一つの事業ではありましたが、實に淋しい氣持です、あとの半年を、何とかいゝものにせねばならぬと心細くも考へ込んでゐます、

半折行脚を栃木縣の二三ヶ所で開かれはせぬかといふことを考へておいて下さいませんか、折があつたら工藤、豊田、野口、谷、三浦君たちとも相談してみして下さい、これもこの秋から本氣になつて着手する積りです、この八月中に沼津で一つ展覽會風にして試みて見て、うまくゆけばその型で各地に行はうと考へてゐます、いづれまた詳しいことは申しあげますけれど、何とか出來ぬか程度のことを考へておいて下さると難有うござんす、實はこれはやるのがまことに苦しいのですけれど、自分の心持をお

ちつけるために、よし一年間位は犠牲にしても、
やつてしまはねばならぬと漸く決心した次第です、
歌もこの半年、一首も作りませんでした、このごろ、
少しづつ作つてゐます、段々、深くなつてゆかねば
ならぬとは考へてもなか／＼實地に表はれないから
苦しい、

お父さん初め皆さんお丈夫ですか、よろしく申し
あげて下さい、

富士登り、何だか今年もお流れらしい、今日、實
は其處から村松君がおりて来る筈で、様子をきい
て見ようとは思つてゐます、

七月二十三日

牧 水

背山 兄

君の今度の歌はひどく拙かつた様ですな(封筒裏面
に)

四八

八月七日、沼津より、東京、長谷川銀作様宛(葉
書)

型の如くお騒がせして、濟まなかつた、極めてひつ
そりやるつもりだつたのが、どうしてもあゝなる、
僕の歸つたあと、さぞ、ほつかりしたこと、恐縮す
る、こちらも同様、二日、ぐつたり寝込みました、
今日これより千本濱へゆき、家の様子を調べ、よけ
れば明後移轉騒ぎだ、まことにイヤだ、まアちゃん
は段々いゝ、元氣も出て來た、きりさんも速くさう
なれ、

何處にゆくかきまつた？

いつそ、おとなしくそこで晝寝するもいゝぢやアな
いか、動くも却つて暑いよ、

七日あさ

牧 水

四九

八月十六日、富士山麓より、福岡縣戸畑、創作
社戸畑支社御中

移轉後、まだ荷物も片附けない部屋に、一寸した外

は僕行く、

いよ／＼やることにした、斯んな調子(註、半折會趣意
書の裏面なり)なのだ、前景氣はいゝが、果してどうな
るか、誰にも見當がつかぬ、然し、相當の成績をば
挙げ得る見込だ、

次興行を大阪に持つてゆくか、東京にするか、いま
迷つてる、どつちがいゝだらう、

お二人とも元氣かね、梧さん、歌、お珍しう、

まアちゃん、二三日前から外出(庭や隣)を許され
てる、

忙しい。

十九日

牧 水

銀作 兄

五一

十月三日、沼津千本より、みくりや銀行、長倉
汀峰様宛(手紙)

長倉君、一昨日失禮、

風邪はどんな風です、大丈夫ですか、しつかりして

出から歸つてみると二人の珍客があつた、一人は早
稲田の級友、一人は嘉穂族、(註、尾島清)機逸すべか
らずと二人を誘惑して、久しい看護期から解放され
つゝあり、たまにはこちらからオドサないことには
やりきれねエとこのよせがきをかくものなり、當地
社友長倉汀峰君をも、むりやりに引張り出して、こ
の川風に吹かれつゝあり、

「こりア涼しい、こりア酒がさめると、嘉穂人種が
氣焰をあげてゐる、月ある筈、雲多くて見えず、こ
れだけ残念、牧 水

八月十六日湖月にて、

戸畑支社御中

(尾島清、長倉汀峰等とのよせ書)

五〇

九月十九日、沼津市千本濱より、東京、長谷川
銀作様宛(手紙)

拜啓、先日はよくこそ信州に行つてくれた、難有う、
君が行かず僕行かすと甚だ拙かつた、本葬に

下さい。

小生、明日、東京へ行きたいと思ひます、やりかけたこと故、一氣呵成にやつてみたく、幸ひ、明夜、黒土會があるので、其處でみんなに相談して見たいとツイと思ひついたので、うまくゆく様なら今月中にでもあちらで一興行打つて見たいと思ひます、一泊歸りの積りですが、都合では手取速く會場などをきめて來たく、一兩日遅れるかも知れませんが、明後、日曜、御一緒に東方寺に行つて頂くことにお願いしてありますが、右の都合にて、小生の代りに妻を連れて行つて頂くことにします故、萬事よろしくおねがひ申します、我儘をして濟みませぬ、東京がうまく行き、此際とにかく土地だけでも手に入れられ、ぼこの上ないなど、例の夢想を起してゐます、

なほ、さし支へなかつたら今日お歸りがけに一寸お立寄り下さいませんか、御都合御聞かせ下さいまし、

十月三日

牧 水

長倉宜一兄

五二

十月十日、沼津市千本濱より、福島縣、天野多津雄様宛(手紙)

天野君、

いつも御無沙汰ばかりで濟みません、そのくせ、お歌をみたりおたよりを見たりする折々には親しくお話などしてゐる氣持なのですけれど、近々御上京の由、そして、こちらへお廻り下さる由、實に運わるくも信州義兄の本葬に列すべく(他に半折會の用もあり)小生今日發小田原、東京を経て信州に入り、どうしても十八日夜でなくては歸宅出來ません、君の方で何とかしてその時までには繰延ばす方法はつきませんか、十八日夜、此處に泊つて頂くと十九日早曉、大阪から大島平田の二君がやつて來ることになつてゐるのです、お互ひに逢へて、機會ですが、さう出來ませんか、色々考へましたが、どうしても右以外の日取が出來ないので、あなたの方で都合出來なかつたら誠に相濟まぬことになり

ますが、どうかお赦下さい、

あなたの歌が九月號あたりから急に生きて來た様に見ました、つまり、從來の概念、趣味の境地から少し脱出された觀があつたのです、けれど、もう少し殻を破る必要はありますね、硬化は恐るべきことです、

出立前、とりいそぎ

右まで

十月十日朝

牧 水

天野多津雄兄

五三

十一月十五日、沼津市千本濱より、東京市、駿河臺下クラブ内、牧水半折會委員御中宛(手紙)相濟みませぬ、

信州ではして來た身體がこの間の會でまたぶり返したといふのでせう、何しろだらしないことです、重々面目ありませぬ、

昨夜はよく眠れませんでした、午前の二時ころから冴えに冴えた月が枕許のガラス窓を透して仰がれた、先づお天氣は大丈夫だと考へました、それから、そちこちの結果は如何、と、それこれと心中に往來して非常に好結果な場合や、意外の失敗の場合や、其他、君たち相互間の關係や、會了最後の文壇の風評や、地所の選定や、間取のことや、それこそまんじりともしないで、夜を明かしてしまひました、間に二度も厠に立つたりして、

とにかく、よろしくお頼みします、こちらは、いやな氣はもまぬことにします、萬事おねがひして、自然に出て來る結果を待つことにします、今朝、女中を起して何はあれ先づ湯を沸かせ、熱燗にして、イヤその前にこの二三日洗はなかつた頭や顔を洗つて、徐ろに御神酒をいたゞきました、本統に御神酒といふ氣持です、そして、すつかりさわやかな氣持になつて、再び床に入り、ぐつすと今まで熟睡しました、程なくもうお晝です、君たちも嚙ぞ御心勞だつたこと、おもふ、明日、時間が濟んだら早速こ

のかたじけなき御神酒をあげて下さい、頃をはかり小生夫婦も頂戴することにします、

小生の身體、一時おなかだと思ひ、中途風邪と思ひましたが、本統はやはり胃腸らしい、醫者に行けば威されるに決つてゐる故、もう少し我慢して、悲しき抵抗療法を試みることにします、元氣は今日あたりたいへんいゝ、汽車の中で二度變な部屋に這入る覺悟をさへきめれば明日上京出来ないことはないと思ふが、まアそれも我慢しませう、そして明後日の報告を待つことにします、

改めて御勞苦を謝します、そして、まだ、もう一つの期間、それを繰返して頂くことを、申しにくいが謹んで御願ひ申します、

とりあへず右まで、

十一月十五日午前十一時半 若山牧水

牧水半折會委員諸兄御中

五四

十一月二十一日、沼津市千本濱より、熊本縣、

海達貴文様宛(手紙)

お手紙難有うございました、公子さんのお作にはほと／＼感心してゐるところです、困つたことに「金の星」の編輯部の都合か、今月も先月號も、本欄に組む様にして送つた公子さんの御作を二度とも掲載せずにあるのです、來月はどうしますか、小生から一度よく云つてやりませう、「金の星」に送つた残りの分をも捨てかねて小生の手許にとつてありますから、それをば小生發行の歌の雜誌に載せませう、(雜誌、出來次第お送りします、十二月一日發行です)とにかく發表の如何にか、はらずどし／＼お作りになる様におすゝめ下さいまし、

萬田におゐるのですか、小生この春、其處に参り、坑内にも入つたのでした、知つてをればお目にかゝれましたものを、残念でした、

公子さんにもくれ／＼よろしくお傳へ下さい、

とりあへず右まで、

十一月二十一日

若山牧水

海達貴文様

五五

十一月二十五日、沼津市千本より、東京市、村松道彌様宛(手紙)

道彌さん、

有卦に入つた形があるではないか、何しろ、おめでたう、詳しくはその節、

小生等二人、廿七日正午三分東京驛着のいつもの汽車にて上京、そのまゝ會場にゆき飾りつけをなし、それから君の方へ参ります、但し、飲ませぬといふなら行かぬ、

右の時間を知らせむとする人の人選は君に一任します、但し、長谷川だけは知つてゐる、後略

十一月廿五日

牧水

村松君

歩廊に入つて、下さい、荷がある、

五六

十二月四日、沼津市千本濱より、熊本市、上田英夫様宛(手紙)

上田兄、いつも小生の方からは御無沙汰してゐて済ませぬ、御たよりを見るごとに、靜かな御朝夕が偲ばれて、いゝ氣持に、また美しい氣持になります、小生は此頃ことに例の半折會なるものゝために全然目さきの見えぬ惶しい日を過してゐます、速く切りあげたいものです、

但し、そのためにこの秋(春ではとも身體が續きませぬので)九州に出かけ、多分熊本で、九州社友大會が開かるゝことになりませう、今度こそお目にかゝれます、何彼と御めんどうをおねがひすることになるでせうが、よろしく御たのみします、

東京の半折會で、綾部、細井の兩君に逢ひました、お噂が出ました、

東海道をお通りの様なことがありましたら、厄介でも途中下車をして下さいまし、

右、新年號選歌の間にとりあへず、御めん下さい、

十二月四日 牧水
上田英夫様

五七

十二月八日、沼津市より、長崎市、大橋松平様宛(手紙)

(友人大勢來りて大橋方の破れ壁つくるひし由を、大橋の歌により知りて)

ともどちをよびつどへ來ておのがつらとおなじ
ひろさのかべ塗らすかも
よもの壁張りわたされし中におはすあるじがつ
らの黒光りかも
心して笑へあるじよ心なく笑は、かべがまた破
るゝぞ
かべ張りは面白くなけむ寧ろよしてあるじがつ
らをうるしもて張れ
さけに酔ひよつばひに這ひ壁にすがり搔きやぶ
きけむかべとしぞおもふ

よみ人しらす

十二月八日夜 松原蔭人
長崎創作社御中

五八

十二月十五日、沼津市千本濱より、日向、河野
すゑ様宛(手紙)

今日はお手紙とけつこうなお品と、ありがたうござ
いました。
いろ／＼くはしく小生の意見をも申しあげたくと、
ひまをまつてをりますけれど、それこそ夫婦ともろ
く／＼眠りもようせぬ忙しさで(小生はあちこちと
出かけねばならず、あとのことをば妻にさせますの
で)とてもさうした時間がありません、あまり御禮
がおくれるとまたくちぎたなく罵られるゝおそれがあ
りますので、とりあへず御禮のみ申しあげることにな
ります。めづらしいし、ふたりとも大よろこびでし
た、つごうでは小生の方にヨコドリせむかと考へを
ります。おくれましたが、まことにありがたうござ
いました。きはまたあとでべつに手紙さしあぐる

さうです。
坪谷のこと、もう一度、くはしく小生の考へを申し
あげねばならぬと考へてあますが、いづれ、年があ
けてのことにします。とりあへず、けふこれといつ
しよに母にもかんたんな手紙をだします。
絹地にかくのも、今年中にとゞく様に必ずおくりま
す。(このごはあまりひきうけないで下さい)。兄さん
は、をしいことをしました、なぜ、こゝまでふんば
つして下さらなかつたでせう、このつぎのときを待
ちます。
兄さまや、文一君夫妻によろしく。
十二月十五日 繁

五九

十二月十七日、沼津市千本濱より、大阪市、大
島武雄様宛(手紙)

やアれやれ三君足下、やんやらやつとこれで安心し
ました、趣意書の印刷に、いまアートンが耕文社へ

かけ出しました、今日中に校正を出させるつもり、
今迄の二箇所のものより、ずつと堂々たるものが出
來上りませう、二枚にする様云ひましたが、とり扱
ひにめんどうらしく、一枚にして、裏に歌を印刷す
る様にしました、大阪神戸を引つくるめて、枚数は
一萬枚、御豫定に従へば一枚が一圓にならうといふ、
拜みたい紙々様です、難有や、
賛助員氏は別紙の通りですネ、一寸見て下さい、(中
で、三宮、田中の兩氏について、も一度知らして下
さい、知つてゐないと、濟まぬ氣がしますから)、
(なほ、この紙はついでの時、お返し下さいまし)、
澤村氏には明日あたり手紙さしあげます、何だか、
オツカナくて、よう書かずにゐました、なほ、諸君
よりも宜しく申上げおき下さい、
神戸も、うまく行きさうですね、これも大安心大安
堵、席につらなつたミチヤスキイ氏(註、村松道彌)が
少々あてられた形ではなかつたですか、
ほんとに何だか、お禮もよう云ひませんが、胸中、
お察し下さい、細君などは、ベソ情緒になるていた

らくでした、
とりあへず、右、のみ、

十二月十七日正午

牧 水

平田君

三池君

大島君

扇面の地紙といふのを規約に入れてはおきました
が、あはれとまだ見たことなし、十枚ほど送つて下
さいませんか、

オット、大事な用、

封筒(趣意書を入れる)をどうしようかと考へたが、
これは君たちの方で、それ〴〵に刷つて下さいませ
んか、普通の大きさに、折らずに入る様に、趣意
書をば(少し長くなりますけど)刷りますから。神
戸には君たちから右旨お傳へ下さい。

アア、何だか、ひどく、がっかりして、午後の急
用出来さうになし、山の神に合掌して三合がとこね

ぶらむとぞおもふ、君たちもやれ！

會の申込締切を來月末日としますがようございま
すか。(封筒の裏面に)

六〇

十二月廿四日、沼津市上香貫より、鹿兒島市、
鹿兒島新聞社、牧曉村兄宛(手紙)

牧兄、僕は君宛には手紙もよう書けない程の責任感
に襲はれてゐるのですが、とにかく、それは、先づ、
御めんなさい、

お手紙、拜見、一兩日中に何か書いてお送りします、
一昨日、非常な多忙の中を日歸りのつもりで上京、
昨夜歸宅、その上京記を君あての手紙風にして書い
てみたいと考へてゐます、妻には歌を出させます、
これは二つとも間違ひません、

とりあへず右のみ、

廿四日

牧 水

曉村兄

大正十四年

一

一月十四日、沼津千本濱より、東京、村井武様宛(手紙)

村井君、感謝、

ほんとうに難有う、細君など、涙を流さむばかりに喜んでゐる、

頼むよ、ほんとうに頼むよ、

地所もほゞきまつた、

何しろ、忙しくて詳しくかいてゐられぬ、後報する、

この正午の汽車で夫婦して大阪へ向ふ、廿四五日帰宅、改めて書きます、

御家内皆さんに呉々よろしく、

一月十四日前十一時 繁

武君

二

一月廿八日、千本より、みくりや銀行内、長倉宜一様宛(手紙)

昨夜、十一時五十八分、無事沼津に歸着、豫定正に一週目を超ゆ、慚愧々々、

歸つて見ると、朝鮮の社友女史より雁が一疋來てゐた、これ幸ひとこれを肴に一杯試みむと欲す、銀行が引けるとすぐお出かけ下さいませんか、珍談蓄積、これを副肴となさむとす、

それから御めんどうでも金澤君をおさそひ下さいませんか、別に手紙認めず、右旨、貴兄より宜しく御傳達を乞ふ、とにかく待つ、

一月廿八日 牧

汀峰兄

萬一、御都合わるくば御傳へ下さい、また、少し待てる、

二月二日、沼津千本より、大阪市、大島武雄様宛(手紙)

大島君、そして、花子さん、

三月

つてゐるのですけれど、一向に元気がないのです、細君はいまかきもちを切つてゐます、いづれあとで手紙認めるでせう、

どうぞ、お父様阿母様にくれぐれよろしく申上げて下さいまし、いづれまた小生もお目にかゝりに参ります、

では、右とりあへず、

二月二日午後 收 水

武雄様

花子様

大島君、

昨日は皆と落ち合ふ日ではありませんでしたか、皆の元氣はどうでした、達下君はうらからかでしたか、その他、三池君、谷口君は、別しても南海驛前振廻し居士の御機嫌は？ 斯んなことを書いてると皆に逢ひたくなつていけない、

いま來客、以上にて、

折角お招きしておいて一向にお構ひもせず、しかも何だかそわ／＼としてお歸した様で、心残りでしやうがありません、あゝもしたかつた、斯うすればよかつたなど、昨日終日、氣抜けのした様な頭で、あれこれと考へては残念がりました、どうか悪しからず思召して下さい、

今日はまた早速にお手紙を頂き、恐縮でした、花子さんのお手紙の様に、沼津驛はまことに苦しかつた、人を送るのは別に珍しくもない癖に、あの時はひどく心が惹かれて、あと／＼まで苦しうございまして、三人共、總シヨゲで、一杯やらう勇氣も失せ、黙つて歸つて小生だけ飲み直して元氣をつけました、昨日も一日、變でした、でも、今日はアートの叱られながら爲事をしてゐます、あなた、ちもお勞れだつたでせう、大丈夫ですか、この春はまた是非お待ちします、

ポイチエンチエイ(註、二男富士人は何の事もありませんでした、たゞ、翌朝の、昨日の朝の二人(ヨンヨンを)を見るのは可哀想でした、例の目高ゴッコをばや

二月六日、沼津市千本濱より、東京、村井武様宛(手紙)

喜んでくれ、無理算段ではあるが、四百五十坪ほどの土地が漸く手に入った、(多分大丈夫、明日のうち決定)、

(ここに自筆の圖面あれど略す)

と云つた形の地勢だ、千本松原の蔭で、一軒家になるわけだ、先づすばらしい好位置といひ得るとおもふ、

さて、今度はいよいよ具體的に君を煩はす番だ、一寸ひまを作つて、来て見て呉れ、頼む、今度は無駄骨にはさせない、大阪の半折會がすめばすぐ普請にかゝり得る見込だ、

僕、この十一日から十六七日まで岡崎名古屋に行つて来る、それからさきのいつかにしてほしい、都合

四

はどうだらう、一寸、聞かせてくれたまへ。こなひだ、大阪で金田晴一に逢つた、嬉しかった。

とにかく、右、報告と御都合御伺ひまで。

二月六日 牧 水

村井武兄

御家内皆々様、お變りなしだらう、寒いので阿父さんのリウマチがどうかと噂をしてゐる、よろしく。

五

二月七日、沼津市千本濱より、近江、鎌源三郎様宛(手紙)

鎌君、病氣はいけないな、どうぞしつかり用心して下さい、何しろ、寒いから、一切無理を抜きにして静養して下さい、病氣と聞くと、どうも氣が、りでいけない、

大阪では失禮しました、憾みはおんなじです、然し、あの場合、どうにもならず、お別れしてのあとは實

に淋しい、それは、君に對してのみならず、但馬の^{カサネ}上道君などに對しても全く同じ感じです、

もう四五年も前から、關が原のあたりから柏原、あの邊の小松山の間の道をぶらぶらと歩いてみたいと念つてゐるのですが、なか／＼折がない、然し、思

ひ立つたことはいつか必ず遂げねば承知出来ぬ性分ですからいつか一度は必ず出かけます、やはり初夏か晩秋のころをねらつてゐます、さうすればその終

りを君のうちにきめて、ゆつくり御厄介にならうと楽しんでゐます、但し、今年の初夏は全然駄目、例

の半折會のためです、このためには小生全く半死半生のおもひをしてゐます、石楠花(いつかお葉書を

其處から頂きましたつね)も見たいけれど、諦めねばなりません、四月初旬に信州で半折會、五六月のころ、遠くそのために九州まで走らねばなりません、

一體、日野といふとどの邊になります、大體の地理を教へて下さい、汽車だといふ風に行くのです、小生、お話にならぬ多忙です、もう半年の辛抱だと、瘦がまんを張つてます、二月號、今日、先刻

漸く編輯を終へました、十日には出來ます、とにかく、その風邪を早くお直しなさい、今年のはたちがるいといふからなほ氣になります、小生など、あんな無理をしてやつぱり意張つて(?)ますよ、

とりあへず、

二月七日 牧 水

鎌源三郎様

六

二月九日、沼津市千本濱より、大阪市、大島武雄様宛(手紙)

四人様

世にも恐しき寄せがきを拜見し、流石の小生も氣がぼう／＼となり、あて見つ立つて見つ、はては例の長階子段を降りてみつ登つてみつ、何にも手がつかず、貴重なる午前數時間を全く棒に振り了んぬ、サテ／＼世に恐ろしき寄せがきもありつるものかな、

さつきからこれを細君に見せむとおもへたゞで見
するが勿體なくもう三十分もたつてから何物かと引
き替へに拜見を許可せむとぞ畫策中、——時これ午
前十一時四十分——。

初めはたゞ面白可笑しく讀み始め、やがて、ふうー、
ふうーと太息をつく様になり、やがて別冊の「損害
申告書」を見るに及んで終にだらしなく落涙しはべ
りぬ、嗚呼、諸君よ、助けて呉れ！

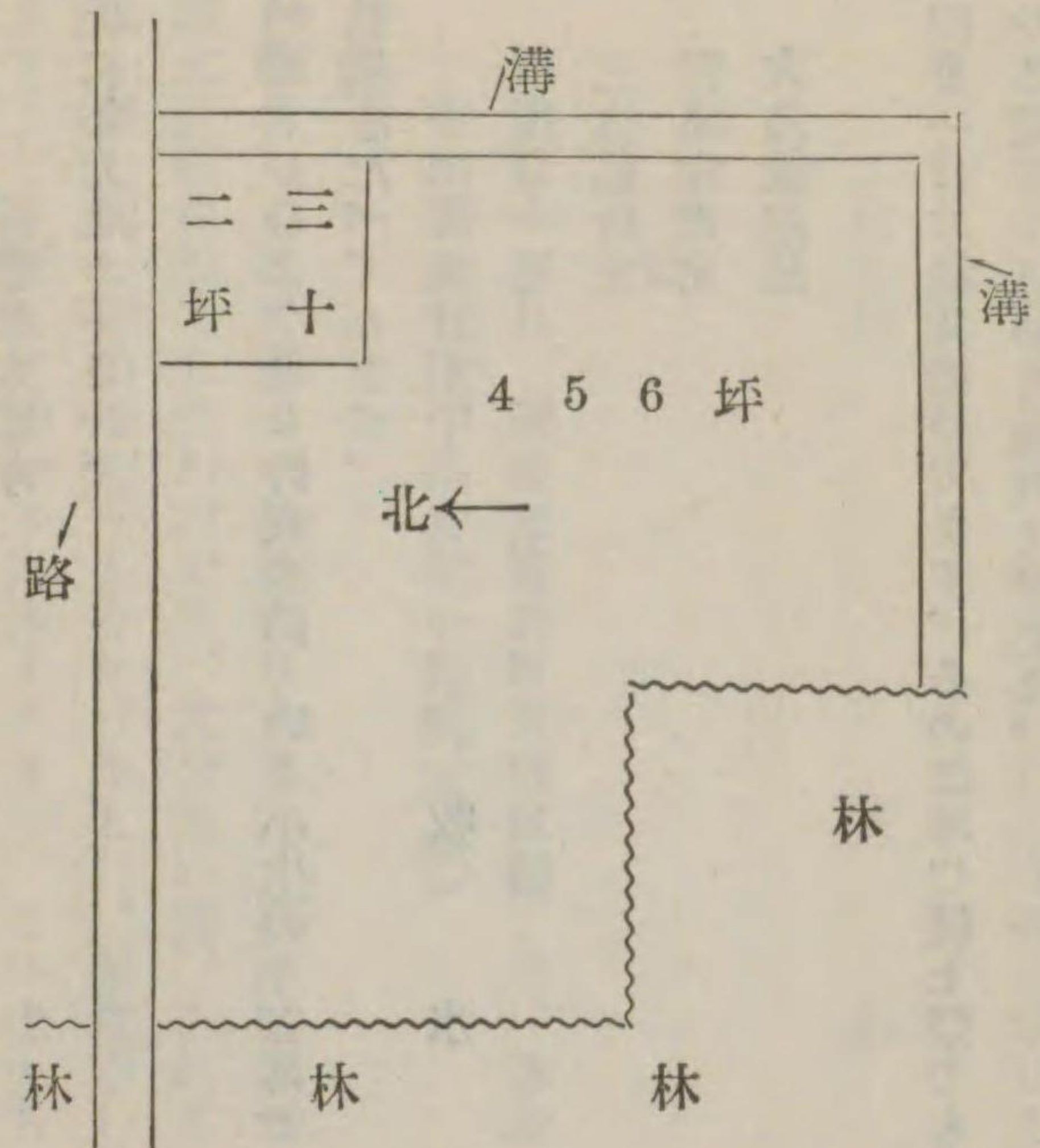
然し、何とも恐しいことだ、もう、友だちよ、チト
靜かにしようではないか、何だかしみんぐ恐しくな
つて來た、但し、薦於居に於けるそれがその時代の
最後かも知れん、氣のせあか、初めから何だか凄慘
の狀を帯びてゐた。

昨日あたり君たちあてに報告狀を書かむとしてゐた
ところでした、寄せがきどきもを抜かれたが、強
ひてそれをとり返して書き出します。

まだろく／＼お禮をも云つてゐなかつたとおもふ
が、それらは一切抜きにします。
地所のことです。場所は大島君が見て行つたので、

就いてお聞き下さい、あれが、地券面チケンメン(市役所の)に
よれば四百五十六坪あるといふのです。それを持主
の方では坪二十圓といひ、長倉君の方では十二三圓
といひ、長い間ソソセウを重ねてゐましたが、
どゞ、十七圓といふところにおちつきました、とこ
ろで、半折會の金なるものが、東京沼津の分を寄せ
て(東京は實際の金まだ一向に集りをらぬ様子)三千
圓とし、残りの金四千それがし圓を長倉君の手によ
り銀行から無理に融通して貰ひ(東京の分も都合で
は何とかしませうと同君云つてくれます)、どうに
しても此際土地だけ登記しておおきなさいといふこ
とになつてゐます、そして、その事がきまつたら、
それこそ無理押しにも直ぐ家を建てる手段に移りま
せう、といふのです。で、二三日前、いよ／＼土地
の受渡しをやらうとした時に、端なく其處に一つの
缺陷あるを發見して、また／＼地價の低下問題起り
て事きまらず、今日、長倉君の銀行の頭取(市會議
長などしてゐる男)を仲に入れて、どうしても一圓
か一圓五十錢位るまけさせるといふことになつてゐ

ます、多分、今日は何とかきまりませう。缺陷とい
ふのは、



右地所の肝心な入口に、三十二坪だけ他人の所有地
があつたのです、それも賣買のむつかしい寺の所有
地なのです、これも何とか片づけねばと汀峰先生大
車輪中なのですが、何とかうまく片附ませう。

とにかく、右の始末で、借金は残るが、土地だけは
二三日中に、こちらのものになります、先づ／＼喜
んで下さい。

ところで、そちらの方の大體の豫算がつきましたか
知ら、それによつて直ぐ「家」にかゝるか、もう少し
延ばすか、を、きめたいとおもふのです。大體の豫
算さへつけば、期日は少々遅れても構ひませぬ、京
都神戸の方をも聞き合せて、およそのところを知ら
して下さい。

なほ、念のために云つておきますが、金額の多少は
全然頭におかないで下さい、これはたゞ出来るだけ
出來たゞけを全部と見ねばなりません、斯うしたこと
のために、萬一、諸君に氣を揉んで貰ふ様なこと
があると、小生自身、一番心苦しい位置に立つこと
になるのです、吳々もそのことでは氣を使はずに下
さい。

小生、明日出立、静岡一泊、三月に半折會を開く下
相談を試み、十一日より十五日まで岡崎滞在、そこ
のを揮毫し(小さいものです)展覽會を開き、十六

日名古屋一泊、サグリ(可能性の有無の)を入れて來
ます。十七日歸宅。で、若し、その間に何か聞か
して貰へるなら、十一日より十五日まで

岡崎市康生町一〇七、

近藤孝太郎方

宛におたより下さい。

竹添君がひよつこり昨夜來訪、いま小生のうしろで
林檎をたべてゐます、

二月九日正午

牧 水

平田春一兄

三池篤於兄

野崎宣重兄

大島武雄兄

四月一日、是非待つてます、そのころ、棟上祭でも
やる様にするかも知れませぬよ。

大島君宛(別紙、同封)

大島君、

何だか、ひどく暫らくぶりの氣がする、ほんのこ
ひだ逢つたばかりなのに、

花子さん、つかれが出はしませんでしたか、

神戸の寫眞版、不幸にも間に合はず、といふのは記
事を電報で神戸に問合せたところキジデキヌソチラ
ニテヨロシクタノムの返電來り、呆氣にとられて、
それまで待つてゐたのを思ひ切つて編輯を進めたか
らです、今日中に雑誌出來ます、残念だが神戸の寫
眞も記事(も一度云つてやります)も四月號まで延ば
しませう、

せきたて、こんな有様ですみませんでした、野崎君
にもよろしく。

それから、賛助員其他に出す手紙、ひどく遅れまし
たが、今日出來ます、宿所のわからない分だけ、宛
名だけこちらで書いて一束にして君の方に送ります
故、宿所を君の方で書き入れて投函して下さいませ
んか、お手数ながらおねがひします。

たのみます。

明日、名古屋へゆくつもりでしたが、やはり勞れた
ので、明日すぐ歸ります、夜おそくなりませう。い
づれお目にかゝつて申しますが、とりあへず、右、
お禮と御願ひまで、

森田氏へよろしく申しあげ下さい。

十五日朝七時半岡崎にて、 牧 水生

長倉宣一様

あのよせがきを朗讀しましたら、座にありし六七
人が、ひとしく拍手しました。

八

二月十七日、沼津市千本濱より、東京、村井武
様宛(手紙)

村井君、昨夜遅く岡崎から歸つた、不養生をして風
邪を引いてしまつた、

地所が明日登記済になる、いろ／＼厚意を寄せてく
れる人(長倉君といふ人、今度、逢つてくれたまい)

何だか惶しく、心苦し。

三月静岡、四月信州、都合では五月九州に飛びま
す。御父様たちに呉々よろしくねがひます。

二月九日

牧 水

武雄兄

七

二月十五日、岡崎市傳馬町芳野旅館より、沼津
市御厨銀行内、長倉宣一様宛(手紙)

長倉君、

難有う、これで漸く一段落つきました、空中樓閣が
地上に根をおろしたわけです、大分永い間、あれこ
れと御心配と御めんどうをかけたました、感謝申し
ます。どうぞ、すつかり出來上るまで、この上とも
くれ／＼お願ひ申します。

當地の成績、いま八百圓ほどの由、六七百圓は残る
こと、思ひます、近藤君から次ぎ／＼と(集るにつ
れて、せう)君宛にお送りする筈、これもよろしく

が、あて、金もどうやらやりくりが出来さうだ、で、早速柱を押つ立てたい、二十一日に来て貰へまいか、無理だつたら無論二十日でもいゝが、

それに、こちらに心あたりの（といふより、他から親切に紹介された）大工があるし、都合では君とも逢つておいて貰ひたいとおもふのだ、但し、このことは曾ての君の手紙もあつたので、萬事君の意見に従ふのは無論のことだ、

とにかく一寸都合を知らして下さい、

ノミスギ、テガフルヘテジガカケヌ、

二月十七日

牧 水生

村 井 兄

岡崎の宿屋で、吉田律君に逢うた、名古屋刑務所々長といふオソロシイ役人に出世してゐた、

九

二月十九日、沼津市千本濱より、大阪市、大島

武雄様宛(手紙)

感謝々々、よくいふ言葉だが、お禮の申しやうがないといふあの氣持でいま胸中一杯です、元來が無理な仕事であつたので、諸君の活動をこちらから眺めてゐながら、寧ろ諸君より苦しい思ひを小生はしてゐたのです、が、とにかくそれが此處にめでたく千秋樂を告げたことは、お互ひにとつての歡喜です、そして、右いふごとく小生にはいふに云はれぬ「難有さ」をも感じてゐるのです、多く云ひませぬ、どうか、萬事御察し下さいまし。

これからあとは小生の爲事になります、諸君にイヤなおもひをさせぬだけに、精々速く、片附けます。信用しておいて下さい。今のところ、大島君の通知を待つて、材料を東京から取り寄せ、すぐ墨をするといふことにします。

サテ、四月一日を待ちますよ、それまで小生精進潔齋、拱手瞑目、偏へに思ひを凝らしてゐます。どうかすると、そのころ、もう、棟が上つてるかも知れないぞ。イヤ、ほんとだ、戯談にあらず、確にその

段取に及ぶ自然の理がある。

が、今度は單に飲み騒ぐを旨とせず、直ちに湯ヶ島に赴いて、靜かに山櫻百首競詠などを試みる覺悟をきめておきませう。湯ヶ島の櫻よ、どうか、氣を利かしてそれまでに咲いてゐてくれ、

何しろ、諸君をいぢめました、何事も無かりし昔に心を返して、どうか、ほつかりして下さい。合掌。

小生一昨夜岡崎より歸宅、その前々夜より催しゐたりし風邪、車中にて本物となり、早速寢込んでしまひました、たいしたことなし、たゞ、ノド脹れたゞれて飲(食)不能の傾向あるを悲しむのみ。岡崎、初め五六十口の豫定のところ、八十口近く出來ました、但し、小さい所のことゝて、いろいろ出費ありしは沼津と共通。

三月中旬に静岡で、四月に信州(北信)でやります。五月直ちに九州を攻めむと思へど、一先づこの邊にて身體と相談する必要あるをも覺えます。地所、坪十六圓にていよゝゝ約定決定、たゞ、向

うが擔保に入れておいたりしたことを發見し、登記のこと、こゝ一兩日ごたつきます。友人村井が明後日か廿八日かに來ます。大工(伊豆土肥より招く)もきまりました。

二月十八日朝十時

若山 牧水

- 野元純彦兄
- 谷口 登兄
- 達下愛河兄
- 野崎宣重兄
- 三池嵩於兄
- 平田春一兄
- 大島武雄兄

斯うして名前を書いていると、何やら一杯握つてゐる指頭の感覺を覺えて、咽喉俄かに痛む。

大島君、(別紙、同封)

岡崎へのお手紙、難有う、直ぐ返事を書きかけて、終に終らせえずに破いて來

ました、
何しろ、即座に例のものを書かせられたので、
弱つてしまひました。

いろ／＼の御心づくし、全く何と云つていゝか解り
ません、どうかお互ひに沈黙することに許して下さい、
完全に三ヶ月間、君を占領してゐたことを、君、
並びに君御一家に謝罪し感謝します、
會の成績のこと、不満どころか、非常な好成績では
ありませんか、何事もさう豫想どほりにゆくもので
ないことを、小生はよく知つてゐますし、兼々もそ
のことをばその様に申しあげておいたのです、
今後の處置、萬事、君の方で順序を立て、下さい、
その通りに小生の方では致します、よろしき様、萬
事御ねがひ申します、

今日は寒い時雨日、少し熱があるので、頭重く、こ
れで失禮してまた床へ潜ります、御免下さい、
御うち、皆様へ、よろしくおつしやつて下さいまし、

十八日午後

牧 水

武雄様

一〇
二月二十日、沼津千本より、伊豆、山崎城様宛
(手紙)

山崎君、
先日留守して失禮、
地所のこと、喜んでいたゞいた由にて小生も嬉しか
つた、

棟梁の事につき重ね／＼の御心づかひ、難有う、實
は先日(七八日のころ)心待ちしてゐたのだつたが、
逢へなかつたのだ、それから、今日東京から友人の
村井(設計を頼むことになつてゐる男)が來ることにな
つてゐたが、今、電報で、急用出來、一週間延ば
す旨云つて來た、彼今日來りし上、談合して、君の
方に打電し、棟梁に來て貰ふつもりでゐたのだつた
が、右の始末、君だけでいゝから承知しておいてく
れたたまへ、村井がどういふ意見か、忙しい男で、一
向まだ詳しいことが小生にもわからぬのだ、とにかく
く、誰にか頼むとなれば、君の方におねがひするこ

とだけはきめておく、
岡崎、もと／＼小さな所なので、そのつもりだつた
が、それにしても割によくゆきました、大阪も先づ
／＼のところか、

とにかく、話がつき次第、明日にも柱を押し立つる
準備は出來ました、
一寸、行きたいが、それこそ、寸暇なしだね、おま
けに岡崎で風邪をしようつて來てゐる。

右、當用のみ。

二月二十日後四時

牧 水

山崎 兄

土肥館に呉々よろしく。

一一

二月二十日、沼津千本より、東京、村井武様宛
(手紙)

電報只今着、お忙しいなかいろいろ御心配かけて
恐縮甚し、

別に日を争ふ問題でないので、多少の遅速はどちら
でもいゝのだ、ことに小生まだ風邪を脱せず、一週
延びれば却つて安心の形だ、
細君、いつぞや(ずる分永らく、すまない)君から
借りた設計圖の大きな本をあげくれ膝の上に載せ
ては、あゝだ斯うだと獨り言を云つてゐる、その
せぬか、このごろ、晩酌のさかながまことにおそ
まつた、

二十日夕

牧 水

武 兄

一二

二月二十一日、沼津市千本濱より、三河國、金
澤修二様宛(手紙)

御手紙、拜見、御静居さぞかしとうち僞ばれ申しま
す、木屋の木の名など、いかにもなつかしく心に浮
びます、何卒、御一家皆様によりしく申しあげて
下さいまし、葛子様は御元氣ですか、
風邪、幸にたいしたことなくて済みさうです、金澤

君から病氣のことで叱られる様になつてはもうおしまひだぞと申したことでございました、いま、丁度、いよいよ登記済になつた例の地所を持主として初見参に行つて来たところ、四百九十六坪の土地いづばいに建坪六十坪二階建の家を建てようとしてゐたこと、細君により只今発見せられ、嘲罵を蒙りました、

三月一杯おめでの由、沼津めつきり淋しくなりますが、然し、その御静居を想像すること、また悪くありません、名古屋にでもゆく様になればお驚かせするかも知れませんが、

けふ、小生大嫌ひの重疊日、頭しきりに重し、ふとんに潜らむとぞおもふ、相手あらば一杯あしからぬ日和かな、のどのいたさを田中に入れても。

二月二十一日

牧 水

修 二様

一三

二月二十二日、沼津千本より、東京、村井武様

宛(手紙)

村井君、昨日の夕方、酔つ拂つて書いた寄せがきを見てくれた、

あれ、戯談半分の本氣半分なのだ、

大工もまことに善良なる四十男(三十四ださうだけれど、ふけてみえる)で、安心した、昨日、實地を見につれて行つたら、昨夜小生方一泊早速今朝早朝から設計圖を引き始め、正午の船で歸る(云つたか知らないが、彼、伊豆土肥の者、實は土肥館の主人の紹介なのだ)と云つてゐたのが、夢中になつて、いまだに机に噛りついてせつせとやつてゐる、これは昨日一杯飲みながら我等が云うた、必要なる部屋』の概念にもとづいて試みに引いてゐるもので、妻が側からあれこれと註文を云つてゐるといつた形だ、大體は間には合はうが、要するにまだ小生の氣持とは相觸れない、

實は、昨日、君に来て貰へるとおもひ、前以て土肥宛にさう云つてあつたので、取消しも間に合はず彼は出て来たのだが、この次ぎ君の来る日にも是非出

て来て、君に逢ひたいと云つてゐる、そして、いま自分の作つてゐる圖面を提出して君に斧正を求める氣らしい、昨日、これから私だけ上京して村井様にお目にかゝつて来ませうか、とも云つてゐたが、小生はその前君だけに一寸でも逢つておきたいのだ、「病氣」は戯談だが、どうかしてさういふ時間がこさへて貰へたら誠に難有い、無理にとも云ひかぬが、念のため、ねだつてみる、

あれこれと「必要」が出来て、二階二室(客間)下九室、合せて十一室の大きなものになるのだ、止むを得ない、何しろ敷地はすてきなのだよ、大工氏、實はそれをを見て昂奮した傾向がある、

小生自身上京すべきだが、とにかくこの場所を見て頂いて大本をきめたいと思ふのだ、

我儘ばかりで濟まぬが、以上の状態、よろしく御憫察を乞ふ、

二十二日夕四時

牧 水

武 兄

一四

二月二十五日、千本より、御厨銀行内、長倉宜一様宛(手紙)

お寒いではありませんか、

風邪はもう大丈夫ですか、小生まだふら／＼してゐます、昨日から床はあげてゐますが(代りあひまして細君とふじとつべとがねこみました)そして今日あたり市役所からあなたの方へ廻るつもりでゐましたが、あまりの寒さにもう一日用心することにしました、明日は大抵大丈夫です、

東京の越前君から同封の小切手が来ましたのでとりあへずお届けします、なほ、利雄さんの方へ来てゐたといふ分二十圓をも同封します、御手数恐れ入りますが、例の様適宜に御處置なして下さい、

この廿一日に土肥から例の大工参り、二泊し、自分考への設計圖など拵へてゆきました、東京の村井がその日來る筈で来ず、この廿九日に延びましたので、大工との顔合せもその日に延びました、大きな家に

なりさうで、弱つてゐます、

それから、あの、お寺の地所はどうでせう、早速あれがこの廿九日など問題に（と云つても、あそこに直接関係なき様には設計しますけれど）なりさうなのです、うるさきことを、恐れ入ります故おついでの時、よろしくおねがひ申します、

もう一つ、あの場所の小作人、その後また新しい肥料を施した様子もあり、甘藷の苗床などもそのまゝにしてゐる様ですが、これにも一寸こちらから、わたりをつける必要がありはしますまいか、一寸氣になりますので、御相談申します、

「樹木とその葉」が出来て来ました、先づその第一部をとつて机下に献上致します、

お歸りがけに、いかがですか、

二十五日

牧 水

汀 峰 兄

一五

二月二十五日、沼津千本より、東京、村松道彌

様宛(手紙)

道彌さん、今朝は君に手紙を——といふのは昨日の夕方、君の兄さんが見えたので——書かうと思つてゐたところへ君から先に來た、

結納もお済みの由、何よりおめでたう、小生無論喜んで參ります、大體の日取がきまつたら早速知らして下さい、丁度そのころ信州(北信)で半折會をやることになつてゐるので、その日割をきめる必要が有りますから、

昨日兄さんともいろ／＼話しました、兄さんも大分お喜びの様で、これでまア／＼安心しましたと繰返し云つてをられた、兄弟のない小生大に羨しかった、非常におだやかなしみりした家庭が出来上りさうで、小生等も全くわが事の様嬉しい、君自身は更らにいろ／＼の希望と期待と覺悟とがあること、おもふ、

小生の方のことも喜んで下さい、地所の登記既に済み、大工も決り(伊豆の土肥から來ることになりました)あとはこの二十八日に東京から村井が來て設

計をしてくれ、ばい、だけになりました、多分三月早々建築にかゝれませう、

岡崎も意外の好成績、この次ぎは三月末か四月中旬静岡で、四月上旬信州で、五月中に名古屋で半折會續行です、静岡の際には何分頼みます、昨日兄さんにもおたのみしておきました、

ア、それから越前君から全額が昨日來ました、かなりヒドクメンをしたらうと氣の毒になりました、

小生、四日までは一寸ひま(?)です、とにかくうちにゐます、一二度静岡にゆかねばならぬも知れぬが大抵日歸りです、一寸でもひまがあつたらおあそびにいらつしやい、これからは旦那様になるのだから、今までの様にゆかないだらうから、

「樹木とその葉」早速さう云つていたゞいて難有う、氣持のいゝ本ですね、賣れてくれかし、と祈つてゐます、ア、「みなかみ紀行」を十冊ほど送つて貰ふ様、然るべき所へ(發賣の本屋へ)電話でも傳へてくれませんか、價は(割引してほしいが)振替で送ります故、葉書を一本添へて貰つて下さい、少しく急ぐの

です、

では、とりあへず右まで、

地所、建築のこと、皆によろしくお傳へ下さい、

二月廿五日

牧 水 生

道 彌 様

亂筆でごめんなさい、岡崎から風邪を引いて歸り、ぶら／＼してゐて、爲事が溜りに溜つてゐるので、アートンも細君もふうちゃんもみんな風邪。

一六

二月二十八日、沼津市千本濱より、東京、長谷

川 銀作様宛(手紙)

すつかり沈黙。

今日村松君より、北原君、アルス新聞、半折會問題の傳達あり、北原君の厚意は誠に難有いが、かなり一般的に評判になつてゐるので、この上また披露するのはどうかと思ふから、紙上での募集は控へたいと思ふ旨を、君より北原君へ、お禮といつしよによ

ろしく傳へておいてくれたまへ、小生よりもいづれ
同様申し送りますけれど。

君の方はどうなのだね、忙しいのかね、このごろ一
向出張の話も聞かぬが。そして細君はいかゞにや、
寒いので、またへこたれてはゐないか知ら。とにかく
く、べらぼうに寒い。箱根愛鷹、天城近來常に眞白
だ。小生岡崎で風邪を引いて、まだ寝たり起きたり
だ。大阪の方からやかましく云つてくれども、とて
も書く元氣なし。但し、今日あたり大分快し、もう
二三日のところとおもふ。岡崎は意外の成績で、千
兩から上つた。いま、静岡と信州（北信、彌次さ
んの骨折）とで進行中。次ぎが、名古屋。
地所、登記済。今日夕方東京から村井来り、伊豆土
肥より大工棟梁来り會し、明日設計出来上らば三月
早々鮑かなづちの響を千本松原に漲らすことにす
る。とてもすばらしい場所だ。たうとう、空中樓閣
が大地に根をおろしたのだとおもふと、一種異様の
感がある。君等また同感だとおもふ。ア、君から沼
津市外、片濱村西間門、長倉宜一宛、禮狀風のもの

を一本出しておいてくれたまへ。何から何までみな
彼の世話なのだ、頼みます。

高久中島の諸君は如何、どこにも黙つてゐて濟まぬ
が、折あらば君よりよろしく。風邪は小生のみなら
ず一家を風靡し、流石のアートンも五六日寝込んだ、
今ではマアコヨンヨンと小生との床が残つてゐる。

御近況聞きたし、細君によろしく。

二月廿八日

牧 水

銀作 兄

一七

三月九日、東京、村井武様宛（手紙）

村井君、

先日、難有う、お忙しい中をわざ／＼来て頂いて、
濟まなかつた、然し、これで漸く安堵したといふ氣
で一杯であつた、たゞ、あの通り偶然多勢一緒にな
り、その結果として、君をあゝしたところへ引つ張
り出して、重々恐縮したが、止むなきこと、赦して
くれたまへ。

設計圖、誠に難有う。いかに、氣持よく出来てをり、
且つ、兩角の間敷が、小生等の第一案より各二三間
づ、縮んでゐるのなどに、悉く敬服した。しかもそ
れであつて、疊敷は多少多く敷かる様に出來てゐるの
だね、やはり餅屋は餅屋なる哉と思つた。實際用と
して、多少の訂正をして頂きたく、それらを一括し
て同封のものに書いておいた、就いて御覽の上、な
ほ君の意見をも加へて、然るべく善處しておいてく
れたまへ。第一は、あの地所に位置する家屋の方角
の、少しの變更だが、これは土地の老人などを呼
んで來て、冬夏の日光の具合、風の具合などを考
へて、どうしてもこの方がよさうだといふので、原
圖より少し右に振つたのだつた。

君の心を煩はした「將來借家建設地」は當分のうち、
撤回しておかう、さうしないと肝心の松原と疎遠に
なることになり、心細いのだ。そして、家と松原と
道路とに圍まれた空地一面を果樹園とし、桃、蜜柑、
葡萄、栗、梨、柿などを植ゑ込まうとおもふ。すで
にその一部の木をば註文した。

寺の地所が借りられたらテニスコートでも作らむと
おもふ。

サテ、濟まないが、訂正案によつての上の、新設計
圖と、二階のそれとを、至急作りあげて送つて貰へ
まいか。あの大工がむやみに急いでるし、（また、そ
の心持を逃がすのはよくないし）小生等の心持安定
の法としても一日も速く實行にとりかゝりたいの
だ。濟まないけれど頼みます。實は今日、小生これ
を持つて上京、君を訪ねていろ／＼相談してきめた
方がより速く出來るとおもつたけれど、どうも風邪
が恐く（あとに詳記）、中止してこの手紙に改めたの
だ。持つて行くが禮儀でもあるのだが、特別に赦し
てくれたまへ。

もつとも、急ぐと云つても、積木細工ではないので、
さう無茶もやれない、其處は君の自由意思に従ふよ
り外はない。若しまた是非小生等に逢ふ必要があつ
たらさう云つてくれたまへ、小生か細君か上京して、
君の事務所に君を訪ねて、日歸りに歸つて來ようと
おもふ。但し、それなくて濟めば結構。

大體、以上でよかつたかとおもふ。とにかく、よろしくおねがひします、合掌。

小生、あの夜のバチ當り、君の歸つた（あの朝誠に失禮、あの時からすでに頭上らなかつたのだ）日からまた大病人、醫者に來て貰ふ騒ぎで、ずつと寝てた、昨日からどうやら起きつねつた、今日、あの地處に行つて一二時間立つてゐたので、また少し悪し。ために、文字、よく書けず、御判讀を乞ふ。

細君より吳々よろしくとのこと。

三月九日

牧

水

武大兄

訂正圖説明

一、門と玄關と便所、圖の如く訂正。玄關土間、廣すぎるが、妙案なきや。但し原圖にありし、板の間の應接所は小生には全然不要。

二、子供室、次の間の北西側を障子とす、通風取次用のため。

三、臺所多少狭しとのことにて、圖の如く。

四、編輯室、圖の如く。

五、主婦室、圖の如く。

なほ、原圖に「マド」とある所は、たゞ濡縁風（花鉢など置く）のかけ出しにとゞめおかむことを希望す、用心のため。

六、書齋、一と二。これは別に訂正圖を書いて添へておいた。押入も本棚も、上（天井近く）が

があいて、みつともないとおもふが、よき方法なきものにや。

本棚むやみに多き様なれど、強ちに本ばかり入れるにあらず、自他原稿紙なども入れおかむとす。三個のうち、一はカーテンにて、一は襖か板戸にて、一はガラス戸にて、掩ひをせむかとおもふ。また、相對せる二個には同じ色のカーテンを用ひ、他の一つにガラスなど用ふべきか、如何。

テーブル、つくりつけにすべきか否か、まだ迷ひつゝあり、要するに用材の如何により定めむとす。とにかく、向つて左に窓をばあけたし。第一は涼味をよぶために。

x 二つの廊下の相接せるところ、一間廊下となりをれり、是非かうせねばならぬにや、または體裁其他にてわざと斯くせるにや、いゝにはいゝが、戸じまり及び費用の點など如何にやと考ふるが、貴意如何。

二階、偶然、小生のいま坐つてゐるこの二階が、階子段といひ、方角といひ、疊數（但し、今の此處は次の間が板じきなれど）といひ、繪圖面と丁度一致する様なので、試みに第一考察圖を作つてみた。御參考にでもならば幸甚。

方角、それから大體の方角が、原圖（君の送つてくれた）通りだと、西日が多く入りすぎ、道

路及び溝に面した餘白地がすべていびつになり、第一、小生の書齋の窓があまりに道路（今の溝のところ）が、近々大きな道路となる由に近接しすぎるので、圖全體を、少し右に振り向けて、いまお返しする圖の通りに訂正してみた（張りつけをも、訂正の通りに直して張りつけておいた）。つまり、林、實は其處は簀の角（圖に△符をつけておいた）に、小生の書齋の廊下がつき當る様になるのを限度として、振り向けてみたのだ。松原の角と、廊下の端との間が僅か三間だが、これは構はぬことにする。どうもこの方が萬事に都合がよささうだ。かうすると、洋書齋の窓と道路との間が辛うじて五間はあく。ア、さうだ、原圖だと、お寺の地所に邸の一部が入り込み、井戸もその中に位する様になつてゐたが、お寺の地所には出来るなら觸れたくないのだ、買ふのがめんどうだし、且つ高すぎるからだ。どうかして、借りるには借りるつもりだ。

訂正に、ひどく滑稽なところなど、ありはせぬかとおもふが、あまり笑はずに呉れ。

一八

三月十日、沼津市千本濱より、信濃、重田彌次郎様宛(手紙)

重田君、

だいぶ成績よろしき様子、御盡力の然らしむるところと夫婦して感謝してゐる、實は、場所柄、さうはゆくまいと思つてゐたのです、なほ、この上とも頼みます、葉書、君の方より知らせの來次第書きます、こちら、この十五日ころ、建築工事に着手する見込、それはとてもすてきな場所だよ、先づ沼津一だね、家も相當なものを無理しても作る考へ、早くそこで諸君と共に今のことを昔語にして一杯試みたきものなり、

さうか、君の細君と同じだ、小生もツンポにな

り、足腰いたみ、眼かすみ、さんくだった、ではない、まだ、ぐずぐずしてゐる、もう一月近くだ、近年初めての永き床中生活をやつた、それから、おめでたはいつだね、

三月十日

牧水生

重田彌次郎様

(喜志子とのよせ書)

一九

三月十日、沼津市千本濱より、大阪、大島武雄様宛(手紙)

大島君、

すつかり御無沙汰してゐました、先月十五日來の風邪がまだ抜けません、實に不愉快な氣持で、眼重く耳はツンポ、咽喉は脹れふさがり、足腰痛むといふ有様で、熱などさほどでないのに、實に不愉快な氣持が續いてゐるのです、もつとも、今月の朔日(そのころ殆ど直つてゐたのを)、いゝ氣になつて夜遅くまで町で泳いだ、め、またぶりかへして今日に

二〇

三月十一日、沼津千本濱より、東京、村井武雄様宛(手紙)

思ひついたら、書き足しのこと、

一、小生の洋式書齋の廊下に面した方を、どうしたらいい、だらう、二間のうち和式書齋からの一間半を高窓にして(下を壁)、上を目のこまかな紙障子にし(ガラス戸をよして)、残り三尺(つまり細君の室寄りの)を何か「氣の利いた板のドア」にする、といふ様なことはどうだらう。和式の方への通路は當然襖、テーブルの前面と向つて左とはガラス戸。

紙障子の上の、何といふか普通欄間に當るところの壁を極く狭い(つまり天井に近く、狭い壁となるなり)ものにした。細君室のタンス入と背中合せの本棚の上と、それに隣つたも一つの木ダナとの間は壁になり、相對してカケ出しになつた二つの木ダナの上は(先日、どうしようかと相談してやつた)小襖の袋戸棚としたいとおもふ。なほ、和式書齋寄りの本

及びました、今度は大事をとつたせぬか、昨日今日大分ようございます、もう二三日のところまで、それこれで、揮毫悉く遅延、申譯ありません、出来るだけ早く書くことにします、書いたのをばどうしませう、一々直接にこちらから送りませうか、それともまとめて君の方へお届けしませうか、とにかく遅延のお詫の葉書をば、小生から出します、(書き終へてから)、どちらか、知らして下さい、

家も、小生が右の有様のため少しづつ、遅れて、今日漸く桃の木を伐りました(一部を残して)、本統の工事初めは十五六日ころになりませう、都合では君たちのおいでる四月一日あたりが上棟式になるかも知れぬ、少し、遅れるかとおもひますけれど、

湯ヶ島のことを、断えず考へてゐます、山ざくらよ、どうかそのころ、咲いてゐて呉れ!

とりあへず右まで、

皆さまによろしく、

三月十日

牧水生

武雄 兄

ダナをば、高さ一間のうち下から三尺どころのところを押入から續けての物置臺とし、圖の——印の所その臺の下をば袋戸棚とすべきかとも考へてゐる、御存じの通りのダラシのない小生のこと故、出来るだけ、物置臺だの、戸棚だのは必要なのだ。

二、細君の部屋、床を親子三つの床を敷くに狭い故、八疊にせむかとの議あり、これはたゞ、一方に（東南の方に）延びるだけのこと故、さし支へなからむかとおもふ。

以上、貴意如何。

右の文中、「^レ中にある「氣のきいたドア」といふとどんなものがあるでせう、教へて下さい。

昨日、大體、先日の圖面により、必要なところだけ桃を伐つてゐたら、小作人の奴等文句をつけやがつたので、今日もとの持主に交渉せしめつゝあり、厄介な奴らなり、但し今日中に解決せむ。

いろく、めんだうなれど、何分よろしくたのみます、いろく氣になつて、一向に他の爲事手につか

ず、あはれくあなあはれ。

三月十一日

牧

武大兄

二一

三月十七日、沼津千本より、東京、村松道彌様宛（手紙）

御返事遅延、何とも失禮。

どうもしぶとい風邪で、まだ抜けきらぬ。おまけに齒まで痛んで、まことにイヤな氣持でとち籠つてゐた。一昨日、三浦敏夫君來り、ヤケ式に飲んだところ、大分氣が晴れた。

四月五日、もとより承知してゐました。五日のどのころに静岡に着けばよろしきか、御都合お知らせ下されたし。

それから、細君も一緒の方がよろしくば一緒にゆくが、（着物などはどうでもよしとして）これも君等の御意見どほりにすること故、然るべく、きめて頂きたし。

小生、明日、静岡師範に頼まれて講演にゆく、カナエ堂にも一寸お寄りします。

家いよく工事にかゝります。今夜大工（土肥の者）來る筈。金いよく入用、よろしくたのみます。

右、當用のみ。

三月十七日

牧水

道彌様

二二

三月十七日、沼津千本より、駿東郡、鈴木凌一様宛（手紙）

ありがたし、かたじけなし、二十一日、お天氣であつてくれかし。

御馳走は、大丈夫。ウントおなかをすかして來て下さい。

あの後、桃の小作人、ぐづり始めて、あのままにとめて、桃をば切らずにあります、然し、植樹には差支へなし。

小生、またも齒痛にて不景氣なりしが、今日あたり、よろし、御返事遅延、おゆるし下さい。

十七日

牧水

秋灯兄

二三

三月十七日、沼津千本より、東京、村井武様宛（手紙）

圖面、只今着、實に見ごとなので、大に驚いてゐる、斯うしてみると、なか／＼立派な家ぢやアないか、難有し／＼。

土肥にいま電報を打つて、明後十九日に來て貰ふことにする。（明日は小生講演のため静岡にゆかねばならぬから。）

そして、見積書を拵へさせる。

お言葉に甘える様だが、この土曜の晩に來て貰へまいか、やはり口から教へて貰はないと、充分安心出來かぬる、出來たらさうしてくれたまへ、さうすれば大工とも逢つて貰へるし、萬事に都合がいゝのだ。

いろく我がま、ばかり云つてすまないが、許してくれたまへ。

いま、來客中、とりいそぎ右まで。

十七日夕

牧 水

村井 兄

二四

三月十七日、沼津千本より、駿東郡、鈴木秋灯

様宛(葉書)

先刻うろたへて書いて、肝心なことを落しました、持つて来て頂く木の種類と數とを折返しお知らせ下さいませんか、二十日に長倉園藝技師に頼んで、どの木を何處に植ゑるかを大體きめておきたいと思ひますから。

何分よろしく、

三月十七日夕

若山 牧水

二五

三月二十一日、沼津より、東京、村松道彌様宛

(手紙)

七日のこと、承知しました、細君も通常禮服で出かけます、萬事は鷹野君たちから教へて貰ふことに頼んでおいて下さい、

今日、小作争議解決、いよく繩張と井戸掘のこと、めでたし、

忙しく、

三月廿一日

牧 水

みちや様

二六

三月二十三日、沼津市市道より、大阪、平田春

一様宛(手紙)

平田君、よせがきを、今日も難有う、笑はせられ泣かせられ、いつも手近のところに置いてくりかへし、珍讀します、よせがきも随分來るが、君等の、ほど心を動かせるゝのはない、ふざけつくしてゐて而かも常に心底しんぞこと亂したところのないのが自然斯うなるとおもふ、

小生の方にては悉皆御無沙汰にて何とも申しわけなし、もとくさうであつたのが、半折會なることを始めて以來一層心がおちつかずなり、いつも眉をかき寄せ上目づかひに物を睨んでゐる様な氣持で、自身初め全くやりきれないので、どうぞ許して下さい、お正月以來、あの時のお禮もまだよう云つてない氣持で、心苦しう感じてゐます、半折會といへばまた君たちに對し、まことに相濟まぬ氣が先立つのだが、これも全く止むなきこと、許して下さい、運悪く岡崎で悪性の流感にやられたのが、遅延の力を添へました、然し、幸にもういゝ様です(わるいと云つてねこんであるのではないのだが、身體をひどく勞れさせる風邪で、いつも半馬鹿の様な氣であるのです)から、こんどこそ本當に二三日うちに書きにかゝります、大島君へは君より電話となり、大に彼の心をときほぐす様に、靈的按摩をやつておいて下さい、なアに書きにかゝれば二三日で濟みます。

四月一日の朝をしきりに夢想してゐます、お言葉通

り今度は胃袋咳をやらぬ程度にしんみりと飲み且つ歩きませう、いや、話ませう、幸ひ、今日の雨で明日明後日桃がさきます、近所はずつとその畑です、櫻ももう四五日のところ、家のこと、小作争議があつて一寸遅れましたが、日がよければ四月一日を地鎮祭とすることにませう、もう、繩だけは張つて(引いてといふか)あるのです、就いては君の店より緞通じゆんつう(十二疊じき)一枚と、カーテン(窓用と書棚用と)三四枚とをおねがひしたいと思つてゐますので、若し見本などいふものがありましたらお持ち下さいませんか、但し話だけにてもよし、全部小生の部屋に用ゐるものです、場所はもとより、家もまんざらでないもの出來さうです、喜んで下さい、話またもとに返る、一行は誰々です、君等二人に大島、野崎といふところですか、何だか淋しい氣もするが、また悪しからずか、しめやかに湯ヶ島へ出かけませう、お、其處の山ざくらよ、どうか一本だけでも咲いてゐてくれ、今度こそ競詠百首ですね、三角がまるい眼とろけ眼になつて呉れ、一行人數、

折返し知らして下され、
名簿が、明後日出来ます、堂々としすぎて創作社主
幹どの大頭痛とござい、四月號、どうやら間にあひ
ませう、忙しやく、

沼津を(富士よ、どうぞ一寸でも晴れてくれ、まだ
雪が残つてます故、晴れてさへくれ、ば眺め冬のご
とし)とうくお目にかけますね、難有い、
何だかもうその日になつたおもひです、小生のうち
で休んでいたくのも誠にうれしい、本當の「小生
宅」ならばなほい、んだけれどそれはお取つときに
しませう、桃もさき櫻もさきます、幸ひ小生もいや
らしき風邪漸くよろしく、この分ならば大丈夫湯ヶ
島へ御案内出来さうです、實は内々それを氣に病ん
でゐたのです、

けふは朝から沁々とした雨でした、おかげで、小生
の心にも割合に生氣出で、珍らしく長き手紙など
書きました、

では、四月一日早曉をお待ち申します、細君も何か
書きたいでせうが、丁度夕刻、小生だけにとゞめま

す、

お、お、箱根の空が晴れて来た、これでこの雨も
あがるかな、志津子さん、一昨日ネ、富士の裾野の
方から一人の社友が、柿、栗、山ざくら、うめもど
き、ゆすらうめなど四十株ほど持つて来て、今度の
家の庭に植えてくれたのですよ、その木々のために
も今日の雨は難有い雨でした、

三月二十三日夕方五時二十分 牧 水生

春 一様
志津子様

疲れたれば読みかへさず、亂筆御判讀下されたく
そろ、

二七

三月二十五日、沼津千本より、大阪市、大島武
雄様宛(手紙)

ちよつといま、おもひついたら、
じようだんとはいへ、おねだりしたとおもふが、例

のおさけのこと、或る引つぱりからこちらでちやん
と用意しておくことにしました故、前のおねだりは
とり消します、こちらのもの、灘ではないが、地酒
ではありませぬ、やはり西の方で出来たもの、
御同勢を一寸お知らせ下さい、それから滞在日數を
も、

いま、四月號できゆうくアートンにとつちめられ
ながら、クスリクスリと四月一日其後のことを思ひ
樂しみ盗み笑ひをつづけてゐます、
石井まさ子女史をおさそひなさいナ、

お天氣であつてくれるとい、なア、丁度宵月もあ
るんだし、

廿五日夜 牧
武雄 兄

御同行の諸君にもお傳へ下さい、(封筒の裏面に)

二八

三月廿六日、沼津千本より、駿東郡、鈴木凌一
様宛(手紙)

鈴木君、病後の多忙でまだお禮もよういはなかつた、
許して下さい、先日は誠に難有う、單に木を植ゑる
といふでなく、云ひ難い親しみがあつて、ほんとに
嬉しかつた、幸に今日あたり行つてみても、どれも
すべて生氣豊かな様だ、どうかして只の一本も枯ら
したくなく、氣を揉んでゐます、なほ、お禮に書くも
の、お禮狀、承知してゐますが、何しろ時間がない、
然し、多分明日か明後日は書くことになりませう、
棕櫚の木、難有し、然し、この木は出入口に植ゑた
いので、それをそのまゝいたゞいておいて、この秋
の植樹期に持つて来て下さいませんか、或は家の大
體の木組でも終つたころ、まだよき時期であつたら
ば、少しでも早きを喜びます故、その時におねがひ
したいと思ひます、椎の木をも心に置いて下さ
いまし、

とにかく、小生の家のある限り君よりいたゞいた
木があるのだとおもふと、まことにかりそめでな

いのを思ひます、

三月二十六日

牧 水

鈴木俊一君

先日の兩君によるしく、

二九

三月廿七日、沼津市千本より、信濃、中村端様宛(手紙)

御葉書、感謝、名簿行違ひに御らんのこと、おもふ、而して、なるほどこれではと御諒察のこと、おもふ、ひどい目にあひました、普通號二冊代とられた、新企畫の方にはまだ手をつけませぬ、家の方の金が三千圓ばかり溜つた故、それをやり向けむかとしたけれど、きんたまを占めつけて、我慢し、その代り横車式に直ぐその金で土地を買ひ、更らに目下一文もないくせに多少あるとこにして早速家を造りにかかります、この四月一日が地鎮祭、すぐ工事にかつて、先づ七月には竣工の豫定、とうとう夢が夢で

なくなつた、地所もすばらしいところで、家もまんならぬものが出来るらしい、喜んで下さい、先づぐこれ、いつつぶれても、あとの種族を雨露に濡らすおそれだけはなくなつた、

新企畫には、多分この秋からかゝりませう、これも考へに考へぬいてやること故、先づ萬が一の失敗もないつもりだが、要するにこれはヤマじかけではあるのだ、これが當ればゆつくり飲める、當ることを、お互ひのために祈つてくれたまへ、

君の方は一體どうなつてゐるのだ、會社をよした様なことを聞いたが、本當かね、持病が起つたかなとおもつたが、實際はどうなのだ、聞きたいとおもふ、

小生、行歌たちの肝入の南北佐久の半折會に、多分四月下旬あたり出かけることにする、彼づぼら氏、大に苦闘して、かなりの成績を擧げてくれてゐるらしいが、嚙む難事業なりしならむと彼だけに恐察してゐるところだ、

行けば一寸でも逢ひたい、何處がい、だらう、考へ

三〇

三月廿七日、沼津市千本濱より、相州湯河原温泉上野屋方、高橋希人様宛(手紙)

おたより、難有う、お身體まだいけませぬか、いけませんね、さぞ御たいくつのこと、おもひます、あまり疝癪を起さぬ様に氣永に構へて、下さい、頭を使ふのが一番いけないとおもひます、

名簿は、一日違ひで、昨日、多分逸見の方へお送りしたでせう、四月號も四五日うちに出來ますが、そこあてにしませうか、

湯河原は永い間の見ぬ戀で、まだ知りませぬ、温泉すきとしては面目ない話です、上野屋といふのは氣持のい、宿屋ですか、小生はこの四月の二日に多分湯ヶ島にゆくでせう、大阪の連中が四五人來るので、案内です、

永いこと御心配をかけてゐた「家」が漸う出來さうです、喜んで下さい、今度はゆつくり泊つて貰へます、その代り、昨秋からこの秋ころまで、半折會で小

ておいてほしい、そして當然長野市中心の一戦を御相談することにならうとおもふが、これに就いても大體の戰略を考へておいてくれたまへ、あまり大きいことを考へるとめんどう故、極く手近から考へ起してみてくれたまへ、

最初一萬圓を目標としてかゝつたところ、どうしても二萬以上を必要とすることになり至つた、詳しくは逢つて話すが、これも止むをえぬこと、おもふ、半折會は一方まさしく牧水を半折せしめむとする傾向があるが、乗りかけた舟で、しかたがない、然し、終に夢を夢でなくしたとおもふと、寧ろ可笑しいおもひがする、

忙中、以上に擱く、

三月廿七日

牧 水

終花兄



生は半自殺の状態です、止むをえませぬ、あとで、うんと勉強します、

君の歌、今度のも佳かつた、もう少しおほらかに開いて行くとほい、のですがね、あの鋭どさが萬一意識的になると、錆びてしまひます、腰を据ゑて兩眼を開くことですね、

忙しい中なので、亂筆御免なさい、そして、それこそゆつくりと養生して速く元氣になつて下さい、

三月廿七日

牧 水

希人兄

三一

三月二十八日、沼津千本より、東京、村井武様宛(手紙)

村井君、先日は難有う、わざわざ来て貰ふことに少なからぬ恐縮さを持ちながら、矢張り来て貰はないと何だか不安なので、ツイ我儘をいふことになる、止むを得ないこと、諦めてくれたまへ、

汽車賃位は出さないとわるいと細君に云ひつけられてゐながら、第一回の時は二日酔でしくじり、この前の時は君の一喝に逢つてしよけてしまつた、いつそ、何もしないことにしておかうとおもふ、これも因縁ともう一つ諦めてくれたまへ、家でも出来て少々おちついたら我等夫婦で何か心ばかりのお禮をすることにしたいとおもつてゐる、

とにかく、この前、君に逢つてすつかり安心してしまつた、分に過ぎたものが出来さうだけれど、二度も三度も造るものでなし、先づ、出来るだけのことをしておかうとおもふ、金の無いのに閉口だが、横車を出来るだけ押し抜く決心で、あまり心配せずに出かけて見ようとおもふ、今のところ四千圓ほどあるのだ、(といつても、この四月いつばい位に集め得るもの、現在額は二千圓餘)、これで或る程度まで漕ぎつけ得るだらうか、あとは二三ヶ月のうちに、またこれに前後する程度のもを作り、あとは都合では秋に延びる、内輪話で滑稽だが、打ちまけての相談なのだ、どうだらう、

四月一日を地鎮祭として、地形にかゝらうとおもふ、三四日前、土肥の大工にその日取の相談をしてやつたけれど返事が来ぬ、おもふに先生松崎下田とかかけ廻つて木材を見て歩いてることであらう、大工が来なければまた少し延ばす、

長倉君が昨日来て、君に是非彼自身の家(改築、といつても全然建て直す)の設計を頼んでくれまいかといふのだ、厄介ついでに引受けてくれないか、もつともこれは僕相手のとは自ら事情が違ふわけだ、僕のお蔭なので、彼に負ふ所甚だ少くないのだ、

桃が咲いたよ、おつつけ櫻もほころぶだらう、

四月一日朝六時の汽車で大阪の連中が飲みに来る、沼津では事が大きくなりさうなので、一泊させたゞけで、湯ヶ島へでも引張り出さうと考へてる、御家内中へよろしく、

三月廿八日

牧 水

村井武兄

三二

三月廿八日、沼津市千本濱より、東京市本郷龍生館、三浦敏夫様宛(手紙)

三浦君、先日久し振でお目にかゝり、割合に御元氣でもあつたりして、たいへん嬉しうありました、何かの問題は、何かの示威運動だつたのではありませんが、多分さうだらうと考へてましたが、もう解決がつかまされたか、あまり、恐がらない必要がありませうよ、少々、人がわるくなる必要もまたあるとおもふ、押し太くやつて御らんなさい、

お酒、昨日着、難有うございました、早速いたゞきました、結構です、神露と似てますね、とてもこちらの酒屋のもの、比にあらず、穴をあけてくれた小僧自らさう云ひました、この代價、おいくらでせう、ア、それからこの代價は細君の方から支出さるべきものなので、その様子を訊いたところ、すまないが、二回(つまり二つの月末)にわけてお送りする様に

して頂けないかとのこと、いかゞでせうか、(今までの月末拂ひのやりくりを續けるわけなのです) 四月一日にお誘ひしたけれど、多勢の人と一緒に君自身面白くはないかとおもふが、とにかく、君のよき様に處置して下さい、彼等は一日の朝六時着、一泊、二日には湯ヶ島へ繰出さうと考へてゐます、もつともお天気もありますけれど、

とりあへず右まで、

三月二十八日

牧水生

三浦敏兄

三三

三月三十日、沼津千本より、大阪市、大島武雄様宛(手紙)

冠省、

今日か明日の新聞消息に喜志が老母病氣のため信州に歸つた報導が出るでせうが、そのためにこちらに來る君たちの心を亂さずに下さい、一昨夜、電報で立ちましたけれど、三十一日夜には

こちらに歸つて來ることになつてゐます故、少しも心配せずに悠々と來て下さい、

いよゝ萬事確定しましたか、天気もこの分ならよささうだ、昨日曇、昨夜雨、今日すばらしい西風で快晴です、

昨夜電報で、岡山の伊勢崎海花(神官)君が一日の地鎮祭にわざゝ來てくれるさうです、

東京からは誰もよびません、長谷川は多分信州に呼ばれたらうし、潮みどりは病氣でねこんでるし、來られるとすれば高久君位のものでせうが、とにかく黙つておきます、多勢になると、靜肅豫定が狂ひさうだからです、

一寸心に浮べる豫定行動、

一日、創作社滞在、

二日、朝、船にて靜浦江之浦(花ちゃん)は知つて

(る)を廻り三津上陸、岡を徒歩して長岡温泉に至り、晝食、それより電車、馬車にて夕刻湯ヶ島温泉着、

其後、滞在。

湯ヶ島では、もう少し川上の世古の湯といふに一泊するも面白からむ、天城登山は如何、

今日の便で、君たちの豫定が來るだらうが、とりあへず新聞のことが氣になるので、右まで、昨日より半折書き開始、なかゝ抄らず、今日明日と續行す、

三十日朝六時

牧水

武雄兄

春一兄

志津夫人

宣重兄

三四

四月九日、沼津千本より、東京、村井武様宛(手紙)

三十一日より昨日まで飲みつけ、淺ましき限り、何とも面目なし、家が出來たら確かによします、許してくれ、

見積書の催促をこれと一緒に西川に出した、來次第

お送りする。地ならし、もう二三日で済む。井戸は出來た。

木はみんな全部ついた、山櫻、ぼたんきょう、海棠、ゆすら梅には早や美しく花がさいた、勿體なやゝ。

十一日に東京にゆく筈であつたが、サケたさにやめた、然し、近々そこを通つて信州へゆく、逢ひます。

四月九日

牧水

村井兄

三五

四月九日、沼津千本より、駿東郡、鈴木秋灯様宛(手紙)

鈴木君、ついたゝ、みんな全部ついた、しかもだ、山ざくら、海棠、ゆすら、ぼたんきょうには早や美しく花がさいた、難有や勿體なや。もう一つ、此處に君に讚辭を奉らねばならぬのは、ついたよ、柿も、すもも。實に難有い。百合も見ごとに芽をふいた。

今日か明日か、自然薯の畑を作らせませす。三十一日か
ら昨日まで、實は飲みつゞけてゐて、面目なし。右、とりあへず御禮と大讃辭とを申しあぐるものなり。

四月九日

牧 水

鈴木秋灯様

三六

四月廿四日、信州松原湖より、三河國、金澤修
二様同葛子様宛（繪葉書）

四顧悉くこれ冬景、赤松を除く外、木の枝に葉つば一
つありませぬ、焼燭と炬燵と山魚と牛肉の罐詰と、霧
が包んだかとおもふと、日のさしてゐる湖水と、牧。

廿四日あさ

（重田行歌、萩原太郎、大悟法利雄とのよせ書）

三七

五月十四日、沼津市千本濱より、信濃、吉江豊
様宛（手紙）

何しろ二十日の間荒らしぬいたおなかのことで、す
っかり弱り切つてゐたものと見えます、下痢がとま
らぬばかりでなく、その衰弱また甚しく、數日間と
いふもの、眼をあげる元氣もなく寝てゐました、
幸に餘病に移らず、二三日前からどうやら起きたり
寝たりの状態となりました、

そんな有様で、早速申しあげねばならなかつた御禮
をも申しあげず、何とも失禮致しました、どうかお
ゆるし下さいまし、あまりに間がぬけて只今ではも
う改つて申しあぐるのも變な様に思ひますので、何
も申しあげませぬ、何卒お察し下さいまし、
そちらでのことをいろ／＼と申し聞かせますと、喜
志大喜びで、自身がもてなされた様な有様でした、
また、大好物を澤山のこと御送り下され、厚く／＼
御禮申します、珍重しながら、昨夜もこしらへて、
とろり／＼と頂戴致しました、

大井町では、赤ん坊も阿母さんも至つて元氣で、こと
にオヤヂが赤ん坊を可愛がるのが見てゐてをかしい
ほどでした、萬事無事にをさまること、存じました、

拜啓一口には申しも兼ねぬ御禮の前に先づ甚だ申し
にくいお詫びを云はねばならぬといふことを何とも
面目なく存じます、お別れしました夜は大井町泊り、
翌日は名古屋泊り、その次ぎの日、實は静岡に立ち
寄ることになつてゐたのですが、流石に小生も身體
の自由がきかなくなり其處を素通りして四日夜深更
十七日ぶりで沼津へ歸りました、歸りますと兼ねて
工事一切を委託してある大工の棟梁から電報が來て
ゐて、材木の事で直ぐ來ていたゞきたいといふので
す、とても一人では動く勇氣がありませんので細君
にお守をして貰ひながらその翌朝の船でその大工の
郷里、伊豆の土肥温泉といふへ渡りました、大工は
其處で全部木組をこしらへ、汽船でこちらへ運んで
直ぐに組みたてにかゝることになつてゐるので、
用事は主として金のことでしたが、其處の温泉には
小生の七八年來馴染の土地とて、例の如く飲み仲間
甚だ多く、小生も信州じこみの腕を振つて大に飲み
ました、二泊の上歸宅、さアそれからがたいへんで
急にひどい下痢を始め、何としてもとまりませぬ、

吉田の方へも右様の次第やまた他に手違ひもあり、
送金が遅れましたが、明日は確かに御約束の四百圓
だけお送り致します、

小生の家の方も、何しろ金があつてのしごとであり
ませんのでどうしても永引きますが、どうやらして
この秋までには造りあげたいものと思つてゐます、
たいいてい出來ませう、出來ましたら是非まつさきに
來ていたゞきます、その時は右申した土肥温泉とい
ふへ御案内したいと喜志と話してゐます、海岸のこ
とでお珍しからうと存じます、

この六月の十日ころ、また酒ヨケノ神サマ事一名山
ノ神に守護せられてお宅の近所を通りますが、養蠶
期ではあり、時間も急ぎますので、今度は失禮致し
ます、そして秋のおいでを樂しむことにします、

まだいろ／＼申しあげたいことがあります、身
體の疲労なほ去らず、手もふるへますので、これ
にて筆をとゞめます、吉住君初め皆様にはあなた
がたよりくれ／＼よろしくおつたへ下さいまし、

今度の旅行中でも一番うれしかった鹽尻のことを考へますと、何だか昨日か一昨日のことの様にか思はれません、そして、もう幾度も参つた家の様な氣がしてなりません、
亂筆御免下さい、

五月十四日

牧 水

吉江兄上様
同 姉上様

三八

五月十五日、沼津市千本濱より、信濃、大澤茂
樹様宛(手紙)

大澤君、

落葉松が一本残らずきれいに芽をふきました、これが本統についてくれたらそれこそ沼津一の珍しい庭が出来るわけです、どうかして枯らしたくないものと毎日日参(もつとも五六町のところ)して見張つてゐます、あまり珍しいので抜いてゆかれはせぬかの恐れもあるのです、櫟はまだ生死不明です、もと

のまゝの姿で、まだ何のきざしをも現はしませぬ、然し、全く枯れたとも見えませぬ、もう少し待ちませう、

同封の手紙、御らんの上御意見を添へ次ぎに廻して下さい、小諸だけにわざ／＼出直すとなるとまた費用倒れになるおそれもあり、出来たらさうしたものと思ふのですが、どうでせう、お忙しい最中ではないかと、お氣の毒にも思はるゝのですけれど、とにかく御相談申します、

漸く、正氣がつきかけたかと思ふと、もう眼の前には溜りに溜つた爲事が山積してゐるのです、やりきれませぬ、

御家族、光男さんたちによるしくおつしやつて下さい、里がへりの君はいよ／＼御安泰ですか、お淋しいでせう、

五月十五日

牧 水

茂 樹 兄

三九

五月十九日、沼津市千本濱より、奈良市奈良女子高等師範學校寄宿舎、百瀬美鶯様宛(手紙)
みずさん、暫らくでした、大阪でお目にかゝつた時、あまりあなたが大きくなつておめでたので大に驚きました、楽しく御勉強のことゝ存じます、いつ御卒業ですか、東海道を通らるゝときはお寄り下さい、

重田君が廿二日に奈良へゆきます由、あなたあてに手紙を出しておいて呉れとのことですので此處に同封しておきました、あなたをお訪ねしてゆきましたらお渡し下さいまし、

春日野の若葉、溪向うの竹柏の林、其處の藤の花、さぞかしくおもはれます、ア、若し時間があつたら、重田君にあの竹柏の森を見せてやつて下さい。
とりいそぎ右まで、

五月十九日

牧 水生

百瀬美 様

(次の手紙同封)

四〇

五月十九日、重田彌次郎様宛(手紙)
十七日發お手紙拜見、田子浦地曳網の件承知しました、乃ち次の如く定めます、

○廿四日、東海道鈴川驛にて下車のこと、静岡まで急行で来て、それより普通車に乗換ふるも可ならむ、

○驛前に、名を忘れたれど一旅館あり、其處に投宿あれ。

○多分廿四日夜か廿五日朝四時すぎころ、渡邊龜太郎といふ老爺、君を訪ねゆくべし、これ世話人なり、よろしく話し合ふべし。

若し、廿四日夜、着、早かりせば君自身右老爺を訪ねゆかれたし、線路踏切をこえ鈴川郵便局をゆきすぎ約二丁右側、駄菓子、酒など賣る小店なり。

○廿五日朝、四時すぎか五時のころより第一の網を引くことゝなるべし、諸君は朝飯として握りなり重詰なりにして、地曳の場所まで携ふる必要あり、

前晚、宿屋に命じおかるべし。

○第一の地曳、あがらばとれし魚をば爺婆早速濱にて料理し、且つ酒をも爛するなるべし、乃ち諸君大に食ひ且つ飲むべし。

○その間に第二の網をおろすならむ、その時、希望者あらば二三人舟に乗りゆくも悪しからず。

○小生は廿五日前六時二十三分鈴川驛着、直ちに濱に赴くべし。廿四日夜宿屋に行つてゐたけれど、その日、當地方社友の歌會あり、夜はどうせ飲むべく、即ち抜け難きなり。

○網代、酒代等は富士のつべんよりとびおりるかくごにてすべて小生おごる事に致す、萬々心配無用なり、但し、人数は貴報の如く五六人どまりを可とせむ。

○今は時期がわるい、魚必ずとれるものと夢おもふ可からず、ともするときこ一疋かゝらぬこと無きを保し難し、諸君へこの旨然るべくよく飲み込ませおかるべし、どうも魚の方で逃げたいやうな面つきばかりらしいからなア。

○海が荒れるか、大雨かなら諦らむる外なけむ。小雨位ならやつて貰ふ様たのみおく。大浪大雨なりしならば、創作社に来てみんなしてまア飲むことにでもするのだね。いづれにせよ、小生廿五日朝鈴川にゆく。

○廿五日朝、早く起きること肝要、爺か婆か、宿屋へ迎ひに行くならむ。

○廿四日夜、鈴川着のことを萬々間違ふべからず、間違はれたら僕ひどい目にあふなり。

○宿屋は、驛前廣場のつきあたり向つてや、右に寄り、道の角の家なり。

サテ、これでよろしい、廿五日を待つ。當日い、風ぎ日和のやう、春日さまに精々頼んで來られよ。

十九日

牧 水

重田様

四一

五月十九日、沼津市千本濱より、大阪市、大島

武雄様宛(手紙)

大島君、まことにしばらく。

一回一回とさうなるやうだが、何しろ今度の信州旅行の疲勞はひどかつた。旅のつかれ即飲みつかれなのだが、この正月の時も相當に飲むには飲んだが、ものがよかつた、ところが信州となるとそれがさうゆかぬ。歸つてからひどい下痢がつゞき、身體全く雨に濡れた紙屑のごとで、いまだにまだどうやらふらふらしてゐます。あさましいこと、恐しいことです。

久し振の手紙に愚痴はつまりませぬ、乃ち止めます。其後も引續いていろゝとやつていたゞき、難有うございます、お送り下さつた金のこと、妻からも長倉君からも聞きました。集めるのはまた賣りつけ以上のこと、恐察致します。どうかイヤにならずに續けて下さいまし。

信州から歸つた晩、伊豆土肥の木工より電報來り、材木のことにて至急來てくれとのこと故、また何か起つたこと、打ちしよげながら出かけてみますと、

なアに、材木を集めた自慢で、先づ見て呉れといったわけだつたのです。大きいものには米材を多少使ふさうですが、他は節は多くとも日本もの、と云つても伊豆産のもの、を使ふやうに云つておきましたので、せつせと走り歩いて集めたのださうです、もう少し集めねば不足だといふところでした。あちらに小屋がけして、すつかり仕上げた上、船で運んで組立てるのださうです。期間は梅雨あけを待つて組み立てると云つてゐます。少し豫定より遅れませう。

以上書きかけて中止してゐたところへ、長谷寺の御寄せがき着、大に美しくなりました、こちらはビイゝやりながらも懸命になつてどうやらかうやら机に噛りついてゐねばならぬのです、羨しゝ。ことに、サンズキ抜きはよかつた。さういふのがいゝです、たまゝには大にやるとしてもです。春一朝臣並びに北の方、正子さんたちに、右様、よろしくおつたへ下さい。

また、用談。神戸からの二度目の分、奥屋熊郎氏の

集めてくれた分をば一昨日書きあげて達下君宛送つておきました、これは君の方とは別かも知れねど、一寸お知らせしておきます。

佐久の方は大失敗でした、何しろ行歌先生の采配故、であらうとは推察して出かけたのでした、其處でつまり飲み抜いたといふ形にもなるのです。で、多分またその一部、小諸地方をばやり直すことにしました。六月三日ころ出立、岐阜の大井から信州に入り、廿三四日のころ名古屋に引上げて其處でもやることになりました。今度は各地相當にゆくことにならうと豫期されます。速く何とかしたいものです、戯談でなく、牧水半折するの會になりさうで、恐しい。など、云つては罰があたるか。次いで、千葉縣栃木縣と靜かにやつて、九月下旬のころ九州征伐に出かけます。それで、どうか打ち切りたいものです。大抵間に合ひませう。それから新雑誌、と、忙しい思ひをついでにもう少し續けてみませう。

自分のことばかり、御めんない。あれからずつとお元氣ですか、いつぞやの流會騒ぎには一寸アテられました。何しろ、御元氣で羨しい。など、いふが、今度、信州でももう歸りみちのころ、小生等も一寸みちくさを食ひました。越後、上州に近いほとりに、湯田中、安代、澁、上林と半道おき位に温泉のあるところあり、中間安代温泉におみこしを据ゑて四邊を荒したといふわけです。一度、御案内しませう、長岡の湯飲徳利の會などよりよつぼどい。裏山には雪があり、里には櫻といふあんばいでした。相棒は中村終花、萩原太郎、不足は云へませぬ。但し、大悟法なる悪僧あり、だいぶ感興をそぎました。斯んな話をしてゐると、また逢ひたくなる。困つたものですね。

花ちゃんにもよろしくおつしやつて下さい。二三日前、長倉君に連れられて例の河岸の家に、アカシヤの花(向う岸に満開)を見にゆきました。例の人々相

集り、期せずして花ちゃんの話出で、異口同音に讚嘆してゐました。

一杯擧げたいな、けふはそのつもりで一本よけいにねだりませう。御家内皆々様に呉々よろしくおつしやつて下さい。

五月十九日

葉櫻に夕日美し。

若山牧水

大島武雄様

松原の若葉がすてきです、のぼらが咲き木苺がうれて。(封筒裏面に)

四二

五月十九日、沼津市千本濱より、名古屋市、鷺野芳雄様宛(手紙)

いよ／＼御開始下されし赴き、お瘦せになるであらうまでの悪戦苦闘が偲ばれてそゞろに合掌致されま

戦ひは時の運、出たとこ勝負の氣で、のんきにやつて下さいまし、要するに「脚」と「口」ですが、おつとめの貴兄たちにとつてはさぞ御難儀のこと、先づそれから恐縮致されます、先づ精々馬力をかけてやつてみて下さいまし、お願ひ申します。先日は失禮しました、一回ごとに駄目になる様ですが、小生の今度の旅づかれは今までに見なかつたことでした、いまだにどこやらぼんやりしてゐます、ために早速のお禮も申しあげず、失禮しました、今度また旅稼ぎに出ねばなりません、六月二三日發、木曾を経て信州に入り、同廿五六日のころまた名古屋を通つて歸ります、今度はこの前にこりたので、ツレナクモサケノマセズノミコト、別名、山の神にかん禁されて出かけます、多分歸りにお邪魔したいと考へをります、とりあへず、右のみ

五月十九日

牧水生

鷺野飛燕兄

(同封)

和歌子さん、

とうとうあなたがたをおいぢめすることにになりました、のんきにいちめられて下さいまし、ほんとにあまり氣をもまないで下さい、お酒のさかなでも見つけるつもりでやつて下さいまし、このためにまたあなたに熱が出たなど、いふことになった日には小生浮ばれませぬ、

右まで、

先夜、失禮しました、ごめん下さい、でも御元氣の由にて、安心しました、

ほんとうに元氣を出して下さい、創作社の上棟式に出て来て下さい、

十九日

牧 水

和歌子様

四三

五月二十一日、沼津市千本濱より、東京市外、

村井武様宛(手紙)

村井君、すっかり御無沙汰してゐて濟まなかつた、一回一回とさうなるやうだが、今度の信州旅行の疲労(といふよりノミツカレか)は今までにないことだつた、淺ましいこと恐しいことにおもふ、もうこの邊で、バカノミはよすことにするよ。四日深更に歸つたところ土肥の大工から材木のことにつき是非來て呉れと手紙が來てゐたので、疲れついでもすぐその翌朝の船で行つてみた、また何か文句でも起つたのではないかと思つて行つたら、たゞ單に集めた材木を見て呉れの多少自慢ぶりであつた、何か知らぬが相當みな大きなものであつた、大抵伊豆松崎附近の産らしい。いま、その土地で貸長屋風のを造りつゝあり、それを終へて小生のかゝるのださうだ、そして梅雨のあけるのを待つて上棟式をやるやいな日取で爲事を進めてゆきたいとか云つてゐた。

疲労と溜つた爲事とで、今まで半キチガヒであつた、許してくれたまへ。

五月二十一日、大雨、

今日は珍しく、氣持だ、牧 水生

村井 兄

四四

五月二十一日、沼津市千本濱より、日向國、河

野すゑ様宛(手紙)

姉上様、また御無沙汰してゐまして、すみませぬ、このごろ、ずつと旅行ばかりしてゐて、殆んどうちにはゐないのです、

先日は大好物ふたしな御送り下され、ありがたうございました、たいせつに保存しながら、いたゞいてゆくことにします、こちらから何もさしあげず、すみませぬ、どんなものがいゝでせう、淺草海苔など、おすきでせうか知ら、

母のこともいつもおせわさまで、ありがたう存じます、つい先日金を少しと手紙とを送つたのでした、

先日の御よせがき、誠にありがたう、よせがきも澤山來るが、あれほど嬉しかつたのは近來なかつた。僕もゆきたかつた、みんな元氣な様だね、一度逢ひたいな、揃つてこちらに來ないかな、半折會のこと、話してみてくれたかね、

この前の北信州の半折會大失敗、旅費仆れのみにとまらなかつた、如何に其處に癡猛なるノミスケ種族が屯してゐるかを一面に於て語つてゐるのだ、苦笑一番、もう一度やり直しをやる、で、六月の三四日から月一杯、信州、木曾路、名古屋にかけて稼いで廻ることになるであらう、もう實はうんざりし切つてるのだが、やめるわけにもゆかぬ、穴あはれ〜。

いつぞやの屋根の話はどうなつたらう、安くゆかぬ風かネ、さうだつたら平凡な瓦にしようか、どうだらう、

サテ、氣になつてゐた手紙を漸く書きをへた、

手紙にはあなたもいつまでもこちらに氣をもませないで、世間のならはしどほりに、せがれのところに來てくれたがいゝではないか、しづあねのことはもうたいていでみきりをつけてふたりの娘たちにかませておしまひなさい、あなたがさうしておゐるかから娘二人はいつまでものんきにあまえてゐるので、といふ様なことをかいてやりました、ところがその返事がけさ來ました、よくわかつたが、まだよくかゝんがへてからしつかり返事することでした。まつたく、母にいつまでもあちらに居られたのでは、いろ／＼心配でいけません、しじゆう家にでもをるのならばようございますけれど、よくあちこちと歩いてゐますので、いづどんな電報が來てもオイソレと間にあはぬことになりはせぬかといつも氣になつてをります、また金にしたところが、こちらに來てゐてさへもらへばりつばな御隠居さまでたて、ゆかれまされど、御存じのとほり、私などは月々きまつた月給をとるでなく、また現金をいつも持つてをるといふのでありませぬので、たとへわづかづゝにせ

よ、きまつてお送りするといふことはかなり困難なものです、さういふとをかしいやうですけれど、私どもの生活はとにかく他とはちがつてゐますので、まつたくの話なのです。なんとかあなたがたからもすゝめて下すつて、しづ姉のしまつをつけて下さつた上、母をこちらによこすやうにして下さいませんか、折入つておねがひします。この六七月のころ、九州めぐりをやるつもりでしたが、秋ののばしました、九月の末か十月になりませう、家をつくる金をこしらへるための旅行なのです、ゆくとすれば家内をつれてゆきます、この前ののんきな旅とちがつて、非常に忙しい旅行ですが、とにかくお目にかゝります。喜志もたいへんたのしみにしてゐます。あなたがたも一度こちらに來て下さい、この秋までは右申した用事でいつも旅行ばかりしてゐますが、秋がすぎればひまになります、家もたいていそれまでには出來ませう。

家といへば坪谷の家のしまつについてもおはなししたいのですけれど、あまり長くなりますから、これでよしときます。

兄上、文一君初め、はる子にもよろしく申して下さい、オヤ／＼、まだ赤ちやんのお祝ひをも申しませんでしたね、ごめん下さい。

五月二十一日

牧 水

すゑ姉上様

どうか、おからだをおだいじになすつて下さい、わたくしもこのごろだん／＼日向の人たちのことが氣にかゝるやうになりました、わたくしも今年は四十一の前厄です。

四五

五月二十二日、沼津市千本濱より、長崎市、長崎創作社御中宛（手紙）

朝爲事を一先づ終つて例の長崎産のベッコウパイプで一ぶく試みつゝあつたところへ、來客、キクエさ

んといふかたがいらつしやいましたといふ、一寸わからなくてゐたところへ、ふつと思ひついでとびだしてみると果して菊枝氏であつた、大に驚き、且つあわてゝ、とおいつの「其後の話」を交し、漸くおちついて、いま、自慢の松原を一めぐりして歸つて來たところです、實に突然だつたし、驚きました、そして「あの頃」をだん／＼と思ひ出しつゝあります、一人を通して全てが浮ぶと云つた形です、丁度、君たちあてに手紙を書かうと二三日前から考へてゐた所ではあり、これ幸ひと、いろ／＼お願ひごとなども話してゐます、萬事同氏より御聞き下さいまし、何しろ、斯うして時々逢ふといふことはよきことであります、それにつけてもまつひら朝臣が其處にあないと考へることはうら淋しい、サテ、そろそろビールが冷えたころです、筆をおきます、この秋はゆつくりとお目にかゝります、牧水生

五月二十二日晝近く

長崎創作社御中

（菊枝興藏、喜志子とのよせ書）

四六

五月二十三日、沼津市千本濱より、信濃、大澤
茂樹様宛（手紙）

大澤君、

只今、お手紙と、爲替百圓と、難有うございました、
集金は押賣以上の難儀と重々恐察致します、相済み
ませぬ、お手紙によりますと雑費といふ風のもの
少しもありませんが、どうしたのでせう、いろ／＼何
か入ったこと、おもひますに、それはやはりその
様にとつておいて下さいまし、何處でもさうしてを
りますから、

重田君は明後日やつて来ますよ、學校の先生連で京
大阪の見物に赴き、歸途明日、田子の浦に来て泊り、
明後日、小生に其處に来て地曳網の世話をせよとい
ふ命令を受取つてゐるのです、で、小生明後早朝其
處へ参り、おとりもちをすることになつてゐます、
君も一度おいで下さい、網はとにかく、晴れ、ば（春
早く、秋深く）其處の富士だけはとてすてきです、

ア、苗が全部つきましたよ、櫟も、昨日今日、こま
かな、實にきれいな芽を吹き始めました、萬々歳で
す、速くこれを本式に植ゑて（今はまだ家の場所も
はつきりときまりませぬので、かりうゑにしておき
ました）年々の生長を楽しみたいものです、本當に
ありがたうございました、

とりあへず、右御禮かた／＼御知らせまで、

皆様によりしく申上げ下さい、

五月二十三日

牧 水生

茂 樹 兄

非常に御迷惑でなかつたら小諸においで下さい、
一寸でもお目にかゝりたい、

四七

六月十日、信州戸倉温泉、笹屋ホテルより、沼
津市創作社、大悟法利雄様（手紙）

次ぎから次ぎと時間づめにやつてゐるので、葉書を
かくひまもなかつた、けふは、「青年」「幼年詩」など

とり出したれど、頭重くてダメ、即ち一日骨休めと
することにした、

留守中、いろ／＼と難有う、四角八面の働きぶり、
目に見るが如し、ポイチエン族もなか／＼おりこ
うの様子、これまた感謝。

旅は相變らず惶しい、飲むまじとしても、全然さう
はゆかず、飲むまいと考へるだけが荷厄介な位ゐる
ものだ。

大井は好成绩、長野は先づ普通らし、但し、金がよ
く集るかといねんされる、松代は貧弱、小諸は多分
中止することゝならむ、名古屋も悪戦らしい。

明日明後日、こゝで揮毫、十三、四日長野で歌會陳
列會講演會（一般と、婦人會と）。

「浴身」は、持つて來てるやうだ。
電話、よろしくたのむ。

トマト、ヤモノイモの族を一日も速く見たい、今度
の旅は何だか心ぼそくていけない、思ひ切つて飲ま
むかなど考へるけれど、サテ、飲む興味もなし。歌、
無論出來ず。

みよのさんたちに、君より吳々よろしく云つて下
さい、タベチコ族にも。

ネボス、グウ／＼の間に、

六月十日午後四時半

牧 水

利 雄 兄

四八

六月十六日、長野市東町池田方より、松本市在
淺間温泉翁の湯氣附、山崎斌様宛（手紙）

お葉書、感謝、小生九日より今朝まで當地滞在（内、
三日戸倉温泉）、今朝松代に向ひ明日半折會、明後十
八日小諸に到り、多分その日すぐ星野温泉に行つて
小諸分の揮毫をなすことゝなり、二十日か廿一日に
再び小諸に引返して歌會半折會をやり、二十一日か
二十二日に其處松本在淺間温泉に行かうときめてあ
りました、右様全て他人相手にきめてある事故、動か
せませぬ、二十二日からさきは多少のやりくりがあ
くとおもふが、それまでは君の方であなからうとお
もふし、残念です、

とにかく二十一日か二日にその翁の湯に参ります故、宿にその旨傳へておいて下さい、そして郵便物などもゆくかも知れず、受取つておいて貰ふ様頼んでおいて下さいまし、松本でも歌會をやることになつてゐるので、そんな打合せも翁の湯にゆく様にしておきます、

小諸では宮坂古梁方を事務所にしてありますが、多分滞在するのは沓掛在、星野温泉でせう、

相變らず飲みあげて、五體べろ／＼のてい、御憫察下さい、

では、とにかく、翁の湯に右様よろしくたのんでおいて下さい、

右、當用のみ、

十六日あさ六時

牧 水

紙 兄

四九

六月十九日、星野より、沼津市創作社、大悟法利雄様宛(手紙)

葉書一本書くひまなき身をあはれめ！

留守番の御苦勞、また萬々御察し申す！

お互ひに、がまんませう、もう少しだ、

萬事、よろしくたのみます、選はなかく出来ぬ、

「創作」の方は浅間温泉に行つて手をつける、廿七八日にそちらに着く豫定で君の方の手をすゝめておいてくれたまへ、

明後日小諸宮坂方、二十二日浅間温泉翁の湯、滞在。

みよのさんに君よりよろしく。子供たちをもほめて

あげて下さい、おみやげをどつさり持つてかへらね

ばなりますまいとね。

浅間から名古屋、一二泊、それで引上げます。

十九日午後、ネボスグウ／＼のあひに

としをさん

牧 水

としをさん

「萬朝」の、一首とりあへず、

枯草のまだあらはなる此處の野にかすかなるか

も郭公の聲は(原稿用紙欄外)

昨日、松代よりの書留、届いたでせう、封筒裏面に

五〇

七月九日、大島武雄様宛(手紙)

大島君、アートンが出かけます、また、御世話様になることとせうが、よろしくたのみます、

昨日は金五百圓、たしかに長倉君宛にとゞきました、難有うございました、どんなにか御めんどうだつたらうと、改めてまた恐察したのでした、どうか

悪しからず思召し下さい、

アートンは御存じのごとく下戸黨故(決して、教へて下さるな)然るべくたのみます、道頓堀の二鶴へ

一度連れてつて下さい、神戸、京都へも、御都合出来たら連れ出してやつて下さい、

平田君其他へは貴兄よりよろしくおつしやつて下さい、

くさん／＼の報告其他をばアートンの口づから御聞き下さい、

そして、富士登山(はともあれ)をお待ちします、また花ちゃんをもお誘ひ下さい、皆々様によろしく、

七月九日夕

牧 水

大島武雄様

五一

七月十四日、沼津市千本より、東京、村井武様

宛(手紙)

村井君、すっかり御無沙汰してゐた、様子は「創作」の上で、御察し下されしこと、おもふ、

西川の云ふにはこの二十三日ころに上棟式をあげたい、とのことであるが、さうすると、例の君の引

受けてくれた屋根のことがすぐ必要とおもふ、うまく打合せが出来て、順序よく運ぶ様になつてゐるか

知ら、ふつといま氣になつたので、とりいそぎおたづねするわけです、

何しろ近年にない不景氣といふので、出稼ぎ商賣も骨が折れていけない、いま、名古屋と静岡で例の半

折會興行中、八月に入るとすぐ千葉と枋木縣とに出
かけます、涼しくないね、上棟式の時、一寸でも
顔を出していたゞけると誠に難有いが、どうだらう、
願へまいか、

十日ほど大悟法不在、オヤヂてんでこの圖、とり
あへず右まで、

イヤな天氣が續くね、小生の様な頭痛持には何と
もいへぬ天氣だ、お家みなゞ様お變りなきや、

七月十四日 牧 水
村 井 兄

五二

七月十七日、沼津市千本濱より、京都市、雨森
長三郎様宛(手紙)

大悟法の行くまでに、御手許に届くやうに書く筈で
あつたこの手紙を、あけぼの樓上の御よせがきを拜
見してから漸く書き出すといふなまけかたです、な
まけるわけではないのだが、自然さうなるのです、
どうかゆるして下さい、

ほんとうに、すっかり御無沙汰のみしてをります、時
々の御よせがきをみるごとに、こちらからも何か書
かうと考へぬことはないのだが、いつでも駄目です、
もう少しお待ち下さい、そのうち、どうとかなりま
せう、小生は非常におちついた朝夕を送りたいくせ
に、まるでその反對の暮しをやつて來てゐます、速
く本心にたちかへらないとたいへんだと考へつゝあ
ります、

先日は半折會のことにつきいろ／＼と御骨折り下さ
れ、まことに難有うございました、たくさん申込ん
でいたゞいたので、どうしたのだらうなど、云ひつ
ゝ、書いたのでした、それに池須君のを間違へてお
送りしたりして濟みませんでした、御手数恐れ入り
ますが、池須君あて、御轉送下さいませんか、

所は神戸市外、岩屋濱屋形です、

坂部君初め同志諸君みな元氣の様です、ね、いつもよ
せがきをみるごとに、御一緒にゐる様な心になるの
です、吳々よろしくおつしやつて下さい、また、今
度大悟法君が行つて御世話様になつたこととせう、

難有うございました、小生もこの秋九州行のゆきか
歸りにまたお邪魔させて頂かうと考へてゐます、
何しろ忙しいことです、いま、名古屋と静岡にて例
の會開催中、八月は千葉縣へ出かけます、九月十月
は九州、十一月はまた信州です、まるで生きながら
人柱に立つてゐる形です、

忙中、亂筆御ゆるし下さいまし、

七月十七日 牧 水
雨森長三郎様

七月廿六日、沼津千本より、下野國、高鹽背山
様宛(手紙)

趣意書に添へ、名刺少々封入しておきました、これ
は、名譽發企人諸氏に豫じめ各方面へ、趣意書を發
送させておき、そのあとを本當の發企人諸氏が、所
謂「脚」と「口」との力により口説いて廻るに用ふ
る道具なのです、大に利用して下さい、先日申上げ
たかともおもひますけれど、要はたゞ眞實の發企人

諸氏の「脚」と「口」との外に何の功德もないもの
なので、何分とも頼みます、

今日、棟梁參り、いよいよこの八月一日に上棟式舉
行の事にきまりました、どうせう、高鹽君、君そ
の日來て式を司つて呉れませんか、土地のお神主さ
まにおたのみするより、小生は無論、社中全體が喜
ぶとおもふのですが、暑くて氣の毒ですけれど、是
非お願いしたいとおもふのです。式は極く簡單に、
式後も、たゞ、餅をまいて、おみきをいたゞく(そ
れもかんたん)といふ位のことにしたたいとおもつ
てゐます。狂げてもさうして下さいまし。お一人で
淋しかつたら誰か引つ張つていらつしやい。よき御
返事お待ち申します。旅費は半折會々費から支出し
て下さい。

オ、會の用のことで使用せらるゝ費用は大小ともみ
なつておいて下さいまし、當然、會の方から支出
せらるべきものですから。これは、皆の人に云つて
おいて下さい。

とりいそぎ、右まで、

七月二十六日 牧 水
背山兄

五四

七月廿六日、沼津千本より、駿東郡、鈴木秋灯様宛(葉書)

お葉書、難有う、昨日大工参り、明後廿八日よき風ならば材木を運び来り、八月一日に上棟式をやる旨云つてゆきました、今度は本當だらうとおもひます、一つ、餅つきをおねがひしますかね、イヤ、それはとにかく、ひろひにだけ来て下さい、トマトー氏、なか／＼元氣ですよ、今度は蟲にやられぬ様、灰を根にまきました、大樂しみです、

廿六日 若山生

五五

七月二十六日、沼津千本より、大阪市、大島武雄様宛(手紙)

大島君、御無沙汰、少々もう心根シココにゆるみの出た頃

廿六日 牧 水

向があるのです、いま、出られては困るのだけれど、先日中はどうも大悟法、いろいろとお世話様でした、滞在中にも阿母様あてにお禮の手紙を出さうと思ひながらツイ怠けてしまひ、歸つて来てもこの有様でした、どうか君よりよろしく申上げて下さい、食事のあとさきには小生等の部屋に来て彼まだ大阪の噂をやめない、昨日、棟梁参り、いよ／＼この廿八日に材木を敷地に陸上げ(船で運んで来て)し、八月一日(ともすれば二日)に上棟式をやるといふことに定めてゆきました、今度は確かです、是非その日に来て下さい、そして一兩日あそんで、それから富士登山と出かけなさい、丁度いゝ順序です、八月は上旬だけださうです、中旬だと少々あぶないといふ、平田君には、右旨、君よりお傳へ下さいまし、とにかく、これでいよ／＼形をなすわけです、無から有がかけたわけです、可笑しいことです、とりあへず右のみ、

武雄兄

花ちゃんにもよろしくおつしやつて下さい、こちらへもお誘ひ下さい、山登りも樂たさうですよ、

五六

七月廿九日、沼津より、下野國、高鹽青山様宛(葉書)

昨日、汽船で材木が運ばれ、いよ／＼この天氣なら八月一日が上棟式です、是非来て下さい、山蘭老にも副祭司として来てくれる様たのでやりました、イヤ、それはとにかく、是非来て下さい、待つてる、

廿九日 若山生

五七

七月廿九日、沼津市千本濱より、東京、和田山蘭様宛(手紙)

和田君、この八月一日がいよ／＼上棟式だ、高鹽君を祭司に

君に副祭司をつとめて貰ひたいとおもふ、それはとにかく餅ひろひに是非来てくれたまへ、酒は西からとりよせてある、休みにはなるし、實にいゝ折だとおもふ、文句を云はないで、是非さうして下さい、ほんとうにみんなして待つてゐます、牧、

七月二十九日

山蘭兄

(喜志子とのよせ書)

五八

七月三十日、沼津千本より、下野國、高鹽青山様宛(手紙)

高鹽君、八月四日に延びた、是非何とか都合して来て下さい、すつかりその氣持になつたので、他の、知らぬ人に頼む氣にならぬ、一寸半折會息拔きの形に於て、出かけて下さい、たのみますよ。山蘭老をも引つぱり出す工夫してゐます。家は堂々(?)たるものですよ、見てからまた一つ馬力をかけて下さ

い。
それから日取は、二十三日千葉縣佐倉町、二十五日同多古町ときめました。で、君の方を廿七八日にきめて下さいませんか。さうして下さい。二十三日前がよかつたらそれでもいいのです。とにかく、きめて下さいまし。

先便で云ひましたか知ら、旅費は半折會のから取つて下さい。此處で出しても、變ですから。三浦君か誰か、ユーワクしなさい。

七月三十日 牧 水
背山大兄

五九

七月三十一日、沼津千本より、東京、村井武様宛(手紙)

電報拜見、どうにかにして貴意に添ひたいとおもひ、いろ／＼考へてみたが、一度延ばしたことであり、各地方との關係、工事關係者の關係で、どうも駄目だ、残念至極だが、致しかたない、悪しからずお察

して下さい。で、上棟式はとにかくとして、君の都合のつき次第に来て貰ふことは出来まいか、是非そうしていた、きたいとおもふ。西川もさう云つてゐる、其處で、氣になるのは例の屋根の問題だが、これは君の来る來ぬにか、はらず順序よく行く様になつてゐるか知ら、矢張り西川もしきりにそれを氣にしてゐる、これも何分よろしくお頼みます、とりあへず、御返事を待ちます、

何や彼やで、逆上つてしまつて、ポカンとしてゐる、

三十一日夕 牧 水
村井兄

六〇

八月八日、沼津千本より、東京、村井武様宛(手紙)

おかげさまで、むねあげ、めでたく済みました、賑かなことでした、様子をすぐお知らせしようとおもひながら、參集者のあぶれが昨日までも残つてゐて

例のごとく飲んでゐたので、例のごとく、何も手がつきませんでした、

速く、来てみて下さい、そして讚美して下さい、それから、例の屋根の方はどうなつてゐませう、すぐか、つて貰へませうか、杉の皮で葺くのだけは今日で済みました、

とりいそぎ右のみ、宿醉のあはれさ、手ふるへ、頭一向にまとまらずふら／＼のてい、

八月八日 牧 水
村井兄

六一

八月十日、沼津市千本より、栃木縣、高鹽背山様宛(手紙)

高鹽君、先日は遠いところを、ほんとに難有うございました、おかげさまでめでたき式もあの様にめでたく賑かに祝ひをさめていたゞき、一生の思ひ出と共に深く感謝します、

御出立前のあれ、いや／＼こちらでは恐縮こそして

をれ、氣をわるくするどころの騒ぎではありませぬ、然し何とかしてお禮のしるしだけはしたいものと思つてをります、

それから、會の日取ですが、千葉がかなりごたくしてゐますので、困りましたが、今日、いよ／＼次ぎの様にこちらできめてしまひました、八月廿一日千葉縣印旛郡着、一日休養、廿三日佐倉町にて歌會竝に展覽會、廿四日同縣香取郡多古町着、五、六兩日その土地の分揮毫、廿七日歌會展覽會、廿八日喜連川着、九、十兩日揮毫、八月三十一日歌會竝に展覽會開催、といふ風に。

御相談もせずきめて、済みませんでした、如何でせう、これではいけませんまいか。出来たら、斯ういふことにしておいて下さい。

右、八月廿九、三十兩日揮毫とはいふものゝ、若しこの十三四日までに申込のきまつたものがありましたらこちら宛送つて下さいませんか、出来るだけはこちらで書いてゆかうとおもふのです。
お辨當を出すこと、無論當然でせう、一本(二合塚)

つけることにしてはどうでせうか。

上棟式から、イヤ、お別れしてから、がっかりしたのか暑さあたりか、少し、具合わるく、ふらふらしてゐます。

幸雄さんは元気ですか。

八月十日

牧 水

背山 兄

六二

八月十一日、沼津市千本より、東京、村井武様宛（手紙）

たび／＼電報で驚かして申譯ない、が、何分にも西川がせくので、見てゐられず、今日もあれを打つたのだった、工事は甚だ敏速に運んで、昨日あたり大體のことは終り、あとは屋根が出来ねばやらぬ仕事だとかいつて、幸ひお盆でもあるしすると西川は今日大工を六人ほど土肥へ歸してやつたりした、

今日中で、壁の、竹あみ（コマへとかいふのかな）も済むさうだ、いま、君の返電を見せに西川のところへ行つたところ、彼もひどく喜んで、いづれもうあなたの方へ見えるでせうから私も参りませうとて、みんなして今日夕飯を共にすることになつてゐる、

家は實に立派で、全てが豫想以上だ、材料などは見る人すべてが驚いてゐる、一軒としての體裁もまことにいゝ、これに屋根がついたら一層見直すだらうとおもふ、ことにいゝのは、二階からの眺望で、これだけは沼津はおろか、日本的に威張つていゝかも知れぬ、とにかくなるだけ速く来て見てくれないかね、それに、電燈のつけ場所、水管の廻し具合、窓の様子、其他で君に相談してから手を着けたいと西川も家内も云つてゐるので、忙しく、且つ暑いだらうが、是非やつて来てくれたまへ、君も飛んだ苦勞だが、まア勘忍して呉れ、今度で、大體片附くだらう、君の手紙も明日は来るだらうが、とりあへずこれを書いた、よろしく頼む、それから、阿父さんたちの避暑はもう何處かへゆか

れたかね、君から返事がないので、土肥にも（上棟式には土肥館の主人も来た）古宇にもまだ具體的の紹介をばせずにするのだが、

右、とりいそぎ、

八月十一日夕五時

牧 水

村井 兄

まだ見えないが、念のため、明日また注意してみてくれたまへ、（夕六時）——封筒裏面に——

六三

八月十六日、沼津市千本濱より、三島町、塚田静保様宛（手紙）

小生こそ、面目なく存じをります、といふより、非常にお逢ひしたく思つてゐるのですが、例の揮毫會をまだ續行してゐますので寸暇なく、こゝ二三日中にまた千葉の方へそのため出かるといふ始末、御憐れみ下さいまし、然し、おかげさまで、家はこの四日に上棟式をすませました、九月には移れます、

場所だけは少々自慢です、一日お出かけ下さいまし、御家内皆さまして、御壯健で何よりです、小生方も無事です、このごろはそれこそ不思議の様に稻玉様へ出かけぬ様になりました、いろ／＼御心配かけました眞木子も大元気で、全甲一年生です、ほんとに、どうにかしてひよつこり出かれます、このごろ、また、どうしたものか頻りとお噂が出てゐるので、

奥様へもよろしくおつしやつて下さいまし、

忙中、亂筆御めん下さい、

八月十六日

牧 水生

塚田静保様

金澤君は相變らず市中巡遊勤便中でしたが、フトコロに秋風たち、今、三河新城町に歸つてゐます、服部さんはこの五月のころ、ジンゾウケツカクの疑ひで一時は死んだ様にしよけてましたが、單に疑だけだつたらしく、今は昔に變らぬ大元気で、

目下(この二週間ほど)上香貫より、小生方近くの東京亭に避暑旅行中です、

六四

八月二十日、沼津千本より、大阪市、大島武雄様宛(手紙)

大島君、すつかり御無沙汰、相済みませぬ、それでもとお待ちしてゐましたが、終に駄目とのこと、まことに残念でした、秋引つ越しの濟んだころでもいかゞですか、平田家具商氏ともその旨、お話し下さいまし、普請、實に何彼と手のかゝるもので、眞實瘦せました、ドエライことです、然し、どうやら次第に形をなしつつあります、二階の眺望などは先づ沼津はおるか、日本中に於ても少々自慢してもよろしき様、愚考致されます、ボナベ島への御紹介、遅れました、これと同時に手紙投函致しおきます、君よりも同君宛直接手紙出して下さい、相川徳夫と認めておきました、それから、御地に於ける半折會の會費はもう全部に

なつておませうか、若し、残つてゐましたら、御めんだうでも少し御急ぎ下さらば助かります、それを豫想外の物入りにて、肝をつぶしてゐる有様なのです、

明朝六時發、千葉へ参ります、十日ほどあることになりませう、涼しくない氣持です、

御家内皆々様、御飲仲間諸君に吳々よろしく申上げて下さい、

大島武雄様 牧 水

八月二十日夕

六五

八月廿九日、沼津市千本濱より、千葉縣、細野春翠様宛(手紙)

細野君、今度は全くお禮の申しあげ様もないまでに、いろ／＼お世話様になりました、それに、非世間的に見ゆる君に、あれほどの大事業をやつていたゞいて、まつたく驚きもし、感謝しました、ほんとに難有うございました、

次第ですが、何卒よろしくおねがひ申します、

涼しいだらうと思つて歸つた沼津もやつぱり暑い、例により、机の上、爲事山積、あゝあ、助からねエな、

八月廿九日

春 翠 兄 牧 水

宿にもよろしくおつしやつて下さい、おみやげをば早速子供たち大喜びです、

周圍の人たちにもそれ／＼よろしく、ケンクワはよませう、

六六

九月十五日、沼津市千本濱より、信濃、吉江豊様宛(手紙)

その後悉く御無沙汰致し、相濟まず存じをります、兄上様初め皆々様お變りなくおゐること、は安心致しをります、先頃二度ほど御近所を通りました、が、いつも非常に忙しかつたのと、御宅も丁度お忙

昨日、随分と暑苦しい道中でしたが、無事(東京では誰にも聲をかけず)豫定の午後正十時に歸着しました、

普請は大分進んでをりました、

たゞ、京都から來ることになつてをる瓦が來ないため、皆、困つてゐました、思つてたより堂々たるもので、主人公初め少々まごついてゐます、

それについて更らに驚いたのは金のかゝること、屋根屋、佐官屋、石屋、風呂、電燈引込等一寸初めにそれほど思はなかつたところに意外に金がかゝつて、小出しの金すらもうから無くなつてしまつてゐました、丁度留守中がそれらの工事の進行した時期でした、覺悟の前ではありましたが、早速きめんに狼狽してをる有様です、君の方から持つて歸つた金など、金額の倍數も有意味に且つありがたく早速使用されました、おねだりする様で面目ありませんが、残つてゐる分を出来るだけ速く送つていたゞく様、御たのみ申します、君も勞れもしたらうし、學期初めで忙しくもありませうし、甚だ申し兼ねる

しい盛りだつたので、二度ともお伺ひせず失禮致しました。
サテ、同封のもの、廣丘の父より送り來り、捺印の上、あなた様の方へお送りする様にとのことですので、只今お送り申します、同様御捺印の上、廣丘の方へお廻し下さいまし、

その後、ゼニをこさへるために東奔西走、實に惶しい日夜を過しをります、而してゼニを作ることば第二第三とし、先づ杯をとることにのみ熱中する傾向を帯び、さすがに今日では參つてしまひ、半分ヨヒヨヒの状態にて、自分ながらキマリわるく存じをります、この十日ばかりも、晝夜酒戦を續け、只今、字も書けぬ有様です、あなたの方はいかがでせうか、
御心配をいたゞいてゐました普請もどうやら八九分出來上り、只今、屋内の造作にかゝつてゐます、ともすると今月中には引越せるかも考へられます、建坪七十九坪二合二勺といふバカビロきもの

出來上り、少々當惑致しをります、但し、景色は天下一、お出でを待つて一杯頂戴致すことを楽しみをります、

皆々様によろしく申上げ下さいまし、亂筆亂文御ゆるし下さい、

九月十五日

秋水 生

吉江豊様

六七

九月廿五日、沼津千本より、駿東郡、鈴木秋灯様宛（手紙）

廿三日、残念でした、實は廿二日、お迎ひかたぐぶらぐ歩いて出かけるところだつたのです、行かなくてようござんした、君を苦しめる所でした、で、いつひまになります、是非お邪魔したいとおもつてゐます、お迎ひには及びません、小生の方、來月四五日か引越し故、そのごたぐの一先づ濟んだ十日か十二三日ころ、尻端折で出かけたのですが、どうでせう、行つて櫟、榎のたぐひをも探して貰ひ

たいとおもつてをるのです、心がけておいて下さい、木と竹を少しこちらで買ひました、來月中旬植ゑます、家はとも立派に出來ました、へゝえ、こんなことになるのだつたかといつた氣持でゐます、引つこしに加勢にいらつしやい、

とりあへず、

廿五日夕 秋水

秋 灯 様

おこさまは大當りですか、

六八

九月三十日、沼津千本より、大阪市、大島武雄様宛（手紙）

大島君、すつかり御無沙汰、申譯なし、まるでバカの様になつてしまつてゐるのです、御ゆるし下さい、そんな風で、九州行もどういふ風にしたらいい、か自分でわからずにあるのです、どうしても十月末出立といふことになりませう、身體が弱つてどうにもな

らないのです、多分、行きに一晚御厄介になること

でせう、楽しんでゐるのです、

家が漸く出來上りました、とてもすてきな奴となつて現はれました、この十月五日が引越しです、

ところがまた申しにくいことを書かねばなりません

が、右五日に大工に工費の残額を支拂ふことになつてゐて、大に不足してゐるのです、で、大あわてで

かき集め最中なのですが、君の方の分、その後まだ

集まらないのでせうか、實に心苦しいけれど、おた

づね申します、大體どの位はまだ残つてゐるわけな

のでせう、

時計のこと、難有う、急ぎません、今度おいでる時、

若し間に合ひましたら、おねだりします、

平田カーテンダンツウ君に、商用として來て貰はう

とも考へてゐるのです、君も一つ商用を考へ出しま

せんか、とてもいゝ二階が出來ましたよ、

御家内皆々様（ア、初枝さんおめでたう、君も伯

父御になりましたね）その他飲友たちへもよろしく

おつしやつて下さい、忙中、辛うじて右のみ、

九月三十日曉
武雄 兄 牧 水

花ちゃん御執心の場所だった故、御一緒におさそひ下さい、

六九

九月三十日、沼津千本より、東京、村井武様宛
(手紙)

村井君、御無沙汰してゐても何とも申譯なし、千葉栃木を廻つたのが暑いさかりだったせゐか悉く参つてしまひ、歸つて来て、まるでバカになつてゐたのだつた、それこそ字一字ようか、ずにあました、家がいよゝゝ出来上つた、たゞみ建具が入つてみるととても立派なものになり、われながら少々テレてゐます、全くおかげさまでした、言葉につくせぬ御禮です、五日に引越します、明日にも越せるのだが、五日が日がいゝのださうだ、

それまでに来て貰へるか知ら、もつとも君の都合でいつでもいゝにはいゝが、とにかく来て、見て貰ひたい、君にも屹度氣に入るとおもふ、皆も驚いてゐます、

有光君のことで君に氣をませたが、何か云ひ違ひか聞き違ひのことゝおもふ、そちらで解決がついたか知ら、とりあへずメンドジックヒをば西川の手でやるさうです、費用のことは聞かなかつた、

引つ越してゆつくりしたいがさうもゆかず、十月中旬ころ、また九州向けて旅かせぎです、

九月三十日
武 兄 牧 水

七〇

九月三十日、沼津市千本濱より、東京、諏訪重太郎様宛(手紙)

諏訪君、お寫眞難有う。どれもよく、特に松原の、出来てゐるのでみな大喜びでした。家の早速郷里の老母に送りたいとおもひますが、田圃の中から見

純彦様宛(手紙)

野元君、遠くにおいでるさうですね、一寸淋しい氣がするが、多分、よき意味にとるが適當だらうとおもひ、先づ祝意を表します、土地が物騒なところらしいから、用心はすることですね、面白いでせうよ、いろゝ想像されます、たゞ、奥さんは少々お淋しいかも知れない、

ところで、君の送別歌會に出たいのだが、それを聞く一二日前に九州行の日取をまとめてしまつたので、どうにもなりません、そして、廿八日夜大阪に泊することにきめてあつたのです、神戸の方にお訪ねする筈なのですが、大阪の方に連中も多し、神戸は小生には少々ニガ手だし、我儘をして、大阪にしてしまひました、で、若し都合よかつたら廿八日夜大阪の方に来ていたゞけませんか、そして、一寸でもお逢ひしたいとおもひます、大阪着は廿八日夜八時十二分です、逢つてお話するつもりだつたのだが、萬一逢へないといけないから書きます、來年の新年號から君を一

九月三十日
重太郎様 牧 水生

二枚と書いたが、三四枚おねだり出来ませんか
ア。(封筒裏面に)

七一

十月二十五日、沼津市市道より、神戸市、野元

頁組に推薦したいのです、君と高橋希人君の兩人きりです、そのつもりで、十二月の十五日までに一ツうんと馬力をかけて作つて送つて下さい、大阪の連中には先日来た時、少々内意を得ておきました、九州を廻つて来ますと、歸るのは十二月の十二三日です、樂ではありません、鹿兒島までゆきます、

十月二十五日朝

牧水 生

野元純彦兄

奥さんに呉々よろしくおつしやつて下さい、

七二

十月二十六日、沼津市市道創作社より、愛媛縣森下笹吉様宛(手紙)

森下君、今夜君の村の近くであらうところの、竹本安一君來訪、四國の話出づ、急にはためてせうが、來年かさらいねんか小生四國八十八ヶ所めぐりを致します、お目にかゝります、少々、このころ、君に元氣なきごとし、氣持を換へて貰ひたくおもふ、人

間世馴れて元氣のなくなる位ゐ、みじめなことなし、我黨其處から脱け出たし、醉言如件、若山牧水

升田繁市君はいまどうしてゐます、みんな元氣であつて下さい、小生天元氣。

大正十四年十月二十六日夜

森下笹吉様

(笹田宣三、喜志子、竹本安一とのよせ書)

七三

十月廿八日、沼津市市道より、熊本縣、海達貴文様宛(手紙)

御無沙汰してをります、公子さんのを、金の星來月號に二頁だけ推薦しておきましたところ、同封の手紙の様同誌編輯部より申し参り、残念に存じます、毎號にも出したいのですが、いつも斯んな風なので、困るのです、新年號までお待ち下さい、「創作」十一月號には出ます、なほ、小生等夫婦今日これより出立、九州行の旅に

上ります、各地巡廻の上、十一月二十日、大牟田市本濱田町、若山峻一方へ参り、廿四日まで滞在します、お目にかゝりたく、公子さんにもお逢ひしたく存じます、それからこれは申し兼ねますが、右の日數のうち右峻一主催にて大牟田で小生の揮毫會をやることになつてゐます、若し出来ましたら御助勢にあづかりたく存じます、規約書をばとりあへず峻一より送らせませう、彼は小生の従兄です、とにかく近々お目にかゝることをよろこびます、

十月廿八日

牧水

海達貴文様

七四

十一月二日、岡山市、伊勢崎君方より、戸畑市毛利宇一郎様宛(手紙)

いよ／＼お近くに参つてをります、元氣は元氣なのですが、どうも空の字がつくらしい、そこで、またひとつわがまゝなお願ひを申しあげたいともおもひます、ゆるして下さい、夕食(といふよ

り晩酌ですネ、御飯はほんの一杯もいたゞければいゝ方ですから、おさかなもまた)の後に、すぐ眠らしていたゞきたいことなのです、でない、少しでもその御みきのほとぼりがさめると、早速もう不眠と寝汗とに苦しめらるゝのです、此處まで来て盛んにそれに悩まされてゐるのです、もつとも夜の歌會などある場合は自ら別ですが、普通の日には右様さしていたゞきたいと存じます、但し、夕食の時間が一時間から二時間餘にも及びますからその間に誰にでもお目にかゝり、お話も致します、其處のところを兄より他の人たちによろしくお傳へ下さいまし、宿屋はよろしき様お選みおき下さい、さういゝ必要はありませんが、揮毫する場所だけをばほしいとおもひます、

旅だつて今日で六日目、この泣言を漏らすのを悲しみます、

柳井津發の際(伊保庄)なほ打電しますが、先づ先便と書いて来て苦笑しました、先日申上げた時間表は實は昨年のものでした、爲にすっかり違つてゐ

て皆に笑はれました、改めて此處に申します、即ち、

十一月四日午前九時五十七分 柳井津發

同 午後二時三十分 下關着

同 午後三時二十五分 門司發

同 午後三時五十八分 戸畑着

となります、

諸君へは貴兄よりよろしくおつたへ下さい、

二日朝 牧 水生

雨一樓兄

七五

十一月十日、福岡、加藤介春方より、長崎市、

高島儀太郎様宛(手紙)

よろほひよろほひ豫定のごとくに行動、只今福岡、
来る十三日午前十一時四十一分當地發、同日午後四
時零七分御地着、大にほめてもらひたきものにぞあ
りける、萬事はよろしき様ねがひますがたゞ一つの
おねがひ、どうか睡眠不足にさせないですむ様に御
工夫なしおき下さいまし、それは不眠と寝汗と疲勞

とから逃れるおまじなひなのです、早く寝かし、早
く起して下さい、他は文句なし、

十一月十日 福岡にて 牧 水生

長崎支社御中

七六

十二月四日、霧島山中榮之尾温泉より、長崎、

長崎創作社御中宛(繪葉書)

温泉嶽の代りに阿蘇に登り、霧島に登りました、但
し後者は海拔九百米突のこの温泉まで。けふこれよ
り鹿兒島に向ひます、愈々千秋樂の地です、色々の
お禮などくだくしく申しません、たゞ合掌あるの
みです。

十二月四日 牧 水生

七七

十二月八日、鹿兒島市山下町三十四前之園方よ

り、沼津市創作社内、大悟法利雄様宛(手紙)

昨日、三時間半ばかり汽車にゆられて鶴を見に行つ

た、何百羽とか来てゐるのださうだが、昨日はさう
は見られなかつた、同伴者十名ばかり、阿久根に泊
る豫定を變へて夜遅く歸覽、今日はこれより、指宿
行、自動車で二時間半かゝるのださうだ、今夜あち
らどまり、明夜土地有志歡迎會、十日都農(宮崎縣
兒湯郡都農町河野佐太郎方)に赴き、三泊、十三日、
別府日名子旅館一泊、船か汽車で、十四日か十五日
京都入、十五日夜歌會、十六日滞在、多分十七日沼
津に歸ることにならうとおもふ、大に勞れた、

信州の母、氣の毒なことをした、桐子は行つたか知
ら、電報だけ打つておいた、

當地の成績六十口、熊本もそれに近かつたとおも
ふ、

とにかく、もう少しのしんぼうなり、みんなに
よろしく、

十二月八日朝 牧 水生

利雄兄

七八

十二月十八日、午前十時十七分、ヌマツより、
ナガサキシ、タカシマガタロウカタ、ナガサキ
ソウサクシヤ宛(電報)
コラ四タリキナラビ テセマキキロリカナワカヤマ
(註、九州旅行より歸宅して挨拶代りに數ヶ所に打電せしものなり)

大正十五年(昭和元年)

一月七日、沼津市市道町より、東京、村松道彌様宛（手紙）

村松君、先日、こま／＼とおたより難有う、あの御返事を前に、急用のみ申しあげます、小生と大悟法君と二人、この十日の夕方上京します、君の家に貸布圍屋からでも借りて三四日寝してくれませんか、朝飯だけ御馳走になり、晝飯と夕飯は他出先でたべます、飲料は自給自足します、御都合返電たのみます、若しわるかつたら、本郷森下町一、有終館方地崎喜太郎君に電話をかけ、アキ間があるかないか、あるなら一問十日夕より用意しておいて貰ふ様、とりついで下さい、おたのみします、それから、もう一つ、今度の上京は例の「詩歌時代」の用でゆくのですが、その東京支局長を中野秀郎君に（君の御意見はどうでせう）頼みたく、東京についた晩、即ち十日の晩に、早速同君に逢ひたいとおもふのです、これも電話なり何なりで取次いで下さ

いませんか、おたのみします、もう一つ、木版師のい／＼を見付けておいて下さい、いろ／＼速くする必要があるので、（そのくせ「お正月」でのんでゐた）要用のみ申しあげました、萬事おたのみします、

一般社友には今度はないし／＼です、用多く時少きため、そのおつもりでどうぞ、

一月七日夕 牧 水 村松 兄

二

一月二十二日、沼津市市道より、伊豆、山崎とし子様宛（手紙）

御無沙汰してゐます、お寒いではありませんか、でも、もう土肥には梅が咲いたのでせう、まだ御主人お留守ですか、早速ですが、土肥の吉村屋が大正館あたりで、暫く滞在するとして、一日どの位の宿料でせう、病上りの若い婦人だとのことですが、（小生の知人の知

人）問合せが来ましたけれど小生にもよく解らず、おたづね申します、お知らせ下さいまし、

漸く住みついたといふ氣持です、一度おあそびにおいで下さいまし、

い、ちやんたちはみな御元氣ですか、逢ひたいな、

一月二十二日

牧 水 生

山崎とし子様

自炊も出来ますか知ら、

三

一月廿七日、沼津市市道より、八幡市、三苦治様宛（手紙）

お二人の歌をいま見終つたところです、午前四時廿五分。いかにも眼の前にお二人を見るおもひがしますので、一寸なまけて手紙といふものを書きます、われながら可笑しい位の珍しさです。京子さんのでは雪がよかつた、守西君のでは濱の歌、

彌吉君に寄せられたものも面白かつた。いつもながらに澄んで生き／＼してゐるのが難有い。

お變りありませんか、通りすがりに見た並び社宅の路次の奥など眼に見えます。今年の寒さは別の様ですが、そして頻りに雪など降つてゐる様子ですが、京子さんは大丈夫ですか。無理をしないで、大丈夫であつて下さい。小生は不養生をしながら、元氣です。或る大きな爲事を始めようといふので、氣ばかりは張りつめてゐます。

遠く離れてゐるといふことが何だか變な様な氣がしますね、長距離電話をかけた時に感ずる不思議さです。あなたがたのことを考へることにいつもありがたい氣持になります。あなたがたの明け暮を考へることは非常にたのしいことです。思はうとすればすぐ眼の前に出て来るあなたがたの明け暮は常に小生の心を淨め樂しませてくれます。難有うございませう。

佐藤君たち其他、みな元氣ですか。くれ／＼よろしくおつしやつて下さい。ほんとに八幡はい／＼所です

ね、思ひ出すと自づと微笑まれて来る、

これで筆を擱きます、左様なら、

一月廿七日早曉

牧 水生

守 西 様
京 子 様

小生もこの五六月ころからは少しづつよくならうと思つてゐます、昨年、一昨年、まるで駄目でしたからね。

四

二月十二日、沼津市市道町より、大阪市、大島

武雄様宛(手紙)

とりあへず御祝詞申上げます、小生等まで誠にうれしく存じます、先日、平田君との御よせがきを拜見したときすぐ御祝ひ申述ぶるつもりでしたが、事に紛れて果さず、失禮しました、ほんとに御めでたうございました、御両親様の御よろこびもさこそと察せられます、

お祝ひの日に是非参上したいとは思ひますが、丁度例の新雑誌のことで忙しい盛りに(三月一日より遅くも十日までに封筒十萬枚位の書くことになりませう、一人一日五百枚かくとして一日十四五人の人を頼まねばならぬ勘定、とても小生とて穴をあけるわけにゆくまいとおもふのです)當りますので、その折には参りかねることになるだらうとおもはれます、然し、何れさう永くないうちにお伺ひします、その旨、花嫁の君へも母上たちにもお傳へおき下さい、平田君より話のありしものは必ずみなまゝめてお送り申します、折角の日に参られず、小生としてもまことに残念ですが、悪しからず思召し下さい、

皆さんお變りありませんか、小生、正月のころよりどうも變なので、丁度今日、醫者に行つて血壓心臟その他よく調べてもらひました、今のところ先づ先づ大丈夫とのこと、然し、ひやり／＼としてのみ居ります、半折會のつかれですね、

とりいそぎ右のみ認めました、亂筆御免下さい、

二月十二日

牧 水

武 雄 兄

平田君の熱海行はどうなりました、

五

二月十二日、沼津市市道町より、廣島市、三浦

敏夫様宛(手紙)

廣島でしたか、生蠣はすてきだな、恥しながら小生はまだその味を知らず、早速一つおねだりしたいものです、鹽水に(海水も自由)つけておいてから焼くのですか、

火の具合などはしくお知らせ下さい、どこへも出かけません、られぬのです、

いよ／＼例の雑誌に手をつけました、瓢箪から駒のたとへで、何だかバカに事がでかくなり、少々たぢ／＼のていですが、一つ横車を押してみませう、忙しいのなんのと、お話になりませぬ、梅見だの古戦場遊覧のときと、何だかアタマがしびれる、

けふ、お醫者さまにゆき、心臟、血壓、腎ざう等々としらべて貰ひました、もう牧水も斯うなりましたかねエ、

二月十二日

牧 水

敏 夫 様

雜誌發送、承知しました、新雑誌大に御後援を待つと云爾、

六

二月十四日、沼津市市道町より、大阪市、大島
武雄様宛(手紙)

大島君、とんだしくじりをやつた、先日平田君との御よせがきに三月六日とあつたと確信し（たしかにさうありましたよ、その手紙いま探したれど見當らず、残念）それで大に悠々としてゐたのです、二月だつたのださうですね、いま三池君の手紙にて承知し、夫婦とも仰天したことです、どうも拍子ぬけがして改つてのお祝ひ言も申しあげられぬのを感じます、いづれまたあとで申しあげます、とにかく、右の有様、あしからず御ゆるし下さい、そして夫人にも阿父さまたちにも呉々よろしく申上げ下さい、どうも頭がわるいので強ち平田君のみを責めるわけにゆきませぬが、何にしても大失敗、残念至極のことでした、

以上、お詫まで

二月十四日

牧 水生

大島武雄様

夫人のお名前をまだ承らず、お知らせ下さい、

やはり小生の間違ひ、これを受取つたのが二月の一日か二日かでした、で、來月を三月と直感したのです、もつともこの手紙の書きやうも甚だあやしいものです、（以上、前に受取りしよせ書を探し出してそれに書き添へて同封せしもの）

七

二月十五日、沼津市市道町より、信濃、中村端様宛（手紙）

中村君、どうだね、この頃は。

會社は、よしたの。山腹の、二人暮し（でもあるまいが）の家が目につぶ。それに引きかへ、小生方はいま十三人暮しの癡猛さである。

一つおねがひがある。「創作」二月號のだといゝのだが、間に合ふまいから、三月號の題附組の批評を一つやつて貰ひたいのだ。二十字詰百四十行位、全部に涉つてもいゝし、目星しいのを四五人引抜いてやつてもいゝ。

行數不足ならば、延びてもいゝ。とにかく、やつて下さい。これから毎號誰かにたのんで續けてゆかうとおもふ。

「詩歌時代」の騒ぎが、いつかしらデカクなつて、今のところ自分のひつた屁の音に驚いてゐる形だ。しかたがないから横車を押し通さうとしてゐる。前景氣はまつたくさかんです。そちらの、宣傳方、たのみます。

四月には出て來ませんか。この前のメイヨカイフクに丁度いゝとおもふ。出てらつしやい。

北の方に、呉々よろしく。干物など送らうと時々思ふのだが、要するに思ふだけになつてしまひます。小生、醫師が通つて、血壓など計つて貰ふ様になりました。

御近況、知りたし。

二月十五日朝五時

牧 水生

終 花 兄

八

二月十五日、沼津市市道町より、東京、長谷川銀作様宛（手紙）

長谷川君、

このごろ君が清爽として元氣がいゝらしく想はれて、誠にいゝ氣持だ、といふより難有い氣持だ、歌が出来たらすぐ呉れたまい、「詩歌時代」の都合で今月は一切を早くします、きりさんにもさう云つて下さい、それとももう來てるかな、あとで大悟法にきいてみる。

「詩歌時代」はいつかしら途方もなく事がデカクなつて大人少々ボカンのていだ、が、もうどうにもならない、しかたがないから横車を押すのだネ、押しぬいたらえらいもんだ、おかげで、前景氣はすばらしくいゝ、投書もだが、いはゆる大家諸君がやんややんやと云つてくれるので、これも少々意外だつた、たゞ歌仲間がいけねエ、どうして斯うケツの穴が小さいのかなア、

四月には待つてます、少し早く來て何彼とめんどう見て下さい、桐さんは來れないかな、それでも段々

暖くて元氣でせう、小生このごろ折々くすしがり通
うて血壓となむいふものなど計つて貰つてをる、臭
い息を吹きながらだ、

二月十五日朝六時

これよりのむとねる、

牧 水

銀作 兄

九

二月十八日、沼津市市道町より、東京、長谷川

きり子様宛(手紙)

きり公はイザも悪くアタマも悪き様なり、なるほど、
杯をあげる約束などはしたかとおもふ、いゝのが
あるからね、とてもすてき、いまもその一つをとり
だして来てちびりつゝあり、この杯を抜かれるのは
これはどうもしかたがねエカナ、とにかくアどれ
がいゝか来てごらんさいな、

二月十八日夜

牧

桐 公 殿

(封筒裏面に)

もう一本ねだれどもねだるに甲斐なき淋しさやお
れはどうしてももう一本のみてえなア

テイシユニハセイゼイノマスコトカンヨウナリ

一〇

二月十八日、沼津市市道町より、下野國、高鹽

背山様宛(手紙)

高鹽君、

君もいつも忙しい様です、始終何か事が起つて来
るといつた境遇、小生等もいまその中にゐます、も
つとも丁度さうした年齢かも知れませんが、
阿父様、御家内皆々様、みなお達者ですか、吳々よ
ろしく申上げて下さい、

君の歌、近來どうもあまり乾きすぎてゐる様に見受け
ますが、どうでせう、つまり、底が浅いといふので
せう、歌が筋(説明)ばかりで、筋から出て来べき
うるほひがない、いつか君の歌を針金細工だといつ
たことがあるとおもふが、その針金細工もキラ／＼

光つてゐるうちはまだいゝが、錆がこびり着いて来
る様になると困るとおもふ、何か、西洋の大きな小
説でも読んでみたらどうです、やはり自身の生活(生
命)に深みうるほひがないとどう苦勞してもいゝ歌
は生れぬとおもひます、先日から考へてゐたまゝに、
いま、一寸筆をとりました、御参考の一部にでもな
るならば幸いです、

四月三日には来て下さい、そして何か一席辯じて下
さい、そのつもりでゐますから、

「詩歌時代」、前景氣甚だ旺盛です、この雑誌のため
にも一つ馬力をかけて勉強して下さい、舞臺はちや
んと出来たわけです、

忙中、亂筆おゆるし下さい、

十八日

牧 水

背 山 兄

一一

二月十八日、沼津市市道町より、東京、和田山

蘭様宛(手紙)

和田君、

どうしてゐます、すっかり五一六居になりすまして
ある様にもあり、静養中とも見える、一體どうなの
です、身體は故障なしですか、御家族は如何、

小生、一昨年来全く馬車馬でした、流石に今は息を
切らして、ぐつたりしてゐます、その息の切れるの
が恐かつたから逆に出て新雑誌創刊などゝ出たので
す、一かばちか、やらうとおもふことをやつてしま
はないとどうも氣持のわるい性分で、自然身體に無
理をします、

でも、雑誌も前景氣甚だ旺盛です、この分ではどう
やら横車も押し通せさうです、

君も一つ元氣を出してはどうです、一體出す氣があ
るのですか無いのですか、

四月三日には是非来て下さい、そして何か一席辯じ
て下さい、その様にこちらではもうきめてゐるので
す、その前にそれとは別にふらりと出て来るなども
いゝ、樽は大きな奴がいつも据ゑてある、
が、小生このごろ醫者がよひです、血壓を計る、か

心臓腎臓など、いふものをしらべてもらつてゐるのです。流石に半折會の悪酒がきいたらしい、何しろ九州巡り五十一日間を通算して小生一人にて一石三斗飲んでるさうです、でも、醫者に通ひながら朝晩ちびりつゝあります、お相手位の出来ませう、とりあへず右のみ、御内室に呉々よろしく、ちひさい人たちももう大きいでせうねエ、うち、いま三人揃つて學校です、

二月十八日
山蘭老兄

牧水生

一一二

二月二十日、沼津市市道町より、東京市、原田實様宛（手紙）

おはがき、難有う、新雑誌、幸に前景氣よろしく、この分ではどうやら横車が押し通せさうに思はれます、何彼と氣をつけて下さい、お忙しいだらうとおもふけれど、『創作』のために、前の「ひとつの窓」をまた續けていた、けなかないか知

ら、毎號といひたいけれど、それだと若し氣重からうかともおもふので、氣の向いた時でいいといふことにして、出来るなら毎號書いていたゞきたいとおもふのです、二十二字詰（原稿紙は送ります）、題をのけて七十六行、つまり二頁位あつゞいでいゝとおもひます、もつとも行數は御自由です、ひどく厄介でなかつたら引受けて下さい、ひまを作り、御揃ひにてお出かけ下さい、

二十日
原田實兄

牧水生

一一三

二月廿五日、沼津市市道町より、東京、和田山蘭様宛（手紙）

こまゝくとの御返事をみて案外に御元氣なるを見、すつかり嬉しくなりました、苦勞はしてもお互ひ年はとらないね、同慶々々、學校騒動は新聞で見えてゐました、君なんかにとぼつちりがゆかねばよいがと妻とも話したことでした。

けふは用談

「創作」の三月號（明日出来）に載つてゐる「創作詠草」（六號三段組）の二つの欄の中から一人一首づつ、で三十四人だけ選み出してくれませんか、つまり四月號に前月の創作詠草より」といふ風にして掲載したいのです、是非引受けて下さい、斯んなことでもしてゐるうちに歌心など湧かないとも限りませんよ、

〆切は三月十五日まで、頼みましたよ、四月三日には出て下さい、皆が喜びますから、そして開會の辭を述べて下さい、これも頼みます、しゆんちゃんアキラ公たちによろしく、ヨヂさんもそのうち逢ひにゆきます、夏はみんなして泳ぎにいらつしやい、

二月廿五日朝四時
山蘭兄

牧水生

「創作詠草より」でなく「何々抄」と何か氣のきいた名をつけて下さい、山蘭選として出すのです、冊四人卅四首です、（封筒裏面に）

一四

三月五日、沼津市市道町より、朝鮮、福島勉様宛（手紙）

福島君、思ひがけなくお珍らしき（といふうちにも全く珍中の珍）ものをいたゞき、一家驚喜しました、一昨夜、先づお料理して一家して少しづつ、玩味しました、大悟法利雄、高山三千樹、笹田富三（日野光一）上野照雄の面々に小生一家族、この時が大悟法を除いてあとは全て鶴といふものを初めて口にしたのでした、それから昨夜は土地の社友長倉汀峰君を招き、味噌づけにしたのを焼いてたべました、とてもおいしいといふので、平常飲まない同君も大に酒をすごしました、これでまだもう少しとつてあるのです、それは明土曜の夜、土地の有志家で平常親しくしてゐる二人を招くことになつてゐます、而して双翼は大事にとつておいて羽根箒にするのです、ほんとに難有うございました、娘の姉の方は料理するのに大反對で、このまゝなぜとつておかないとて

大分困らせました、それには小生も半分だけ賛成でした。

い、氣になつてお甘えする様ですが、そんなに澤山とれますのならまたいつか何でもお願ひ致したいものです、その獐などいふものも無論まだ見たことありません、但し送られませうかしら、途中で腐れたりすると何とも残念至極です。

小生の方よりは何もお返しするものはありませんが拙い半折でも書いてお送りませう、その歌だけはもう出来てゐますが、例の「詩歌時代」多忙のため、書くのは少しお待ち下さいまし、

さうでなくても朝鮮には行つてみたいのですから、いづれ必ず出かけます、但し、これも急なことにはゆきさうにありません、君の其處におゐるうちにゆきたいものです、

御令聞へよろしくお傳へ下さい、

三月五日

牧水 生

福島勉様

一五

三月二十三日、沼津市市道より、三河國、金澤

修二様宛(手紙)

金澤さん、あなたがあないと沼津は工業地化して駄目です、何だか乾いて来る、少くとも小生氣まぐれにせよ一寸訪ね行かむとするところたゞの一軒もなし、今日一種の春愁を覚え、何處ぞへ出かけたくなしかたなけれど、サテ、行くところなし、飲めればネ、また法もありませうが、今日それも用なきことなれば、何處かへ行つて(といふより、この机をば離れて)腹ばひになつて話でもするところはない、いゝに考ふれど、どうにもなりません、矢張り金澤さんがあないと駄目だといふことになるのです、いづれそ畑毛へでもと考へましたが、サテ電車はいやなり自動車は勿體なし、要するにぐづぐづとめいりこんで、子供でも吐りとばすといふことになるのです、お元氣ですか、實に寒い春でしたねエ、沼津も昨日からです、やうやうと春らしくなりました、桃がほ

ころび、庭に一本の吉野も咲きました、いま人夫を雇つて書齋の東の畑の砂利をふるはせてゐますが、それが濟めば菜つばじやがいもたうもろこしなど植ゑますから、金澤さんがあなくてもさう困らなくなる次第です、

このあひだ、朝鮮から一羽の鶴を買ひました、吸物、焼、鍋等いろ／＼にしてたべました、おいしいといふよりまづ珍しいが先立つでせうが、イヤ、焼いたのは事實うまかつた、とにかく喜びました、そして金澤さんをおはれみしました、今日か明日、また朝鮮から獐なる獸が送られて来ます、角のない鹿ともへといふことです、相嘗喰ひのあるものでせう、金澤さんはやつぱり菜つ葉天才主義であらうしやいますか、

葛子さん初め皆さまお變りありませぬか、お父さんお元氣ですか、旅人が今日と明日入學試験です、丁度さし迫つた三四日前からハシカが吹き出し、一家仰天しましたが、仕合せとたいしたことにはならず、俾で通ふことになりました、チンミンが四年生、

ヨンヨンが二年生、ウトツベが幼稚園です、牧水は三日に一度か二度位、朝と晝とをやめるやうになりました、その代りかどうかひどい厭人病にかゝり、三度の食事も獨りで離室でやつてゐます、物をいふ數も恐らく金澤さんより少くなつたでせう、大會が近よりました、一向に氣乗せず、どころか、何だかいやでしたが、漸く今日あたりから、「みんながやつて来るのかなア」といふ氣になりました、「詩歌時代」も校正が出しました、意外にいゝものになります、然し、賣れさうにありません、借金を重ぬることになりません、但し、半年かそこいらたてば返してゆけるとおもひます、これも、よせばよかつた觀なきにしもあらずです、人間といふものは何か知らせずにはゐられぬものとおもへば諦められます、金澤さんは別なり、

これにてよませう、何やらあつたやうなれど、思ひ出せず、ア、お味噌を先日ありがたうございました、あれはお言葉に甘えいたゞきます、三四日前からあれがきれいでした、御手数でせう

が、大きい樽で一つ、送り出していた。けないでせうか、今度はお値段も送料荷造賃など知らして下さいまし、たいへん御厄介の様でしたら諦めますが、とにかく、おねがひしてみます、

三月廿三日午後四時、

壽の音漸く高し、

牧 水生

金澤修二様

皆さまによろしくおつしやつて下さい、

一六

三月廿三日、沼津市道より、下野、高鹽青山兄宛(手紙)

高鹽君、

昨日今日、漸く本當に春らしくなりました、沼津も今年は變則に寒かった、御地方の山々の薄霞をおもひます、

四月三日が近づきました、是非おいで下さい、何だか今度は淋しさうで、(もつともその方をよしとはし

たのですが)ほんとうの歌會一方のものに致したく、おいでとお話とを特におたのみするわけです、出席者は八十名あります、九州あたりからも出かけて來ます、

忙しく、頭が變です、「詩歌時代」も段々進んで來ます、いゝものが出來ます、

三月二十三日

牧 水

青山兄

一七

三月廿三日、沼津市市道町より、長崎縣、大橋松平様宛(手紙)

大橋君、御無沙汰にて申しわけなし、然るべくおもつて許して下さい、

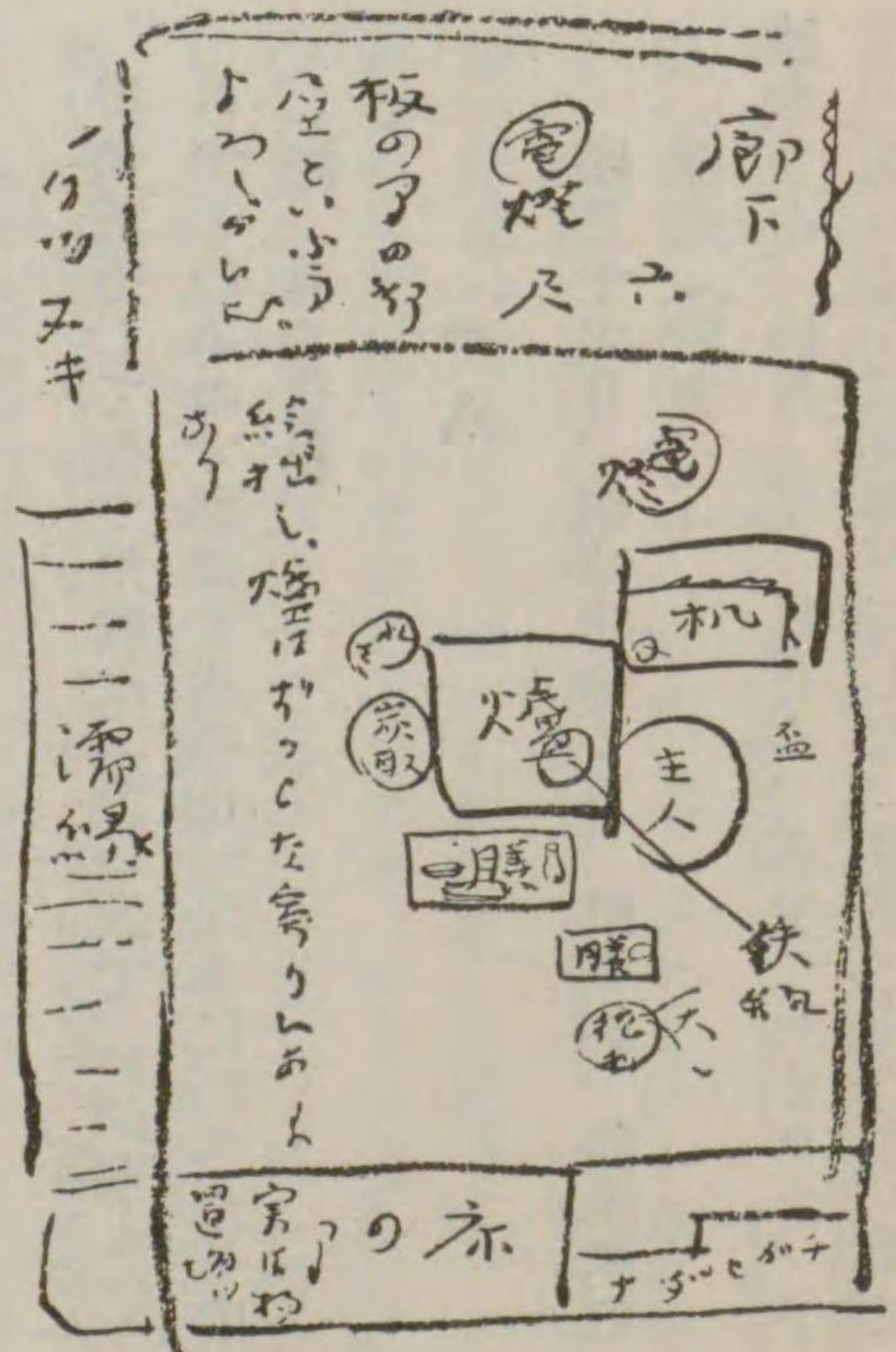
批評を、毎號ありがたう、雑誌が賑かにて、喜んでをります、四月號は残念だったが、やむをえない、あと、馬力をかけて下さい、

(註、ここに家の歌一首あれど種々様々に推敲しありて何と讀む

べきか不明

大橋君よ、小生珍しく今宵酔ひつゝあり、のころまで書きたれば風呂に呼ばれぬ、行きたり、意外にぬるし、乃ち長湯をして出て來ると、ちやアんと用意が出來てゐる、この二月の中ころよりか小生はたんだ一人にて離室にて飲むなり、御存じのごとく獨酌は酔ふときあり、酔はぬときあり、今日はわりあひに酔はぬ日なり、萬朝報日曜附録賤が嶽の七本槍を見つゝ一本一本と飲む、

以上が昨夜の、三月廿二日夜の、部なり、あとが續かなかつたらしい、酔はぬと彼は云つてゐるが、事實はその逆で、つまりこの手紙すら書きおぼせなかつたものと見るべきでせう、昨夜は、たしか、膳の上の自慢を書きたい氣があつたことをおぼろげながら記憶してをる、間は抜けたれど、いま、書き足さむ、
先づ場所の説明からかゝらう、



サテ、昨夜のごちさうは、

一、筍と高野豆腐のおにしめ、

○筍は八百屋が、初物なりとて進上せるもの

○高野豆腐は信州の社友(女流)の贈物、信州産は全く名物の名に耻ぢず、

一、若布とちしやのぬた、

一、朝鮮づけ、

○日向の母の手製の漬物、

一、廣島漬

○たか菜漬にて廣島の名物なりとか、谷口澄の贈る所、

一、小簾二疋の煮附

一、おかうこ、これは自家用、うちの女中、漬物だけは名人なり、

正に右の通りなりし、みなうまかつたので、書きたくなつたのでせう、

たあいもない話サ、

ところで、も一つ報告せねばならぬことがある、即ちこの手紙の中どころに中やらくしやく／＼書いてあるでせう、あれは、この四月三日の大會の詠草です、大悟法に、「もう先生だけですよ」と叱られ飲みながら作り出したものなり、出来かゝつたところが、折あしく机の上に、丁度かきかけてあつたこの書簡袋きりなかつたので、立つもめんだうで、これに書きつけたるものなり、サテこれを如何に讀むべきか、御本人すらはつきりせず、只今研究中、

大橋君、何だか、變な手紙になつたア、これでよ

しますよ、日奈子夫人に呉々よろしく、

高島君はつとめ人になつたとやら、どうしてネ、ア、いつぞや、陶器、難有う、惜しいことに一つわれましたが、一方は大丈夫でした、

旅人君、今日中學の入學試験で、いま、青くなつてるところでせう、

三月廿三日午前十時

大橋松平様

牧水生

折角苦勞して作つた歌は「家」の歌で「わが家」にあらずといふので棄却するの止むなきにたち至り申し候、(封筒裏面に)

一八

四月十六日、沼津市道より、駿東郡、鈴木秋灯様宛(葉書)

鈴木さん、いろ／＼、難有う、小生、サイクン、子供、とり／＼に大喜びでした、里芋、山の芋、共に

けふ笹田、上野、今西、小生夫妻して植ゑました、だいじにそだてます、先日の木も大方つきました、椎が二本あやしい、

十六日

若山牧水

一九

四月廿二日、沼津市道より、長野縣、中村端様宛(手紙)

お手紙、お歌、難有う、お歌、いつになつても甘いもんだと感心しながら拜見、この大甘のアクがとれるとなアとおもつたことでした、

五月號はおかげで賑かになるらしい、大會は大會でした、この前のより少しおちついた所はありました、但し、正月以來つゝしんで、漸くどうやら普通になりかけた身體をまた完全にもとに戻したことは豫定のごとくでした、小生近來腰のぬける(立たぬといふか)傾向を帯び來り、やゝ痛心してゐます、センキといふ奴の一種かともおもふが、

とにかくゐても立つてもゐられぬ苦痛焦燥を腰邊に覺ゆるのです、地梨の實が特效ありときく、心して見つけておいて下さらぬか、干たのもいゝさうです、焼酎づけにしてたべるのださうです、ヨヒヨヒ劇の序幕のごとくにも考へられ、笑止千萬です、これからまた忙しい半年なのですネ、どうかほんとは少し静かにして歌が作つて貰ひたいなア、思ふばかり」といふのが、いつか事實となりゆくこと此頃の様に迅速なことはない、これは君にも云へるとおもふ、しかも忙しい目をしてそれでどうしたといふではない場合が多いのだから助からぬ、要するに何ものかに引きずられ／＼してゆく癖をお互ひに少し矯めることですね、ひとごとでなく、一攫千金を夢みてやつた「詩歌時代」がものゝ見ごとくに越中禪となり、この分ではまた近々赤モウセン(註、揮毫のとき下敷にするもの)揮いでの旅かせぎに出かけねばならぬも知れず、笑ふ勇氣もありませぬ、然しこれは七分三分のカネアヒで、第三號までの瀬を押し切れればとにかく續けてはゆけます、いま、さうすべく百方配慮中で

す、おとなしくしてゐればいゝのに、といつてそれですまされぬわけもあり、どうしていゝか實はわかりません、

いづれにせよ、もう少し歌だけは勉強しませう、こゝまで来て先へゆけぬでは、やつぱり浮ばれない、島木赤彦氏の心など、さぞ寂しく苦しかつたこと、推察されます、

秋までは君は駄目か、秋、そつちにゆくべきか否かを、いま、考へてゐます、

四月廿二日朝六時

牧 水

終 花 兄

御家内によろしく、

君の先日の批評、甚だ評判よろし、といふより感謝されてゐる、

二〇

五月十九日、沼津市市道町より、東京、八木錠

一樣宛 (手紙)

八木君、いつもの様にお静かな御朝夕のこと、羨しく存じます、小生、まだ其處にゆけず、行きたき心を燃やしつゝあります、

早速ですが、おねがひがあります。「創作」六月號のため、五月號の「岫雲章」の中から一人一首づゝ、十二人二十二首を抜いて、何々抄と題し、この廿四日までにお送り下さいませんか、おねがひ申します、小生も大分よくなりました、たゞ「詩歌時代」で苦勞しつゝあります、御憫笑々々々、

いつもおねだりするのですけれど、草花のたね、いまころまくものは何でせう、若し恰好なのが、ありましたら二三種おねだりたいと存じます、今度はいくらでも花壇がとれますので、都合よくゆくと存じます、

五月十九日

牧 水生

八木錠一樣

若葉に燕頻りになく、(封筒裏面に)

二一

五月二十日、沼津市道より、田方郡土肥温泉、山崎斌様宛 (手紙)

病氣とは知らなかつた、四五日前から心まちしてゐたのでした、用心して下さい、風邪の一種でせう、うちでも細君が二三日前から寝てゐます、雑誌大しくじりで、初號だけに九百六十五圓の損(その前の準備費約二千五百圓をば入れずに)二、三號これに準ふといふわけで、悉くめんくらつてゐます、かといつて、やめるわけにもゆかず、青息のていで、ために西川への拂ひもまことに苦しいが、とにかく百五十圓だけ送つておきました、一度来て貰つて種々相談もある旨、お傳へおき下さい、

とりあへずお見舞まで、

五月二十日

牧 水

山 崎 兄

二二

五月三十日、沼津市市道町より、信州、中村終花様宛 (手紙)

忙しいのはしかたがないが、バカ酒をば飲み給ふな、小生天に慎酒して日に三飲す、成績甚だよろし、只今朝酒一杯のところ、雨前庭の柘榴に降る、見てゐるうちに君の近所が戀しくなつた、乃ち歌ふ、

山出で来て尾長の鳥の遊ぶらむ松代町の春をおもふよ

尾長鳥垂尾美し柿若葉柘榴の花の庭にまひつゝ、啼く聲のみにくかれども尾長鳥ときをり啼きて遊ぶ美し

うつゝなく遊ぶさまかも尾長鳥あらはに柿の若葉にはをる

斯くばかり人に馴れたる美しさ尾長の鳥をひとよいとしめ

君のひまになるのはいつかなア、小生はほんとに身體がよくなつた、

五月三十日午前五時四十分 牧 水生

終花大兄

二三

五月三十日、沼津市市道町より、東京、長谷川銀作様宛（手紙）

御元氣の由、桐公が元氣だと聞くより僕にはうれしい、小生も急にこのごろ元氣になりました、何處か泥草鞋でもはかうかといふ勢ひ、

「詩歌時」、たしかに第二號の方がいい、一號は平べつたかつたが、今度のは何處かふくらみがある、芽の出るふくらみだ、

だが、實はこれには弱つてゐます、一氣に借金を返さうばかりに始めた爲事が、豈計らんや、一切の準備費（二千五百）を除き、初號だけの計算で九百六十五圓だかの損になつてゐる、呆れてものいへず、もつとも初號は廣告に七百ほど使つてゐる、で、二號は新聞だけはよした、二號、三號と、ほゞ右と同じ状態だが、四號よりは何とかするつもりです、今さらよすわけにゆかず、幸ひ耕文社がよく云ふこ

とをきいてくれるので、凶を轉じて吉にすべく、目下苦心中、エライことになつたもので、笑へもせぬ有様です、然し、これを持つてをれば屹度末はい、と信ずる、

歌、待つてます、「創作」の歌が妙に眞剣になつて來て可笑しい様です、みんな大人になるのかなアといふ氣持です、僕も作つてゐます、文章もぼつ／＼書き出します、妙にさとりが開けて來たのか、右の「詩歌時代」のことでも、あんまりうろたへずにすますことを覺えました、

山陰の歸りには心待ちしてゐました、景氣如何、桐公のこともこのごろよく思ひ出してゐます、これももう固まりさうに遠くから推定されつゝあります、どうも物ごとはうまくゆく様にしか考へられなくていけない、

ひどい降りでした、夜なか、ら聴き入つて机に向つてゐました、これから旅人の外套を借り花の苗を植ゑむとぞおもふ、八木錠大人の贈らるゝ所のものなり、

五月三十日午後

収水

銀作兄

強雨漸く晴れむとす、（封筒裏面に）

二四

五月三十日、沼津市市道より、東京、八木錠一様宛（手紙）

八木君、今朝大きな箱が届いたので驚きました、そして、あけてみて、また、びつくりしました、いろいろなものの中から出て來たのです、而かもそれが悉く生きてゐるものであつたことは何ともいへぬ新鮮な感觸を興へてくれました、一家中を呼び集めて感謝しました、生憎くとひどい雨で、しかも一日降り通し、夕方になつて幾らか小降りになつたので子供の雨外套など借りて早速地に移しました、但しダリヤとカンナは明日に延しました、とても土地が足りないのです、花壇といつても小石をふるひましたので、ほんの狭い場所なのです、明日晴れましたら、

もう少し廣くふるひます、

何しろ、難有うございました、夏、泊りがけで見に來て下さい、立派に(?)咲かしておきます、

とりあへず、この嬉しさを申しあげました、

五月三十日夕方

収水生

八木錠一兄

君の御歌、もう少し概念を少くし、代りに新しい感觸を入れていたゞくといゝとおもひますがいかゞでせう、

先日、原稿、難有う、（封筒裏面に）

二五

六月七日、沼津市市道町より、東京、長谷川銀作様宛（手紙）

長谷川君、先日、こま／＼とおたより、難有う、何だか君の手紙を通じて東京の連中全體もずつと落ちついて來てゐる様に感ぜられ、嬉しかった、自分

の時間や心持をば矢張り極力尊重することだネ、い
ろんな出来事の出る来る来ぬはこれはどうも凡慮の
及ばぬこととしておくほかない様だ、

雑誌もこの第四號の購讀募集を今月末やつてみて、
萬事を決します、いけなければ萬事休すです、が、案
外、さうでないかも知れない、これも、何故斯んな
ことをやつてるかといはれさうだけれど、やはりや
つてゐねば(か、やつてみねば)ならぬ事情なり心
持なりがあつたのです、

サテ、お願ひ、「創作」六月號の岫雲章から廿二人廿
二首をぬき何々抄としてこの十五日までに届けて下
さい、待つてます、

細君が桐公のお見舞にこの十日だかに出かけた
と云つてゐる、却つて厄介だらうが、頼みます、
公表ぬきの方がよささうだナ、

とりいそぎ、右、

六月七日 牧 水

銀 作 兄

二六

六月七日、沼津市市道町より、田方郡、高島友
次郎様宛(手紙)

蜜柑の手入でお忙しきころとおもふ、毎日、濱に出
て、君の村を見ながらさう思ひます、山桃のころ江
梨から古宇へ歩きたいと考へてますが、あれはいつ
ごろになりますか知ら、「創作」六月號の創作詠草(ふ
たところにある)の中から、九十二頁高鹽君のやつ
た調子に今度君やつて下さい、忙しいだらうけれど、
この十五日までに送つて下さい、(若し駄目だつたら
一寸知らして下さい)お待ちしてます、

大悟法君、けふ、天城に登つてゐる筈です、「詩歌時代」
で眼を窪めたので、二三日遊んで來給へとすゝめて
出かけましたのです、

なみさんによろしく、何といつたかな君のちひさ
いのは、彼にもよろしく、宿屋のをぢさんにも、

六月七日

高島友次郎様

牧 水

二七

六月八日、沼津市市道町より、横須賀市、高橋
希人様宛(手紙)

高橋君、いかゞです、のんきにお自宅にねころんで
をられますか、しかあらむことを祈ります、一寸お
見舞かたく久しくみなかつた三浦半島の一角を見
に行かうとこのほどから思つてゐましたけれど、行
けさうにないので、これを認めます、御容體はほん
とにいかゞです、御静安を祈ります、小生も永らく
不愉快でしたらこのごろ元氣になりました、この分
ではまだく大丈夫の様です、

讀書執筆などといふことは出来るのですか、たい
くつだらうとおもひますが、肝癢を起さないで下
さい、

お目にかゝりませんが、阿父様によろしく申上げ
て下さい、

六月八日朝

高橋希人様

若山牧水

二八

六月八日、沼津市市道町より、東京、長谷川銀
作様宛(手紙)

十日にゆく様に云つてゐた細君、急に明日行くと云
ひ出した、即ち明九日午前十一時七分當地發、午後
四時七分東京驛着、富士人を伴れてゆく由、御存じ
の通り故、驛に待ち受け、中野まで連れてつて下さ
い、たのみます、

二泊の豫定、何處へも顔を出さないで歸宅する
ことになつてゐます、富士人が動物園か花屋敷
か見たき由、出來たらそれだけ見してやつて下
さい、お見舞に行つて却つて御手数かけます、

六月八日午後一時半

牧 水

銀 作 兄

萬一、君が會社にゐないといけないとおもひ、中

野君にもこのこといま頼みます、

二九

六月十一日、沼津市市道町より、千葉縣、細野
春翠様宛(手紙)

細野君、

田植休みといふのはいつになるね、

小生明後日あたりから三四日一寸留守になる、呼吸
抜きに濱名湖の岸でも歩いて来ようかと考へてゐる
のだ、一つは歩けるかどうか、身體をためす心もあ
る、若し留守の間にも来られたのではやりきれな
い、あらかじめいつごろ来る(右の日取よりさき)か
を知らして貰ふとありがたい、来るなら二三日寝こ
るぶつもりで来て下さい、

また歌を怠けてますね、怠けてゐることはどうも幸
福でない様だ、これは、自分自身に云ふ言葉だが、
でもこのごろ小生は休息からさめて作つてゐます、
作つてゐるときの方がとにかく楽しい、
大矢君はどうしてゐます、あの人の心にも一つ大

きな礎がほしい、

千葉のたひらが戀しい、今度もそちらを考へぬで
はなかつたが、行けば二三日ではすまないからナ、
とにかく、御返事まちます、

六月十一日

牧 水

細野春翠様

蔦屋の人たちによろしく、大矢君にも、

三〇

六月十九日、沼津市市道町より、八幡市、三苦
治様宛(手紙)

守西君、いづぞや京子さん私の云つたことをあま
り氣にかけないで下さい、ほんのかりそめごとにし
か過ぎないのだから、それを氣にかけたりして大事
の歌に癖がついてはたいへんです、たゞ、笑ひすつ
べきことのこれも一つです、

京子さん、今度のあなたの歌はいつになく拙かつ

た、丁度、悪はしやぎをする或る時のあなたを見
る様でした、勿體ないことにおもふ、

お二人ともお静かにゐらつしやい、

六月十九日曉

牧 水

守西様

京子様

鹿兒島は明るいこととせう、ことに昨今は、

三一

六月二十三日、三河國、新城、金澤修二方より、
沼津、長倉宜一様宛(手紙)

動中静あり、ひよこつと出かけて来ました、濱名湖
一巡の後、奥山半僧坊に参り、陣座峠を越えて、新
城町を襲ひました、昨夜は金澤一家と共に觀月樓な
るお料理屋に上り、大に——小生としては正しく大
會以來——メートルをあげ、そゞろに大兄の不在を
悲しみました、これより雨をついて鳳來寺山へ單行

します、鳥の奴、大に啼き、このごろは藝者衆が三
味をかへて木の下かげにその節つけをやつてゐま
す由、イヤハヤの態、小生もこれより大にハシヤダ
氣持でゆかうとしてゐます、やつちやんたちと一緒
ならばとくやまれます、委細後報、

六月廿三日正午

牧 水

汀峰大兄

(金澤修二、同篤子とのよせ書)

本文にかき忘れたり、此處の鮎とてもうまし、一
度御來遊を小生代表しておねがひ申します、(封筒
裏面に)

三二

六月廿三日、三河新城より、信州、中村桜花
様宛(手紙)

オマヘナンシニキナンシタシンシロクハヲカヒニキ
タシンシロクハハヨイクハデイキイキアオアオノビ
テキタフシギナコトガアルゾイナクハノハタケノマ

シナカニビチビチハネテルモノガアルアレハガンラ
イミヅノモノナンシニハタケニアガツタカサテシヨ
ンガイナ、ワカラヌ、
牧

六月廿三日午後二時

(金澤篤子、同修二とのよせ書)

三三

六月廿七日、沼津市市道町より、遠州、吉野榮
藏様宛(手紙)

吉野兄、今度はおもひがけずお世話さまになり、お
騒がせ致しました、お禮とお詫を申します、然し、
一度はお訪ねしたいとおもつてゐた宿望が殆んど偶
然に達せられたわけで、少なからず喜んでゐます、
お庭の印象など、一生わたしの心に残るものです、
御内室へ吳々よろしく御禮申上げて下さい、そして、
海を見においでる様、おすゝめ下さい、新城でお別
れする時はひどく寂しかった、といふより心配でし
た、無事豫定通り御歸りなされし由にて安心しまし
た、あの翌日小生一人にて門谷へ参り、その夜充分

に佛法僧を聴きました、然し鳳來寺の繁昌呆るゝば

かりにて、幸ひ小生の泊りし晩は客が少うございま
したが、その翌日、廿三日にはどやどやと押込まれ、
今一二夜との慾をきれいに諦むることにしました、
そして、その朝、洗面場で顔を洗つてゐますと、突
然顔の青い青年が近くの部屋から飛び出して来て、
「牧水先生ではないか」といふ、驚くべし名古屋八高
生の竹中皆二君でした、乃ちその日は二人して鳳來
寺に参詣し、共に湯谷温泉へ行つて一晩ゆつくり話
さうといふので自動車(が通ひ出しました)にて長
篠へ出、それより電車、車中約満員、湯谷にて下車
せむとすればこれまた驚くべし、車内全部が下りる
のです、オヤ、といふので我等は其處を乗り越し、
終點の川合驛まで行くことになり、おかげで豊川の
すつとみなかみを見得ました、とにかくあの邊の繁
昌 想ひのほかと御おもひなさい、川合一泊、新城
に引返し、夕方の電車にて出立、名古屋行をやめて、
夜十時半沼津に歸りました、何といつても身體は駄
目です、あの三四日にすつかり勞れて昨日は寝込み、

けふも手がふるへてこんな字を書く始末です、机上
爲事山積、心ぼそい氣持です、

とりあへず右のみ、

六月廿七日

牧水生

吉野榮藏様

三四

六月廿九日、沼津市市道町より、三河國、金澤
修二様宛(手紙)

修二さん、例によりお騒がせしました、お禮より先
にお詫びをいはなければならぬのを悲しみます、其
處にけふお手紙を見て、一層この感がひどうなりま
した、まつたく御免下さい、然し、けふのお手紙の
様な不景氣なことはいはないことにしませう、その
時にならねばわからぬこと故、それまでは無關心で
押し通した方がいゝとおもひます、そして、あなた
にはそれが大丈夫出来るとおもひます、そして更ら
に、いよゝの間際まで自分の生長に心を留めるこ
とを小生はよしとします、

小生にも五日の旅はまた少々無理でした、歸つて
来て昨日まで寝てしまひました、それも、飲まない
といゝんですがね、因果なものです、然し、けふは
いゝ、これからまた爲事です、
とにかく、お目にかゝつたことはいゝことでした、
どうも矢張り氣にかゝるのです、ともすると、また、
出かけますよ、今度は然るべく用心堅固にしてす
ね、

みなさまによろしく申上げて下さい、兄さんと

ゆつくりお逢ひ出来なかつたのは遺憾でした、

當方、みな元氣です、

六月廿九日

牧水生

金澤修二様

をりゝおたより下さい、こちらからはあやしい
が(巻紙始めに)

おみそ、さういつて下さいましたか、(封筒裏面に)

三五

七月六日、沼津より、名古屋市、尾山篤二郎様宛（繪葉書）

他に用事もあり、君に一寸でも逢ひたく、この間君の近所まで（この繪のときまで）行つたのだが、酒がたつてためであつた、近來の君のおちつきぶりをつらにく、おもふ心深い、小生はいま雨を眺めつゝ朝酒少々過しつゝある、

七月六日 曉

牧 水

佛法僧がよくなく、麓の宿屋でよく聞える、一寸行つてみたまへ、（三河國鳳來寺樓門の繪葉書書面に）

三六

七月七日、沼津市道より、千葉縣、神原克重様宛（手紙）

神原兄、藻の花會のよせがきを、難有う、梅雨の沼を見にゆきたかつたのですけれど、駄目でした、

御老父の御膝もと近くなられた御心情、お美しいものに眺めてゐます、御ふたりの御心もちがよく解ります、精々御つくしなすつて下さい、

いつぞや、北見の方からわざ／＼御心配下されし揮毫のこと、丁度小生の頭の悪かつた盛りであり「詩歌時代」のとりつきであつたので、ツイそのまゝにしてしまひ、何とも申譯ありません、もう書いても駄目でせうか、よければ書いてみます、よした方がよしの御見込みならばよします、とにかく、お詫びかた／＼おたづね申します、

それから一ツおねがひ、此頃毎號やつてゐます何々抄を一つやつて下さい、二八頁と五六頁との二所にある「創作詠草」から一人一首づゝきつかり二頁になるやう（八八頁参照、これは一人分不足の様です）にし、何々抄と題してこの十五六日に届く様お送り下さいませんか、試験でお忙しいでせうが、かんだんに一つたのみます、

奥さんに久しくお目にかゝらず、おなつかしく思

三七

七月十三日、沼津市道より、札幌市、山下秀之助様宛（手紙）

ひます、よろしくおつたへ下さい、ちひさい人たちもずつともう大きくなられたでせうね、行きたいな、

七月七日

牧 水 生

河脇萍花兄

こま／＼とおたよりを拜見し、非常におなつかしくありました、昨年の初冬鹿兒島にゆきました、惶しい中でしたけれど、氣持よく遊べました、牧君相變らず元氣です、橋口君には熊本で會ひました、山下君はツイ先頃一寸鹿兒島に歸省した様でした、久永君は久しく消息を聞きませんが、野元君は熱心にやつてゐます、いま上海に行つてゐます、同君の歌の出である「創作」一二冊別封にてお送りします、「潮音」に近頃お名前が出てゐない様ですね、千田君には逢つたことはありません、北海道にゆき

七月十三日

若山 牧水

小田觀蟹君が北海道でしたネ、行けば舊知（名だけでも）の人があるわけです、

三八

七月十四日、沼津市道より、駿東郡、鈴木秋灯様宛（葉書）

モモクヒにフロシキモチテオリテコイイソガニヤナクナルケフアスアサテ

七月十四日

トマトウノナエ

三九

七月十四日、沼津市市道町より、大阪市、大島
武雄様宛（手紙）

十六日午前七時十八分、待つ、
而して御手紙に従ひ、大宮口（お手紙には吉田口と
ありしが、これは甲州地）より登山、御殿場か須走口
に下山する、といふことに致しませう、然り而して、
沼津より参加する者、

笹田糖尿氏
上野昂奮氏
今西尻素氏
若山牧水氏

右、間違ひなし矣、
もう一人、二人、位あるかも知れず、細君は諦む
るらし、

とにかく右の如く決行することを決議す、

御手紙の時間通りに待つ、

七月十四日朝

牧 水

武雄様

四〇

七月十四日、沼津より、大阪市、大島武雄様宛
（手紙）

昨夜、晩酌一本超過、大にエラクなり、貴下等の登
山一行に加はる勇氣を獲たのでしたが、醒めてみれ
ばモトノモクアミ、どうも行けさうにない、残念な
がらあれは取消します、來年にとつておく、どうも
今年が山が悪いらしい、

笹田上野の兩君は多分行くでせう、

とにかく、十六日朝を待ちます、

七月十四日あさ

牧 水

武雄兄

四一

七月廿八日、沼津より、三河國、金澤修二様宛
（繪葉書）

小生宛、妻宛のお手紙、とりとくに難有く拜見、小
生怒るわけも勇氣も無之、泣面かへて目下齒醫者

に通ひ居り候、何彼と心細き事のみにて、呼吸がお
ひめに存ぜられ候、一日三飲が五飲位にならむと
する傾向あり、飲んでる時だけはクモもネズミも美
しく相見えそろ、

七月廿八日

牧 水

ヤカマヤフジト君游泳の圖（寫眞焼付繪葉書表面に）

四二

八月四日、沼津市市道より、長崎市、大橋松平
様宛（手紙）

長崎にお歸りにて、御安堵のこと、おもひます、第
一、他の諸君が喜んだでせう、
今年の暑さはいかゞです、夏好きの小生も弱つてゐ
ます、お變りありませんか、御家内皆々様、
「創作」の歌、よき傾向ではありませんか、一首々々
ではない、一人々々にです、斯ういふことはいへな
いものでせうか、島木赤彦の「柿蔭集」は面白い、
初めてこの人の歌を見る氣がしました、

四〇

七月十四日、沼津より、大阪市、大島武雄様宛
（手紙）

昨夜、晩酌一本超過、大にエラクなり、貴下等の登
山一行に加はる勇氣を獲たのでしたが、醒めてみれ
ばモトノモクアミ、どうも行けさうにない、残念な
がらあれは取消します、來年にとつておく、どうも
今年が山が悪いらしい、

笹田上野の兩君は多分行くでせう、

とにかく、十六日朝を待ちます、

七月十四日あさ

牧 水

武雄兄

四一

七月廿八日、沼津より、三河國、金澤修二様宛
（繪葉書）

小生宛、妻宛のお手紙、とりとくに難有く拜見、小
生怒るわけも勇氣も無之、泣面かへて目下齒醫者

「詩歌時代」で大味噲をつけ、また、半折行脚です、
空想癖の直るのはいつのこととせう、此處一二號で
廢刊、いゝ年をして物笑ひになりました、
とにかくこの一年をいや二三年といひませうか棒に
振りました、來年あたりからこそ本氣にしん身にな
りたいものです、君も勉強して下さい、

先日シャツ買ひにゆき、その行くみち、君のこと
を思つてゐましたので、おんなじものをツイ買つ
たのでした、これから折々買ひませう、

奥さんによるしく、

八月四日朝

牧 水

大橋松平様

四三

八月九日、沼津市市道より、東京、村井武様宛
（手紙）

里ちゃん、おなくなりの由、非常に淋しいおもひが
した、どうもあの人たちは不幸であつた、
御手紙の作歌のこと、一寸まごつくが、とにかく作

つてみませう、興味が動かないでもない、虎雄君へは君より右御傳へおき下さい、

村井君、相變らず小生はがたくしてゐて、實に面目ない、家が出來、半折會が濟んだらすつかりおちつくつもりだつたところ、身體の何處にか残つてゐた空想癖がツイと起きて來て、「詩歌時代」といふ各詩型による詩歌の綜合を旨とする雑誌を發刊することになり、この正月から小生の全てを擧げて狂奔した、そして見ごとに失敗して八千圓ほどの穴をあけてしまつた、雑誌はあと一二號で廢刊、その穴埋めのため小生は來月早々また半折行脚に北海道三界へ出かけねばならぬ、君なんかに對して衷心慚愧を覺ゆるが、もう然しこれがおしまひだつたらう、もうこそこれで一切事無かれ主義で押し通し、三猿主義一點ばりにならうとおもふ、どうか笑はないでくれたまへ、

家は、西川が仕上げ間近になつてすつと用材其他を落したため、諸所實に見ぐるしい有様を呈してゐる、仕方がない、これも來年にもなつたらほつくと

修繕して行かうとおもふ、

一度、あそびに來てくれたまへ、ともすると他の客と落ち合ふことになるかも知れぬが（今年、わきても來客多し）それをば我慢してくれ、藤田君が健ちやんたちを引つ張つてくるか君の子供たちを連れて來るか、などもいゝとおもふ、八月中のこと、

細君も君には何や彼や濟まながつてゐますが、これもゆるして下さい、これからだつて一生通すのかも知れぬが、とにかく、これからといふほかはない、

阿父さん御令聞に宜しく、

八月九日

牧 水

村井武兄

四四

八月九日、沼津市市道より、臺灣、秋場齊様宛（手紙）

再度のお葉書をたいへん嬉しく拜見しました、心の明るくなるのを感じました、月並でも毎月二三首で

もいゝから缺かさずお作りになつてはいかゞですか事を大きく考へずに手近に置いてお考へになるがよくはないかと思ひます、この數年小生何彼と落着きませんでしたが、來年あたりからは御詠草等をお返しする位の餘裕をば持ちたいと念うてをります、御主人へよろしくお傳へ下さいまし、

八月九日

若山牧水

秋場齊様

四五

八月十四日、沼津市道より、岩手縣、福地房志様宛（手紙）

御返事、まことに難有く、夫婦して繰返し拜見致しました、さういつていたゞくと全く勿體ない様に感じます、

では、お言葉に甘えて、北海道行の行きみちにお邪魔さしていただきます、出立の日取もまだ確定しません、大體九月の十六日ごろこちらを立ち、直ぐお訪ねする様にしたいと今のところ考へてゐます、

そちらでの豫定はお手紙にありました通りに致します、温泉行なども嬉しい一つですが、それよりも永年考へてゐたお宅の圍爐裡のそばで一杯いたゞくことを思ひますと、身體のむづ痒い様なのを覺えます、たゞ貴兄だけとお逢ひするといふことも難有いことです、歌會抜きも鮎もみな難有い、

半折會をやつていたゞけませうか、どうも無理のこととの様に思はれてなりません、無理でしたらよして下さい、今度は稼ぎとしては北海道ゆきが目的なのです、御地をやつていたゞくとすれば道草なのです、やつて下さるにしてもそのおつもりでやつて下さい、趣意書の様なものを印刷してお送りします、遊佐君にお話し下さる様でしたら私からも手紙出したいとおもひます、いづれにせよ、無理をばなさらずに下さい、岩手の社友はいまあとで調べてもらひますが、極く少數です、これらをばアテにせず、ほんのあなた、ちだけでやつて下さるおつもりで願ひます、

九月中旬といふとそちらはもう秋でせうね、青葉の

ころか、秋かとおもつてゐたのですが、終にその季節に出かけることになりました。

尾山君がそんな所に行つてますか、行きに小生方へも寄つて行つたのです。

とにかく、大よろこびにて、右のみしたとめました、御家人皆々様へもよろしく申上げて下さい。

八月十四日曉

牧 水

福地房志様

四六

八月二十日、沼津市市道より、北海道、平野行彦様宛(手紙)

平野君、

いつもおたよりをいたゞきながら御無沙汰してをり、申し譯なく存じます、ところが平野君、今度はもう手紙や葉書でなく、ぢかにお逢ひすることになりました、九月末、小生等夫婦、北海道へ参ります、詳しくは二三日中に改めて申しますが、とにかく右決定、神原君はそのためわざ／＼「北海道」の豫備

知識を小生等につけてくれるために此處に来てゐます、あゝ、終に北海道の地で諸君にお目にかゝることになりました、とりあへず、この喜びを報ずるために筆をとりました。

(神原克重、喜志子とのよせ書)

牧 水生

四七

八月二十二日、沼津市市道より、三河國、金澤修二様宛(手紙)

ともすると、さうではないかと懸念してゐたのですが、矢張りおわるかつたですか、全く健康者にも耐へがたいこの夏でしたからね、然し、例の信念で其處を押し切られたことをうち讃へます、まつたく偉い、それに昨日今日急に秋づきましたので、間もなく常態に復されるでせう、もう少し辛抱して下さい、そして、小康を得られたらばまた心を新たにしてい、そして、全快への難路につく決心をして下さい、それを祈るほかありません、新城郊外の新涼が偲ばれます、

早く散歩する様になつて下さい、

何か私どもに出来ることがあつたら云つて下さい、遠慮はいりません、

私ども、無事です、但し、私共夫婦はやはり「四十二年目」にやられました、こゝ數日、やゝ元氣よろし、

「詩歌時代」の穴埋めに來月中旬出立、北海道へ向ひます、ともすると四五十日の滞在になりませう、

岩村田はたいへんでしたね、エライトコロへ入り込まれたものでした、皆さまによろしく、

八月二十二日

牧 水

修 二様

四八

八月廿七日、沼津市道より、戸畑市、毛利宇一郎様宛(手紙)

毛利兄、いつもながらとはいへ、御無沙汰を御ゆる

して下さい、ひどい夏でしたが、御一家お障りありませんでしたか、豊子さんはいまそのお宅にはないのですか、

小生、ひところひどく弱つてましたが、幸ひとこのごろ盛り返して來ました、歌、御ほめにあづかり、お恥かしく存じます、心が落ちつかぬものですから、駄目です、この二三年間は何か知らごたくと過して來ました、今年一年もまたそれです、これは然しよしあしにつけ止むを得ぬこと、寧ろ然かあるべきことであつたかも知れませぬ、然し、今年でどうか打ち切りたいものです、打ち切つてしまへれば、來年あたりからは少しは勉強出來ませう、少し、あせる氣持を覺えます、

君のお歌、どうもひところの氣魄に乏しいのを覺えますが、いかゞでせう、どうも、強ひてつよがつてゐるといつたところが見えて、不安心です、出來上りの末に氣をつかはす、寧ろその出來上るべき本に氣をお集めになることをおすゝめしたいとおもひます、小生、來月また揮毫行脚に出かけます、「詩歌時代」

で、印刷屋にだけでも数千圓の穴をあけ「創作」まであぶなくなりましてので、前者をば十月限りで廢刊し、穴埋めの一助としてまた出稼ぐわけです、あはれです、行くときは北海道、二ヶ月はかゝりませう、

御内室様、ひろ子さんに呉々よろしく、

八月廿七日

牧 水生

雨一樓大兄

四九

八月廿七日、沼津より、八幡市、三苦守西様宛

(葉書)

痔がわるい様ですね、ミツワの「痔の座薬」といふを買ひ、用便の際、微温湯と脱脂綿とを用意しゆき、普通紙にて拭きしあとをその温湯に脱脂綿をひたせるものにて再び拭き、濡れたる所に右の座薬を肛門に挿入してごらん下さい、少し續ければ必ず直ります、ミツワ痔の座薬でなくては他のでは駄目です。京子さんはいま其處ですか。そして元氣ですか。三千樹はどうしてゐました。

八月廿七日

牧

五〇

八月廿七日、沼津市市道町より、北海道、齋藤瀏様宛(手紙)

お手紙、難有うございました、御深切、身にしみて難有う存じました、謹みて御禮申します、當地を九月二十日ころにたち、途中二三ヶ所に立寄り、札幌に着きますのが十月に入りはしまいかと思はれます、北海道各地への日取は札幌着の上、定めることになつてをります、御旅行よりお歸りの後、お伺ひすることだけは確かです、揮毫會は、實は一昨年、自分の住みます家を作りますために始め、昨年一杯でどうやらその目的だけは達したのでございまして、ところが、今年早々から運動を起し、五月に創刊しました「詩歌時代」が非常なる失敗にて印刷所の負債だけでも数千圓に上り、「創作」の發行にもさしつかうる様な有様になつて参りました、種々考へました末、「詩歌時代」をば残念ながら十月號まで

にて廢刊し、その負債返済の一法として、もうこそやるまいと思つてゐました揮毫行脚をもう一度企つることになつたのです、心當りの土地をばこの前の時に済ましてゐますので、今度はその目的を北海道に選びました、不自由なことには、其處には誰一人知つた人のゐないことなのです、名前だけは知つてゐても一度も逢つたことのない人のみなのです、主として世話を頼んでゐます札幌の谷口君千田君からしてさうなのです、で、かなり困難だらうと豫期されますが、とにかく出かけて見ることに決したのでございまして、そして、無難にもあなたがたへまで御依頼の手紙をさしあげたわけでした、をこがましき至りですが、この前の折の揮毫會の趣意書規約といふものをお目にかけます、規約は全部前通りに致したいと思ひをります、甚だ亂暴な滑稽なことです、何卒御見逃し下さいまし、

右の有様にて甚だ心苦しき企てなのですが、とにかく眼をつむつてやつて見る覺悟です、何卒、お笑ひなく御援助下さいませ、重ねてお願ひ申します、

いづれにせよ、お目にかゝれる日が近づきました、妙なことにしてお近づきになることになりました、酒を妨ぎますために妻をも連れてまゐります、お逢ひ下さいまし、

八月廿七日

若山牧水

齋藤瀏様

五一

九月三日、沼津市市道町より、青森縣、加藤定一樣宛(手紙)

加藤君、お互ひ實によく黙り合つてゐたものだとおふ感がありますね、お變りなく御機嫌のこととおもひます、小生のことは雑誌で見てゐて下さるでせう、小生今月廿一日當地發、細君同伴で北海道へ渡りまして、これは「詩歌時代」でまんまと失敗して印刷所だけに五千圓からの借金が出來、「創作」の印刷までが危くなつて來たものですからその大穴埋めの一助として、北海道で揮毫會の恥さらしをやるわけなのです、その歸りに久し振に松島村を訪ねたいとおも

ひます、が、これは單に松島村に懷舊の情を捧ぐるといふでなく、實は腹黒いたくらみがあるのです、即ち、出來たらば君、及び君から林権次郎君に頼んで貰つて松島から五所川原及びその附近で、揮毫會を開いて貰へたら開いて貰ひたいといふ甚だ圖々しき計畫を持つてお訪ねしようといふのです、半折一枚十圓一口として三十口か五十口出來ないでせうか、あまり少いのも見苦しいし、君たちにあまり御無理を願ふのも心苦しいし、とにかく手紙で大體の見込をお聞きしたいとこの筆をとつたのです、お考へ通りを一つ聞かして下さい、林君には小生からも手紙をば出しますが、君より頼みして下さいとにしたいとおもふのです、

廿三日夕方青森着、一泊します、若し、其處でお逢ひ出來ると仕合せですが、さう願へないでせうか、廿四日夜札幌着、廿五日講演會、廿六日歌會といふ風に續いて北海道を十ヶ所も歩き廻ることになりませう、一月あまりかゝると見ねばなりませんので、君の方へ行きますのは十一月の初めかなころかも

一知れませぬ、

久し振の手紙なのに、變なものをさしあぐることになりましたが、赦して下さい、とにかく御返事を待ちます、揮毫會の規約をお知らせするため、北海道用のピラを一枚封入しておきます、

九月三日

若山 牧水

加藤東籬兄

君をいぢめることになるのを恐れます故、そのおつもりで正直に考へて下さい、(初めの餘白に追記)

五二

九月四日、沼津市道より、大阪市、大島武雄様宛(手紙)

御手紙拜見、いつもながらの御深切、身にしみて難有う存じます、

然し、要するに駄目です、十月號を出しておいて廢刊します、本屋へ譲りわたすことも考へましたが、下手やられると困りますし、また、オイソレと引受

ける本屋の心當りもありません、

廣告の御心配も、感謝してゐました、そんな風ですからこれも一切お打ち下さい、折角來號一度出てあとなないなど、あなたたちの顔にかゝりますから、一切きれいに諦めて、雪見の旅に上ります、廿一日當地發、廿四日札幌着、それから廿日鼠の様に北海道をかけ巡ります、錢も儲け、景色も見、歌も作り、紀行も書き、酒も飲まうといふのですから物凄いい、幸ひ、身體がよくなりました、十一月の中ばか末になりませう、歸りますのは、

何だか、今までにない杳かな(こゝろぼそい)氣持で出かけます、一つはあちらに知つた人間(顔)がたつた一人もゐないといふのがその因をなすのでせう、小さな部落から部落を駆け廻ることになるらしいので、随分と忙しいでせう、然し、季節はよし、景色はい、所を見て來ます、奥になりますと十月から雪だといひますからね、

皆さん、お變りありませんか、よろしくおつしやつて下さい、ノミスケ族にもとんと御ぶさたして

ゐます、君よりよろしくお傳へ下さい、

けふは時化日和です、

九月四日

牧水 生

武雄 兄

五三

九月四日、沼津市市道より、千葉縣、神原克重様宛(手紙)

この間、三四日前、ほんの一時間ばかりで、手紙が行きがちになりました、

奥さんは、まだなんださうですね、御心配でせうし、お淋しいでせう、お察しします、

先日のお手紙と一緒に札幌からも手紙が來たのでした、そして十八日は講演會を開くといつて來ましたので大にうろたへ、電報で延期を申し込み、廿五日に開くことにきまりました、當地は一日發、福島、盛岡、青森各一泊、廿四日夜札幌着です、なるほど二人とも一生懸命にやつてゝくれる様です、難有いことです、札幌以外の地は札幌に行つてから日取を

きめるほかありません、たゞ、旭川だけが、齋藤瀧
(大佐ださうです)氏が演習に出る都合で非常に急い
でますので、札幌の直ぐ次ぎにやつて貰ふ様に札幌
へ頼んでやつてあります、齋藤氏、とても乗気で、驚
くべき深切を以てやつて呉れてゐます、意外のたま
ものでした、何だか、うまくゆきさうに思はれます、
社友への挨拶状と趣意書とがけふ出来ず、それ
を待つてゐましたので、渡邊氏へも今日手紙認めま
す、職員諸氏へ君より手紙御出し下さる様でしたら
趣意書五十枚も送るべきかと考へてゐます、
本間君といふ人へも小生から出状すべきではないで
せうか、所は何處でせう、

金つくり以外に、見て来べき所をお知らせ下され、
難有う、飛び廻りがかなり急がしさうで、果して遊
覧気分が湧くかどうか知らないが、出来るだけは見
て来ます、歌も精々、即興以上のものを作つて来ま
せう、飲みさへしなければいゝのですがね、
とにかく、非常に氣持が引き緊つて来ました、出
来るだけいゝ氣持で行つて来ませう、この上とも

種々の注意を與へて下さいまし、御安産を祈ます、
九月四日、暴風雨
神原大兄 牧 水生

「千本」の歌、難有う、土地の新聞にも出します、
お送りします、
多古族はどうしてゐませう、熊公におびえてるさ
ま、見る如し、

五四

九月五日、沼津より、千葉縣、神原克重様宛
(葉書)

いま、網走渡邊氏に手紙書きかけたが、君よりの手
紙に對し同氏より返事あり、その上にこのことにな
いと何だか可笑しい様ですが、さうでないでせう
か、まだ時間もあるししますからこのこと一應君に
お伺ひしてからにします、「北海道事情」難有う、暫
く貸しておいて下さい、
昨日、意外な大時化になりました、ひどい浪、松原

まで来ました、

九月五日

牧 水

五五

九月六日、沼津市市道町より、廣島縣、渡邊麻
吉様宛(手紙)

渡邊麻吉君、いつもながらの貴君の御手蹟を拜見し、
まことに昔なつかしいおもひがしました、この文字
どほり、いつにかはらぬ静かな朝夕を持つてゐられ
るであらう貴君を想像し、なつかしくもまたお美し
い氣になりました、「生活者」、難有うございました、
休暇の終り際の常とて泊客おほく、まだ拜見出来ず
に(御返事も今日漸く)ゐましたが、いづれゆつくり
拜見致します、なほ、雑誌は「詩歌時代」との交換で
毎號来てゐますから、若しお手許に餘分があまりま
せんでしたらお送り返しませうか、

東海道をお通りになる時がありましたら、めん
だうでも御寄り下さい、小生もそちらに参りま
したらお訪ねします、

九月六日

若山牧水

渡邊麻吉様

五六

九月七日、沼津市市道より、大阪市、野崎宣重
様宛(手紙)

お手紙難有う、十年振の時化だつたさうですが、松
原のおかげで(文字通り)小生方は何でもありません
でした、ダリヤをやられた位のものでした、
北海道行、われながら何だか悲壯な感が起りがちで
困りますが、つとめて平靜な心で出かけて来ようと
おもひます、社友といひ世話人といひ、誰一人知つ
た顔がないので、一層その氣持です、景氣も一向解
りませんが、とにかく札幌へ行つてから陣立てを
のへます、専ら景色でも見る氣で、行つて来ます、
ともすると大變なお土産があるかも知れない、
大阪はいかゞです、など、いひだすと、ちぎ行き
たくなる傾向がありますが、秋氣そゞろに芳醇を
おもはせますね、みんなによるしくおつしやつて

下さい、

九月七日朝

牧 水

野崎 兄

五七

九月八日、沼津市市道より、東京、長谷川銀作様宛（手紙）

近來、如何、大悟法が行く筈だから大體の御様子は聞けること、おもふが、けふは例の御依頼用なり、ノートを二冊買つて下さい、今度の北海道行の懐中用のもの男女各一冊づつです、小型で、人まへに出して恥しくない程度に氣のきいたもので、罫の様なこまかい罫のあるのなど宜しからむか、男用はやゝ大きく一方は小さく、ふところにかさばらぬを要す、千田迅一郎を君は知つてゐるのだね、同君宛、牧水がいよゝゝ行くさうだから萬事よろしく頼む、さぞめんどうだらうが、飽きないでよく見てやつてくれ、と手紙を出しておいて下さい、目下、懸命でいろいろやつて呉れてるらしい、谷口盛老人と一緒に、で

も二人ともに逢つてゐないのでどうもうまくばつが合はないでやりにくい、行けば何とかなると思ふけれど、

北海道行は萬事が謎です、ひどく心ぼそい様な、また、面白い様な、ひどく興行が當りさうな、また外れさうな、さつぱり見當がつかないが、心ぼそいといふのが本音でせう、知つた人は一人もゐないし、あのたゞびろい所を馬車馬式に飛び巡らねばならぬらしいし、（小生、九州とおんなじ位に考へてゐたら、九州と四國と臺灣との三つを合せた廣さださうだ）これで興行でも當らなかつたら、など、考へて來るとやつぱりしほれざるを得ない、なるだけ氣を平かにして歌でも精々作つて來たく、乃ちノートを調へる所以です、北海道で心得べきことがあつたら知らしめて下さい、この廿一日か二日發、福島（？）盛岡、青森各一泊、廿四日夜札幌着、

中島君、高久君、其他、どうしてゐます、今度、逢つてゆけない、よろしく云つといて下さい、先日の小生の中禪寺の寫眞、大正十年の十月ころ

でした、信州から上州に入り、其所から野州に入つたときのものです、

ノートは、今ころからいろゝの心覺えを書きつけてゆきたい故、なるべく速く送つて下さい、鮭を喰はされることでせうね、身體が臭くならなければよいが、いゝのを一本送りませうか、

九月八日朝五時

牧 水

銀作 様

桐子 様

五八

九月九日、沼津市市道町より、北海道、太田平様宛（手紙）

只今、千田、谷口兩君よりそれゝ來書、貴君谷口君を訪ひ共に千田君を社にたづねられし日に認められしもの、様です、兩君の手紙にて、貴君がいろゝとお心をつくされつゝあることを知り、少なからず感動致しました、厚く御禮申します、ことに、

丁度とりかゝらるる筈になつてゐた御新居建築をもそのために延ばされむかとのこと、これは御厚意のみを頂き、實際は矢張り豫定通り事をお進め下さる様、小生よりお願ひ致します、着手すべき時に着手せねば、それがもとにて思ひの外の際が出来るもので、とにかくそれだけに時間的にもまた物質的にも觸れない様に致したいものと小生自身固く存じます間、何卒貴君にもその様御承知下さいまし、また、小生の宿のことにて御心配下され、御宅にお泊め下されむとのこと、これは前の建築に關すること、違ひ、大に御厚意に甘えて御厄介になりたいたと存じます、新婚早々の令閨の迷惑さこそと察せられますが、これは一つ押しても御厄介になりたく押しかけ客と相なります、小生、酒は自分で買ひます、御馳走は平常君たちのおあがりになるもの、みで結構です、小生は極めて少食にて、たくさん料理していたゞいても何もようつたべませんから何卒初めよりそのおつもりにて御仕度なし下さいまし、何處へ行つてもあまりたべないので恨まれる始末です、

それから揮毫するに広い座敷がほしいのですが、き
ますればお宅はお寺の山内の由、そのお寺の本堂
か何か拜借出来ないでせうか、かいた半折を並べて
乾かすのに場所をとるのです、考へておいて下さい、
今一つ、小生は議論などきらひで下手であるごとく
講演といふものも甚だ拙く、且つ好きでないのです、
このごろ止むなき必要から仕方なしにやるにはやり
ますもの、出来るだけしたくないものと思つてあ
ます、もの、二十分か三十分も話してゐると、もう
何もいふことがなくなつてしまふのです、で、御地
でも一ヶ所位は致しかたないでせうか、あとはその
ことのない様にプログラムを御きめ下さいませ、
おねがひ申します、全く下手なので、われながら困
るのです、

お送りした印刷物にも書いておきましたが、揮毫申
込書には必ず希望歌を書き込んでおいて下さいいま
し、申込者の方で書いてなかつた場合は君の方で適
宜に選んでかいておいて下さい、でない、と、揮毫しか
けて歌を選んでゐると時間がかゝつて困るのです、

今月の末（日取、拜見しました）といふともう秋で
せうね、いろ／＼空想してゐます、

御令聞によろしく申上げて下さい、厄介な者が
押しかけて参りますと、

九月九日

牧水生

凍影兄

二通つゞきのお手紙只今拜見、御返事は明日認め
ます—夕方—（封筒裏面に）

五九

九月十日、沼津市道より、東京市、石橋静子様
宛（手紙）

静子様、御病氣の由、どうぞお大事になすつて下さ
い、お弱い様で心にかゝります、今度また、たいへ
んぶしつけないお願ひを申しあげてまことに恐れ入
ります、どうぞおゆるし下さい、止むなき必要から北
海道までも行かねばならず、行くにしましても九州
あたりと違ひ誰一人知人といふものなく、甚だ事が

やりにくいのです、世話を頼んでゐますのは千田迅

一郎、谷口波人の両君ですが、お互ひにまだ逢つた
ことなく、お互ひにやりにくさを感じてゐます、そ
の谷口君といふのが必死と團氏の紹介状をほしがつ
てゐるのです、たとへば丁度けふ着いたこの葉書に
もある通りなのです、で、ともするとあなたを苦し
い立場に置くことになりはせぬかなども思ひなが
らもあへてお願ひした次第でした、

どうやらいたゞいていたゞけます様子、この上の喜
びはありません、その支店長といふ人に若し直接に
お頼み下さる様でしたらこれまた望外の幸です、何
卒、然るべくよろしく御依頼申します、また、斯ん
なに云つてゐるほどですから御叔父上の何等かの御
聲が、りをいたゞける様だと、一層の喜びなのです、
わがまゝばかり申しますが、あしからず思召しの上、
何分にもお願ひ申します、

勝手の時のみにて、御無沙汰致し、まだおよろ
こびも申しあげませんでした、何卒御良人へ宜
しく申上げ下さいまし、一度御一緒にこの千本

松原を見にお泊りがけでおいで下さいまし、座
敷はあります、とりあへず右のみ、

九月十日

若山牧水

石橋静子様

六〇

九月十一日、沼津より、千葉縣、神原克重様宛
（手紙）

渡邊氏へ手紙出しました、そして、千田君の方から
趣意書を（その方がよい様ですから）送ることゝ、日
取をきめて貰ふことゝを同君あて申し送りました、
札幌から旭川までの日取、きまりました、

廿五日—廿八日 札幌

廿九日—一日 岩見澤

二日—四日 旭川

です、この前、未定、

何だか大變景氣よささうです、もつとも、世話人諸
氏にもはつきり見當はつきかぬ様子、
奥さんはいかがです、

千本濱のお歌「沼日」の文藝欄がとても低級になつたので、出すのをよしました、

松原はどうもやられるらしい、で、けふ夕方から國技館で市民大會が開かれ、小生も一席やぢられます、

キチガヒになりさうです、何だ彼だ事が多くて、

九月十一日あさ四時 牧 水

神原 兄

六一

九月十一日、沼津市市道より、北海道、太田平様宛（手紙）

沼津唯一の寶、千本松原を伐らうといふ亂暴な騒ぎが起つてをり、その反對運動を起してをるので、そのため、昨日今日明日と身體をしぼられ、御返事一日遅延しました、但し、お急ぎの規約書だけは一日昨日夕方、お手紙を拜見すると同時に送つておきました、

講演のこと、宿のこと、共に御手紙をいたゞいた時は既に封をしておいた小生の手紙に書いてあります、

たので、早や御承知下されしこと、おもひます、講演はどうも不得手ですが、既に君の方で御約束が出来てをるとすれば止むを得ませぬ、君の中學では無論やらねばならぬとおもつてをりました、他の、女學校と農學校とはどうなりました、まだ約束が出来てゐなかつたら、やめておいて下さい、約束が出来てゐたらその旨お知らせ下さい、小學校の方はよしませう、第一、時間がないこと、おもひます、講演の時間は、小生の方はいつでも構ひません、

帶廣とか池田の方はどうなつてゐませう、あちらから一向たよりがないので、見當がつきませんが、何かやることになつてゐませうか、桑折君が菊池蒼村君宛に君より問合せみて下さいませんか、やるとすれば日取もきめて下さい、

宿のこと、これも一昨日申上げた通り、御厄介になりたいとおもひますが、君の方で迷惑ではありませんか、客があつたり（あまりありますまいね）すると恐縮だと考へてゐます、

揮毫會の期限のこと、これも御手紙の通りでいゝの

です、然し、これもひどい御手数のことではないでせうか、現在、出來たゞけでいゝことにしておかゞではありませんか、

いろ／＼と御多用の中を、ほんとに濟みませぬ、お詫びします、

岩見澤での日程がきまりましたらお知らせ下さい、

い、

御令聞によろしく、

九月十一日朝

牧 水生

凍 影 兄

六二

九月十九日、沼津市市道より、東京、和田山蘭様宛（手紙）

お手紙難有う、實は七月の末、東北から北海道の方へ行くことに心をきめた時、上京して、君、菊池君、越前君に逢ひ、久瀧を叙しつゝ、あつちのことをおたのみしようとして先づ越前君に手紙を出したところ、彼、丁度信州ゆきの前で駄目だといふので、ツイするす

るになり今日に至つたものでした、今日ではもう小便にゆくひまもないせつばつまつた時間で何とも致しかぬ、いま確定してゐるところは、

二十一日午前四時四十七分（急行）沼津發

同 八時二十分、東京驛着

同 十一時四十分、上野驛發

となつてゐます、東京驛には多分菊池越前兩君が來てゐてくれるでせう、其處で小生だけ約一時間用たしに出かけ、右兩君と細君は上野山下の池の端の「あげ出し」にゆき、一杯やることになりませう、やがて小生もかけつけ、やがて上野發、といふわけで、もうその他には三十分の餘裕もありません。東京驛のことを君にもお知らせしたかつたが、日曜でないので、遠慮されたのでした、どうです、一日學校をすつぽかして右の時間に東京驛で落ち合つてくれませんか、さうしていたゞければ實に難有い、但し、無理にいへないことで、とにかく申し出てみるといふ次第です、松島村には行くことになるか否かまだ不明なのです、東籬翁と林柱次郎君に三週間ほど前に

相談してやつてあるのだが葉書一本の返事来らず、先づ青森まで行けば解るだらうの程度で出かけるわけなのです、博さんからさういつて来れば、その様なことになつてゐるのかも知れませぬ、折角の御厚意を無にするわけで、濟みませぬが、許して下さい、小生こゝ五六日、毎夜二三時間しか眠つてゐませぬ、何しろ二ヶ月留守にするわけですし、「詩歌時代」創作の手配りもしておかねばならず、旅費も作らねばならず、といふわけでした、二十一日福島泊、二十二日盛岡泊、廿三日青森泊、廿四日札幌着、その後一ヶ月半北海道巡りです、然し、お手紙難有う、感謝します、

九月十九日正午 牧 水
山 蘭 兄

今、電報「アオモリデ オマツシテオルカトウ」
(封筒裏面に)

六三

九月二十八日、札幌市外、札幌温泉藻岩館方より、旭川市、齋藤瀏様宛(手紙)
拜啓、豫定通り廿四日夜當地へ参りました、到着當夜よりの人間攻めにて埒もなく落城、忽ち半病人と相成り、一昨夜市中を去りこのあやしき宿に引上げて辛くも人を避け、昨日臥床、今日漸くこれより肝心の揮毫にとりかゝる始末でございます、ために當地着のことなど早速申上ぐる筈でございますが失禮してをりました、お赦下さいまし、その後もいろく御配慮たまはりつゝあります由を當地にて承り、非常に難有く存じをります、御禮の申しあげやうもなき心地でございます、明朝當地發、岩見澤へ参り、十月二日いよくお目にかゝります、御地着の時間等岩見澤より申しあげます、とにかくこゝ數日中でございます、家内よりも呉々よろしく申しあげました、

アルコール中毒式の亂文亂筆御ゆるし下さいまし、
九月二十八日 若山牧水

齋藤瀏様

なほ、お言葉に甘え、御宅に御厄介になりましてもよろしうございませうか、甚だ厄介なる人間でございますが、酒を毎日一升平均いたゞきます、これは朝、大きな徳利のまゝ小生の側にいたゞきおき、これを適宜に一日中に配分して頂戴致します、おさかなは香の物かトマト(生のまゝ、鹽にてたべます)かありますれば充分でございます、食事の時もたいていさうしたもにて結構でございます、可笑しうございしますが、右、申しあげておきます、

六四

十月十三日、池田町より、岩見澤町、太田凍影様宛(手紙)
學校先生、兼文房具書籍商店二葉屋主人菊池君方にて謹書す。サイクンはつづれて此處にも面を出し得ずといふと雖も牧水先生依然大元氣に各所を荒し廻

りつゝあり、この席は面白い、オイシヤさまあり、アブラ屋さんあり、ヨウブツ店主あり、ユウビンキヨクインあり、いづれもあやしきつらを側の「油」に染めて天地人生を談じつゝ、そゞろに凍影大人の在らざるを悲しむとむ言爾。

十月十三日 牧 水
太田凍影様

六五

十月二十二日、十勝國帶廣町在途別温泉より、長野縣、綿引惣吾様宛(葉書)
おもひかけず、おたより、難有う、北海道、おもひの外の難澁、然し、幸に山河あり雪あり酒あり友情あり、割に元氣です、今も此處を立ちがけに茶碗なり、室を包む落葉木枯の音、牧 水
オシヨウサマニキテモラヒタキサムサカナ
オシヨウサマデモナミダナガサムサムサナリ

十月二十二日午後三時
 (喜志子とのよせ書)

六六

十一月廿四日、青森市外松森、船水君方より、
 沼津市創作社、大悟法利雄様宛(手紙)

昨日、此處に來ました、漸く、ほつかりの氣持です、
 けふ、これより五所川原へゆき、明後日盛岡です、
 此處に來て、留守中の御心づかひの思はるゝこと一
 層切なるものあるも不思議の様です、

越前君のこと、氣の毒千萬なれど、雜誌に見舞金募
 集を出すことはよしませう、その代り今日中にも小
 生文案を作りお送りします故、社中の主なもの、こ
 とに越前君に縁故のありさうな人たちに印刷して送
 り出して下さい、御手数ながらお頼みます、
 紀行は或は間に合はぬかも知れぬ、編輯記だけは待
 つて、下さい、多分盛岡からお送り出来るでせう、
 お手紙の諸用件、片づけます、
 いゝ子ちゃんたちによるしく、

函館より荷物が行きますが、開かないで、冷い所に
 置いて、御保存なしおき下さい、
 とりいそぎ右當用のみ、當地平地に雪無し、然し、
 凍めることは北海道とおなじ、
 やれ〜長い北海道でありました、

十一月二十四日朝

青森市外、松森、船水君方 牧水

利雄様

六七

十二月四日、沼津市市道より、近江、鍵源三郎
 様宛(手紙)

お珍しきものを、難有うございました、いつも、濟
 みませぬ、酒によくお茶漬によく、また來年もおね
 がひします、こちらからも何かと考へてゐます、
 神經衰弱はいけませんね、私のこんどの脚のたゝな
 い病氣ももとは神經衰弱なのだから驚きま
 す、ニンニク(くさいやつ)を御存じですか、あれを
 すゝめられてたゞ始めて(初めなかく)たゞにくか

つた、刺身とか煮しめとか香の物とかに添へてたべ
 るがよい様です)夜がよく眠れてたいへんよくなり
 ました、試みてみませんか、

十二月四日

牧水 生

鍵源三郎様

六八

十二月十七日、沼津市市道より、北海道、太田
 平様宛(手紙)

よせがき、難有う、こんなのを見ると、どこか二三
 軒さきに君たちが集つてゐる様で、ヨシ來たとばかり
 自分も飛び出したくなる氣持だが、サテ、考へて
 見ると否かである、寂しいことです、あの小ぢんま
 りした部屋、ゐり、ストーブ、あり〜と目に見
 え、そのうしろで、こと〜と物きざむ音なども聞
 えます、

平野行彦も實に君たちによく似た青年です、橋本君
 といひ、どうして斯うみんなが似てゐるのだらうと

家内と泣笑ひをしました、函館までが青森になり、
 とう〜五所川原まで一緒に歩きました、仲よくし
 てあげて下さい、

新年號は四十頁位のものしか出來ますまい、さび
 しいが、休刊よりましとおもつて下さい、今迄の十
 分の一位の工場で、いま、やつてゐます、(註、大
 火にて印刷所全焼せしなり)

今度の北海道行は諸君に逢ひ得たことだけで、たく
 さんでした、あの方が却つて附録になりました、
 そんな氣がします、どうか眞面目に、そして熱を以
 て、勉強して下さい、僕もやります、浮かれるのを
 ばよませう、根強くやります、

今朝は、行脚記を少しでも書くつもりで四時か
 ら起きてゐるのだが、なか〜書けない、その
 うち夜が明けたので、いま、一杯のところ、簾
 鶯がツイ濡縁のそばの竹に來てないてゐます、
 めじろ、もず、みそさ〜いなども聞えてゐます、
 小樽と岩見澤とでは近いが、沼津と北海道とで
 は遠いなア、

十二月十七日朝六時半 牧 水
凍影 兄
一郎 兄

やつとうの凍影が頭禿げぬればその誰やらが撫で、
悲しむ
一郎が鼻のつまりはしくしくと始終なみだをこぼしてをるため

おくさんよろしくとひよつと書きかけつかかば一郎がまた泣くらむか

六九

十二月二十日、沼津市道より、栃木縣、高鹽背山様宛(手紙)

火事に就いてそんなに心配していたと聞き、大に慚愧にたへませんでした、實はあの大火事の殆んど終りになるまで我等一家の者は誰一人知らなかつたのです、烈しい西風で、丁度その風上に在り、ことに非常な怒濤だつたのでそれに押されて、火事

場騒ぎはちつともこちらに聞えなかつたのです、みんなに呆れられました、事實でした、然し、見舞や、焚出や、持出物の預りやで、あとの騒ぎは人並でした、

新年號、静岡か東京に持ち込むほかあるまいと思つてゐましたら、耕文社が附近の村の小さな印刷所を借り切り其處で自家の職工を使つてやらせるといふので、頁數を半減していまやらせつゝありますが、果してうまくゆきますか、心配してゐます、二月號からは大丈夫です、いま耕文社がバラックを建てつゝありますから、

「峽間」、來年になりますか、それもいゝでせう、廣告の木版がやけたので、それこれいま中野君の方に小生からも問合せてあるところでした、賣る方には大に力を入れます、

新年號に君の歌がなく、淋しいことでした、もつとも小生のも無し、代りに東籬、山蘭がくつわを並べて出ました、就中東籬君の意氣込は凄いもので、わざと歌のことを語るべく彼は先日沼津までやつて

御不例御危篤で、御いたはしい氣持です、

十二月二十日曉

牧 水

背山 兄

七〇

十二月二十五日、沼津市市道町より、岩手縣、

福地房志様宛(手紙)

福地兄、御手紙、難有う、多忙にまぎれてこちらよりは別によさしあげずにをり、失禮、御ゆるし下さい、お訪ねしたことは小生にとりてこそ却つて幸福でありました、あの時二日間の記憶は小生の一生を通じての最もよき記憶として小生の心に生きてをることを信じます、なほ、念のためあの日のことを短い文章につづつておかうと思つてをります、

歌に向つて改めて御精進なさることは大におすゝめします、驚いたのは沼津に歸つてみますと津輕の加藤東籬君が小生に先廻りして二三日前から小生を待受けてをりました、津輕で別るゝ時、ゆつくり歌の話がしたいが斯う多人數の中では思ふ様にならぬか

來、四五日滞在してゆきました、歌のほか矢張り自分の生きる道はないといふことをしみじみ覺つたといふのです、難有いことです、山蘭君とも逢つて話したらしく、ために山蘭亦たけつ起したといふわけです、

さうなると一層あはれなのは翠村だが、ほんとに困つたものです、救濟方法といつても第一地元の東京の連中が甚だ彼に同情が少いのです、これは彼の細君に對する反感もあるらしい、とにかく近々小生個人として見舞金募集の手紙を諸方に出すことにします、やけ石に水ですが、とにかくやつてみます、山蘭君が近日病院に行つてくれる筈です、齋藤茂吉君に君からも御禮狀一本出しておいて呉れませんか、赤坂青山、青山脳病院内いゝのです、

新聞の新年號選歌に追はれて、毎晩半徹夜です、今朝も一時に起きていま六時、これから一杯やるどころです、先日、古田老人より火事見舞を貰ひ大になつかしうありました、齋藤君はどうしてゐます、まだ恢復しませんか、

ら沼津まで行かうとおもふ、と云ひますので、是非
來給へとは云つて來ましたが、斯う眼前に實行され
やうとは思ひもよらなかつたのです、同君も切りに
歌に更生する、歌のほかに眞實に自分の生を托する
ものはない、と繰返して云うて歸りました、孫の二
人もある人がこれほどの熱意を持つて語る、時、
小生は涙なきを得ませんでした、ほんとに歌をば眞
面目にやります、木や草や山や川を歌ふものでは
ありませぬ、みな自分を歌ふことに當るのです、そ
のつもりで初一步から踏み出す心でやつて下さい、
小生もやります、

(紙がつきました、別紙に書きつぎます)

その二、

福地兄、歌の上に、御自身内生活の上に、革新を企
てらるゝことは大にいゝとおもひます、但だ、それ
を實生活にまで及ぼさるゝことは、これは第三者に
は解りにくい問題でもありますが、とにかくよほど
御熱慮なさるがよいかとおもはれます、よほどの自

信と目的めざとがきまらない限り、徒らに騒ぎを起すに
とゞまる場合がないとは限らぬ様に考へられます、
老婆心ながら、申添へておきます、

凍餅などお送り下さるとのこと、難有う存じます、
これはお甘えして頂戴します、おひまのときにお送
り下さい、洋傘はありましたか、破れてはありますし、
お子たちの學校通ひの雪ふせぎにでも御使ひ下さら
ば幸甚です、さうして下さい、

どうか皆さまに呉々よろしく申上げて下さい、い
づれ、また必ず御邪魔に出ますと申上げておいて
下さい、

まだ、新年もの、急ぎの用が残つてゐるのですが、
御崩御を聞き、手につかず、却つてしみぐとし
た氣持でこれを認めました、

十二月廿五日

若山牧水

福地房志様

關、及川兩君によろしくおつしやつて下さい、

七一

十二月廿八日、沼津市市道町より、北海道、平
野行彦様宛(手紙)

平野君、結構なもの(註置時世を、難有う、まことに
恰好な紀念品で大に喜びました、細君と爭奪戦の結
果、小生勝ち、只今背後の本箱の上でキツチン〜
やつてゐます、

時々、夢に見ます、よき數日間であつたとおもひま
す、

一度こちらへ、お二人でおいで下さい、お子さまで
も出來るともう女の方は動けなくなりますよ、

非常な多忙で、昨日今日、流石に頭がぼうつと
してゐます、

もう一二日のしんぼうです、

夫人に呉々よろしく申して下さい、お揃ひの寫
眞を一枚お送り下さい、

とりあへず、

十二月廿八日

牧水生

平野行彦様

七二

十二月三十日、沼津市市道町より、廣島縣、山
隅衛様宛(手紙)

山隅君、御手紙と御贈物、まことに難有う、あの樽
の着いたのは夕方、既に一杯始めてゐましたが、
急いで蓋をとり、早速頂戴しました、色といひ香と
いひ、また味といひ、實に難有きものにて、且つ、
小生の嗜好に甚だ相合ふものでありました、珍重し
つゝいたゞいてをります、

この夏、お訪ね下され、難有うございました、そ
の後、旅先にて御難儀なされし由、生馬の目を抜
く空氣のすさまじさを御痛感なされしこと、おも
ひました、

小生、三四月のころ、ともすると御地方へ参りま
す、参りますればお目にかゝりたく存じをります、

十二月三十日

牧水生

山隅衛様

七三

十二月三十日、沼津市市道町より、広島市、三浦敏夫様宛（手紙）

三浦君、御ころろざしの干物、昨日到着、早速昨夕
玩味しました、實においしく、それにつけても頑迷
不分曉の広島驛員に對し憤慨せざるを得ませんでした
た、これは戯談、まことに難有うございました、あ
の、うすくさいて干したのは何です、ふぐですか、
ちひさいのはさよりでせう、

ずつと広島ですか、都合では三月前後、お訪ねし
ようかなど、考へてゐます、國に歸る用事があり
ますので、

伊勢崎君はどうしてゐます、

まだ、お目にかゝらずですが、奥さんによろしく、
いよく押迫り、火車の運轉プロベラに似たり、

十二月三十日

牧 水

三浦敏夫兄

七四

十二月三十一日、沼津市市道町より、長倉宜一様
宛（手紙）

いま、お米をおねがひにゆくとかいひますので、こ
とづけます、いづぞやの硯、小生も忘れてをりまし
たが、今日、お掃除をしかけて見付けました故、お
届け申します、

お正月、何となく淋しい氣がしますね、元日、二日、
を御遠慮申し、三日の午後夕方かけてお伺ひしたい
とおもひますが、御都合いかゞでございませうか、

小生、終に今曉も夜業でした、完全に忙しさに
暮れた今年でありました、いっそ、明朝も起き
るつもりです、不思議と歌が少しづつ、出来だし
ました、

三十一日

牧 水

汀峰兄

三日に限らず、いつでもいゝのです四日でも五日
でも、

昭和二年

一月六日、沼津市市道町より、信濃、中村端様宛(手紙)

實は今日あたり、電報でも打つて御様子を問合さうとおもうてゐたところでした、二月初めときまれば、それもいゝでせう、では、いま諦めて、そのころ改めてお待ちします、酒は時の都合といふことにしておきませう、小生もダメになつてゐますが、それでも死灰時に燃えざるにあらずで、やればやります、と先づおどしておく次第だが、何はともあれあはれなことになりました、

歌の話、しみじみとして聞きました、少し神経衰弱式だが、このごろ、不思議に出来ました、あれらの外、未発表のものが六七十首もありませう、とにかく今年は少し本氣になります、ふな／＼してゐるのがいやになつた、

貴兄の作、いゝ時は實にいゝのだが、氣が抜けるとひどく抜ける癖があつて不安心です、ものをすうつ

と撫で、濟ます癖、鼻先で笑つてものを投げる癖、

誰しもが君の作に對して慊らず思つてゐる所らしい、氣の入らぬ百首より氣を入れた十首の方が確かにいゝ、そして、一度作つたら、拙いとおもうてもなか／＼捨てられぬもので、要するに作り始める時の用心が肝要とおもうのです、

加藤君は、お察しの通り、あれで孫が二人あるのだから驚く、高山君のも面白かつた、和田君がまづかつた、君のと高鹽君のとが新年號に遅れたのは、惜しかつた、二月號は一切を早める故、遅くも十二日までに届けて下さい、

心勞と多忙とで神経衰弱が目につつて来た、温泉に行かうとおもへばアル中の心臓が恐く、昨日診察を受けた所、その氣で行けばいゝとの許しを得たので、湯もぬるし近くもあり、二三日うちに長岡温泉にゆくつもりです、向うで爲事をします、とにかく、二月に逢へるとおもふと嬉しい、惶しいおもひをするのはいやだからせい／＼ゆつくりする様にして來るのだネ、酒は強ひないよ、お互

ひに勝手飲みといふことにしませう、娘さんもお嫁さんでせうね、オヤヂ、氣が氣でないわけだ、

一月六日 若山牧水 中村終花様

明後日、金澤君の墓參に三河へ行つて來ます、

二

一月八日、沼津市市道町より、丹波國、出口直日様宛(手紙)

常に御無沙汰致し、相濟みませぬ、折々お送り下さる珍しきものなどをば悉く喜んで頂戴してをりながら御禮も申上げず、まことに申し譯ありませぬ、おゆるし下さいまし、旅行の留守中にも御心づかひ下さいました由、厚く御禮申します、山陰道の方へ参りたくと多年心がけてをりますが、いまだによう参りませぬ、参ります時はお訪ね申したくと樂しみを参ります、但馬の朝來郡に藤原東川君が居り、彼の村

にも参りたくと永いこと考へてゐるのです、若し東京にでもおいでる折がありましたらお立寄り下さいまし、お國の方は雪深きこと、存じます、小生の庭つゞきの松原の中には椿がさかんに咲いてゐます、梅乃さまへよろしく申上げ下さいまし、

一月八日 若山牧水 出口直日様

三

一月廿六日、沼津市市道町より、朝鮮、福島勉様宛(手紙)

福島勉君、並々ならぬ御厚意に對し、わたしは全く御禮の言葉を知りませぬ、あの思ひもかけぬ偉大にして珍重すべき御贈物の届いた日、たゞ瞑目合掌して感謝しました、そして、寫眞屋を呼んであの鶴を庭の梅の木にかけ、その前に並んで我等家族五人(旅人一人だけ、中學の何やらの當番で遅くなり間にあはず)が寫眞をとりました、出來次第お送りします、(ナマケ寫眞屋故、遅くなりませうが)まだお目にか

りませんが、奥さんにも呉々御禮申上げ下さい、喜んだのは小生一家の者のみではありません、あの肉をば沼津にある知合の八軒に分ち、驚喜させました、そして、まだその一片は味噌づけにしてとつてあります、不日信州からやつて来る中村終花を待つためであります。

次ぎに朝鮮に來い、との御厚意、これはまた別様の意味に於いて感謝せねばならぬことなのです、觀光としては是非一度は行つて見たい所であり、その意味からも難有く、また一方の半折會の方をうまくやつていたゞけるとすると、これも大に難有いのです、實際目下小生は普請の失敗、（詩歌時代）の失敗のため、身にそはぬ負債を負ひ居り、利子を拂ふだけでも全力を擧げて足りない有様なのです、印税など知れたものなり、ことにいま不景氣で本屋が萎えてをり、多少とも纏つた金を作るとなれば半折會の外なこのです、その意味で北海道にも出かけたのですが、これは失敗でした、やりかたが無理だったのです、其處へ朝鮮へ出かけるといふことになる、非

常に難有く早速にも出立したいのですが、悲しい哉、健康の具合がわるいのです、永い間無理をして來たゞめなので、今一押し押してみるかといふ氣も出ますけれど、萬一のことのあつた際をおもひますと、また考へられるのです、御禮の手紙の遅れたのも、この、どうしたものかを考へてゐたためなのです、思案に余り、風邪氣でもありましたので、昨日、信用して居る醫師の許へ相談に行つてみました、矢張りいけないといふのです、心臓が弱つてゐる（心臓病といふのではないさうです）ため、全體に抵抗力が無くなつてゐる、當分静養が必要だといふので

福島君、小生、これを機として（昨日から發熱、就床）うんと身體に注意し、出来るだけ速く健康を恢復し、なるだけ早く御地へ行くことにします、時期に就いてはもう暫らく考へさして下さい、（六七月のころか、秋か、といふ漫然考へてゐますが）そしてゆつくり打合せのうへ、出かけませう、とにかく、出来るだけ早くお目にかゝりたいものです、他の社

友諸君へは貴君より右様宜しくお知らせおき下さいませんか、

大阪での趣意書をとのことでしたが、幸ひ北海道でやつた分が手許にありましたからこれをお送りします、そちらでやるとすれば無論改めて刷らねばなりません、重なる人に参考にするにはい、でせう、

熱のため眼痛み、（これも心臓のせゐださうです）

文字ろくにかげず、亂筆、略筆御免下さい、

一月廿六日

若山牧水

福島勉様

四

二月二日、沼津市市道より、東京、長谷川桐子様宛（手紙）

桐さん、元氣ですか、不景氣の話ばかり多いが、一つ、あなたの元氣な話でも伺はうではありませんか、何だか、元氣さうにおもはれ、たのもしくおもっています、こちら、小生は一月は不の字でしたが、二

月は好きな月故、大に好景氣たらむとしてゐます、姉女は髪を染め、亭主をいぢめることに努力してゐます、罰が當り、數日來、音楽家となり、ほそ／＼となりました、チンヨンブウ族の活動は實にめざましきものにて彼等のためにのみこの一家は存在してゐる様なものです、歌は出来ず、借金の利子の苦勞をしい／＼作り給ふ所の牧水大人の作などを見て少しは何とか思ひなさい、二月號は五六日發行、

では、サヨナラ、

二月二日

牧水

桐公夫人殿

五

二月廿五日、沼津市市道より、熊本市、眞崎白城様氣附、大悟法利雄様宛（手紙）

としをさん、どうだね、旅のけいきは、日に三度、お茶の間で君の噂が出る、あ、だらう斯うだらうといふ想像談だ、こちらは相變らずだ、小生、崖から飛ぶつもりで酒

(朝と晝と)をよすこと約五日、忽ち癡人となつて、全く一種の斷末間であつた、其處で悟りを開いてきたものもくあみとなつてしまつた、それでこの數日や、元氣よく机に向つてをる、

三月號も原稿はもう三日も前に全部渡したのだが(社便と表紙とを今日明日)校正一向に捗らぬ形だ、遅れてもたいしたことあるまい、菅原君より今日來信、大分に於ける御様子を知るを得た、やつぱり本當の旅は日向あたりからだつたらうな、

鹿兒島はどうでした、熊本は如何、とにかくみんなよろしく、

今朝、深い曇で僕の机がまつ暗なため君の部屋に出かけてみたが、やつぱりおちつけず直ぐこちらへ引きあげた、このごろ、イヤな天氣ばかり續くので弱つてる、

二月二十五日 牧水 水生
利雄様

六

三月二日、沼津市道より、信濃、中村終花様宛(手紙)

校正する時にもさう思ふたのであつたが、一冊となつてゆつくりと見直すといよゝその感が深い、三月號では矢張り君の一番佳い、第一、構へのなくなつたのが歌に深みを與へて來た、この調子で、例の無難作癖を避けられむことを望む、小生の作は如何、

その後の様子聞きたし、
三月二日 牧水
終花 兄

酒が飲めないので、君が見えたら、湯ヶ島へでも行かうかと考へてゐる、

七
三月三日、沼津市道より、東京市外大井町、和

田山蘭様宛(手紙)

紹介狀を書くのはわけはないが、小生は事そのことに感心しない、とても君苦しいよ、第一、君の健康が耐へ得まいとおもふ、多忙と同輩間のおつれき其他、世事うとい君にはどうも不向きの様だ、月給とて僅かなものとおもふ、そのために永年の道を捨つるのは決して上策でないと思ふ、とにかく小生は先づ御一考を煩はしたい、

それとも、是非とならば電報を下さい、明日でも書いて送ります、御熟考を願ふ、

三月三日 牧水
山 蘭 兄

八

三月十日、沼津市道より、八幡市、三苦守西様方、大悟法利雄様宛(手紙)

ものもあらうに、松葉杖のお土産とは全く思ひつかなかつた、肥後の熊本の馬はなか／＼馬鹿にならぬとみえる、

行けたら、最初の思ひたち通り廻つた方が思ひ残りがなくていいだらう、こちらは一向に急がない、まだ手をつけないが、明日あたりから「創作」にかゝりませう、

然し、たいしたことではなからうが、傷には呉々も氣をつけて下さい、無理して膿んだりすると大變だ、小生もこの十日ほど前より元氣よくなり、この七日また草鞋をはき秋灯君を誘うて箱根の山の中を歩いて來ました、雪が一二尺づゝも積つてゐたには驚きました、そのため一昨夜歸宅、昨日今日君の眞似してピッコのこと、まだ牧水も威張れないね、

地震の時はまた留守でした、但し何でもなかつた、こゝは地震にはいゝらしい、町は相當ゆれたさうです、九州はどんなでした、

長崎では間に合ふまじく八幡宛にします、八幡ではいちめられるでせうが、其處がおしまひ故、御奮闘ありたし、

子供が待つてゐます、先刻箱根から一緒に來てゐる鈴木君を相手に君の部屋に椿の花を挿してゐ

た、いやな天気ばかりでしたが、今日から漸く定つた様です、庭の豊後梅が昨日の夕方から急に色めいて咲き出しました、今のところ、庭の女王さま、みんなよろしく、京子さんは病氣ぢやないかな、

三月十日

牧 水

利 雄 様

(子供たち聲を合せてうたひける歌)

ところはひごのくまもとで

とらをもひしぐあーとんが

うまにかぢられあし折られ

はひずりまはるぞあはれなる (封筒裏面に)

九

三月十二日、沼津市道より、大阪市、大島武雄

様宛 (手紙)

阿母様との東京行、は實に耳寄りな話です、是非ひとつ實行せられむことを祈ります、そして、行きな

り歸りなりに、それこそゆつくりと休んで貰ふことにきめて下さい、もう何だか明日あさつてのうちにその事のある様なおもひがします、若草の君も御一緒だらうと想像しますが、いよゝゝ以て難有い話です、是非さうして下さい、家中して、今日から待ち始めました、

地震、その位で、ようござんした、どうしても大きく考へやすく、氣をもむのです、

雑誌の話、先日門林君からも聞きました、神戸の「ぐみ」の様なものですか、あまり大きくかゝると厄介ですよ、

小生もこの四月早々九州及び朝鮮にゆくはずでしたが、どうも身體おもしろからず、延ばすか止すかにせねばならぬ有様です、どうかしてこの旅かせぎをやめたいとおもひますけれど思ふに任せぬ次第です、

とりあへず、東京見物の第一のお迎への手紙を認めました、阿母様たちによるしく、

三月十二日、

牧 水

大島武雄様

一〇

三月十三日、沼津市道より、信濃、中村端様宛

(手紙)

凍豆腐、難有う、丁度、君があんまりしびれを切らさすので耐へ切れなくなり、且つまた久し振に草鞋がはいてみたく、と云つて一人で歩く勇氣はなく、裾野驛で其處の社友鈴木君といふを引っぱり出し、湖尻峠を越えて箱根山塊に入った、驚いたことには峠向うは尺餘の積雪で、きれいな枯野を豫想して来た仙石原など、路も深もみえぬ有様でした、翌日の大湧谷附近はなほ深く、ほうふゝのていで逃げ歸つたところに、あれがうまゝと煮てありました、嫌ひどころか大好物です、毎年重田君にねだるのだが、今年は忘れてゐた、

一月から四月に延びるとなると流石の小生もそろに敬意を表せざるをえない、延ばすことでは相當自信があるのだけれど、その代り、来てゆつくりする必要がある、四月上旬だと湯ヶ島の山櫻が咲くで

せう、

今日、和田、高鹽、菊池三君連名の手紙が来て、今度三人して雑誌を出すことになつた、どうか氣を悪くしないで呉れというて来た、氣を悪くするどころかさういふことのあるのを待つてゐた形だと喜びの手紙をいま書きました、丁度いま、時期でせう、出来るだけ加勢してゆきませう、君にも何か云つて行つたでせうが、矢張りこの加勢程度が恰好と思ふ、深入りはしない方がいい、けふはまた暴風雨、今年は實に氣まぐれな天気ばかりで、本當にいやになる、

三月十三日

牧 水生

終 花 兄

一一

三月十四日、沼津より、兵庫縣、藤原東川様宛

(葉書)

東川が偉大なる奴ぶらさげてはだか飛び出し地震恐縮 読人不知

(註、震災當時入浴中にて裸で飛び出せし由を聞きて)

一一

三月十五日、沼津市道より、千葉縣、神原克重様宛(葉書)

網走中學が焼けましたね、並ならず驚きました、岡の上だし水の便はなく、渡邊校長、さぞ困られたこと、おもふ、寄附か何かで出来た様に聞きましたが、あと直ぐうまくゆきませうか。半病人、ねたり起きたりで、忙しがつてゐます。君の方は何といつても悠々でせう。

三月十五日

若山牧水

一三

三月二十三日、沼津市道より、栃木縣、高鹽正庸様宛(手紙)

先づ「峽間」の發行をお祝ひ申します、装幀を氣にしてゐたのですが、これも大變よかつた、たゞ、誤植がひどい、君より書き抜いて送られた位

あのものではないとおもひ、こちらで調べさせましたらあの二倍以上もありました、こちらのをもと、して四月號に出すことにしてあります、

五月號を「峽間」批評號とします、君の方で誰にやつて貰ひたいとおもふ人がありましたら至急知らして下さい、

前にお預りしてゐた原稿、遅くなりましたが、今日別便にてお送り致します、寫眞もありましたが、これは無斷頂戴といふことにしたいとつておきました、どうぞさうして下さい、

漸く春暖を覚えますね、御元氣いかがですか、大悟法がなかつたもの(三四日前、負傷して歸宅)ですから、忙しくてこの手紙もけふ漸くの次第です、

三月廿三日

牧水

背山兄

一四

三月二十三日、沼津市市道町より、京都府、坪

倉重美様宛(手紙)

御手紙を拜見し、何とも御返事の書きやうもなく、氣をもみながら數日を過してしまひました、まことに何と申しあげてよきか、たゞ拱手瞑目、この上の御不幸無きやう、負傷せられたかたんの一日も速く御恢復あるやうにと祈らるゝばかりでありました、なほこの大異變註、震災に際し貴兄の沈着と剛毅とをも望むものであります、

社費のこと、御心配なく、おちついて詠歌せられむことを希望します、今月の初めに拜見した貴兄の作がたいへん佳かつたので喜んであたところへ、あの鉛筆がきのお手紙が届いたのでした、

とにかく徐ろに善後策を講ぜられむことを遙かに希望してをります、大事な時ですから第一貴兄のお身體に氣をつけて下さい、

三月二十三日

若山牧水

坪倉重美様

一五

三月三十日、沼津市道より、福井縣、竹中理一郎様宛(手紙)

二三日前、中村終花君が信州からやつて來、娘たちをも連れて伊豆の湯ヶ島温泉に遊び、昨日夕方歸つて來ると玄關に鍔くちやの學生帽がある、見た様だナと上にあがつてみると、皆二君でした、今日は雨、松に降り、桃に降るのを眺めながらお噂などしてゐます、御元氣の由で何よりです、いつか是非お宅の椎の木を拜見に(イヤ實はもう一つその椎の木の蔭あたりにの野心あり)出かけますよ、こちらにも來て下さい、 牧水

(竹中皆二、喜志子とのよせ書)

一六

四月二日、沼津市市道より、朝鮮全南、福島勉様宛(手紙)

ほんの眼の前に囚はれをり、夙くにさしあぐべき手紙をもよう認めずに居りました、その後小生意外に身體の具合よろしく、只今のところでは僅かに起居

に際し呼吸いさぐるしさを覺ゆるほどのことになりました。これを難有いとして早速御地へ参りたいと思ひます。早速といひましてもどうしても出立は來月上旬にならうとおもはれます。御地着が中旬ころ、の位にお思ひおき下さいませんか、大體その位の日取にて、具體的に朝鮮全體の豫定をたて、下さいまし、「創作」の行脚記で御らんでせうが、よくもあつた亂暴な日取で事を續けて來たものと、今となつてわれながら驚いてゐる次第です。幸に先日御手紙の様にゆつくりした豫定をたて、いたゞきますと誠に難有うございます。然し、さう贅澤は申されぬ今度の旅、且つ雑誌のこともあることです。其處はほど／＼によろしき様御きめ下さいまし、日取をきめていたゞいたら「創作」五月號にも發表して一切變更せぬことにきめてかゝりたいと考へます。各地に於ける規約書見た様なもの、印刷は一切そちらでやつていたゞけませうか、さう願へるとして印刷費などはどうなりました。二三口なり若し前金で會費を拂込んでいたゞけるやうな口がありましたら

それを當て、下さいまし。都合あしくば當地にて印刷するか印刷費をお送りするかします故、御申越し下さいまし。市山、武田、皿井、徳政の諸君には二三日うちかんたんなる手紙さし出します。なほ、在鮮社友全部へも印刷した手紙を出したいと思つてゐます。が、萬事は貴君を中心として、事を運ばして下さい、御手数、何とも申しかねますが、よろしくお願ひ申します。入會募集に就いては、所により人により、手数料を一割なり二割なり出してもよろございます。これももお含みおき下さいまし。會費の實收がめんどうなものですから、このことも豫めお含みおき下さい、金のことはエテ都合のわるいものですが、其處をよろしく願ひます。今までの経験によれば、新聞は單に背景にとゞめおき、實際は觸れぬ方がよいやうです。新聞及び新聞社を通じての實地運動で今までに成功した所がありません。ともすると我等はこの新聞力を過視しがち

ですから、一言しておきます。

今月の十五日にもなれば御地着の確實な時日が解りませうが、もしそれまでに規約書(趣意書)を印刷なさる際には「五月中旬來鮮の豫定、各地巡遊の日取は追つて新聞紙(入會者には葉書か)を以て通知する位に書いておいて下さいませんか、本當に今度の旅行で一生のこの種の旅のうち切りにしたいとおもひますので、その往復に二三ヶ所寄つて行かうと考へてゐますため、今のところ、確實に申しあげかぬるのです。悪しからず思召し下さいまし。なほ、社友にて逢つたことのある高田二郎君が京城府南大門通五丁目豊國セメント會社といふへ赴任してゆきました。よき青年ですから何かと御談合下さらば難有うございます。(顔を知つてゐる人は貴君、高田君が新らしく、ずつと舊く皿井、徳政の兩君に逢つてゐます)

とりあへず日程(何處で、何日に、何をすると、といふ風の)を作製して御送り下さいまし、すつかり確實に行かなかつたらおよそのところにて

うございます。

大體の目星がつかまりましたので、これからは一つ一つと具體的にお知らせも出來るとおもひます。感謝、お詫びの言葉を一切省いておきました。

四月二日

若山牧水

福島勉様

一七

四月六日、沼津市道より、島根縣、小豆澤錦潮様宛(手紙)

御手紙拜見、庶務の方に聞いてみましたらばこの前のお葉書が少し遅れて届いた旨、言つてをりました。で、改めて小生より申しあげます。今までの貴兄の社費全部を削除します。そして、今後、無社費といふことにします。これは和田高鹽君等には既にさうしてゐることで、何でもありません。どうか右、御承知下さい。御事情を知らず、ツイ今までほんやりしてゐたことでした。小生も借金に追はれて苦しんで居りますが、額がやゝ大きいだけに却つてやり